（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm><sannpo.htm>）　　　　　[Back](sannpo.htm)

岩倉紙芝居　古典館　宰主　上田啓之

書紀における対外観　―その1　仁徳紀以前

[はじめに](#はじめに)

一章　対外関係が生まれるまで

[蘇那曷叱知と都怒我阿羅斯の来訪](#蘇那曷叱知と都怒我阿羅斯の来訪)

[天日槍のもたらしたもの](#天日槍のもたらしたもの)

[新羅の建國](#新羅の建國)

[倭の奴國の朝貢](#倭の奴國の朝貢)

[神日本磐余彦天皇（神武天皇）の建國](#神日本磐余彦天皇（神武天皇）の建國)

[神代紀―國譲りとその不思議](#神代紀―國譲りとその不思議)

二章　半島をめぐって

[氣長足姫尊の政策転換](#氣長足姫尊の政策転換)

[陳寿と張華　―　魏志倭人伝の裏側](#陳寿と張華)

[東夷と楽浪郡](#東夷と楽浪郡)

[卑弥呼](#卑弥呼)

1. 漢文化を求めて

[半島への進出](#半島への進出)

[百濟―どこまで扶余でどこまで馬韓か？](#百濟―どこまで扶余でどこまで馬韓か？)

[倭から夜摩苔（ヤマト）―書き換への歴史](#倭から夜摩苔（ヤマト）)

[対外観―ヤマトが求めたもの](#対外観)

[むすびに](#むすびに)

**はじめに**

古事記編纂にあたって天武天皇は「諸家のもつ帝紀及び本辭、既に正實が違い、多く虚僞を加へ、今の時に當り、其の失を改めずば、未だ幾年をも經ずして其の旨滅びなんとす。斯れすなわち邦家の經緯、王化の鴻基（大事業の基礎）なり。かれこれ帝紀を撰録し、舊辭を討覈（かく：調べる）して、僞を削り實を定めて、後葉（世）に流（つた）へむとす。」とし、正しい帝紀、本辭を定めんとする意志を示された。王化の鴻基とは、律令の制定、兵制改革、遷都、貨幣経済（銅銭鋳造）への移行、古事記、書紀、万葉集、風土記編纂等の事業である。日本書紀編纂にあたっては、川島皇子以下皇族十ニ人に記定を命じ（681年）、天武天皇没後、持統天皇の五年には、大三輪氏ら十八氏に、その祖先の墓記を上進させたとある。このため、古事記と異なり、一書、一書と異説が組み込まれ、複雑な展開となっている。その中で、仁徳天皇紀までの対外観に焦点をあてて、書紀が言はんとしていることを読み取ろうとするのが今回の試みである。

神武天皇が日向から東征するのは陸路でなく、海路であった。水軍つまり、海軍を必要とする。ところが、橿原の地で紀元前660年に政権を樹立すると、海軍はどこへやら、以降860年、まるで鎖國のような状態が延々と続く。対外記述があらはれるのは、御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）の御世、紀元前33年、蘇那曷叱知の朝貢である。これは任那國の王子とされ、任那は御間城から命名されたといふ。続いて、都怒我阿羅斯が敦賀方面から来訪したこと、次に、新羅の王子、天日槍が播磨から近江、但馬に至り帰化し、神宝をもたらしたことに言及する。一方的に半島から聖王の徳を求めてやってくるといふ設定である。

次に対外記述に触れられるのは、熊襲征伐に香椎宮に入った仲哀天皇に、皇后の口をかりて、討つべきは熊襲でなく新羅であるという神託が下るが、天皇は理解できず、熊襲すら討つことなく崩御されたといふ。この神託の意味を理解した神功皇后が、新羅を海の向こうに発見し、紀元200年に、海軍により、半島の三韓（新羅、百濟、高句麗）を従へたと、唐突に事態が急転する。本来ならば、その海軍は奴國や邪馬台國の海運力、神武天皇の東征の海軍の遺産を引き継ぐものであろうが、860年の鎖國から神託で急に目覚めて半島を制圧したという書紀の設定により、歴史としての脈絡がつかなくなってしまった。

書紀編纂者達とて、魏志倭人伝をはじめ、中國の東夷に関する書や半島の書も読んでおり、自らの記述がそれらに合致しないことも、卑弥呼や倭の五王がとった行動についても十分に分かっていた。しかし、無理を承知で、それに敢て蓋をして、編纂をした。その経緯を考へることは、平成の時代を生きる人間にとっても他人事ではない。それは、「むすびに」に記した。盲蛇に怖じず。大和の先人の経験を読み取ることを目指したのであるが、如何。

（なお、訓読みは日本書紀、岩波文庫にあるものは、それに従っている。）

**一章　対外関係が生まれるまで**

**蘇那曷叱知と都怒我阿羅斯の来訪**

まず、最初に登場するのが、御間城入彦五十瓊殖天皇（みまきいりひこいにゑのすめらみこと）（崇神天皇：しうじんてんわう）の晩年の蘇那曷叱知（そなかしち）1といふ任那（みまな）の王子である。書紀の編者達は、任那國といふものを非常に重要視した。それは、筑紫國から二千餘里、北の方向で、鷄林（しらき）の西南に在るといふ。魏志倭人伝2によれば、拘邪韓國（くやかんこく）にあたり、拘邪韓國から海を渡ること千余里で対馬國、更に千余里で一大國（壱岐）、更に千余里で、末廬（まつろ）國に至り、都合三千里とあるが、書紀は、そうじゃなくて、二千余里で、鷄林に至ると訂正した。鷄林は新羅（しらき）のことで、新羅は、徐那伐（ソナボル）、鷄林（キェリム）、新羅（シルラ）と國号が変化する。その西南に任那國があった。その任那國が蘇那曷叱知を派遣して朝貢してきたといふ。任那については、後にみることとし、新羅の西南のどこか、倭人伝の拘邪韓國、あるいは加羅のあたりとしておこう。

中國においては、天命をうけた天子（皇帝）が「徳」をもって天下を治め、「礼」と「法」を天下にもたらすことを理想とした。周辺諸國は使節を派遣し、中國皇帝の「徳」を慕って入貢する。中國皇帝は臣下の礼をとった周辺諸國の首長に対して王号や爵位を与へてその領域の支配権を認知し（冊封）、中國の政治制度や豪華な文物を下賜し、入貢の返礼とした。「朝貢」には貿易的要素が含まれ、物ばかりでなく、使節は、最新の書物や情報を仕入れ持ち帰り、社会・文化的にも大きな影響をもたらし、漢字文化圏の拡大におおいに寄与をした。しかし、書紀における朝貢は“てうかう”と訓じられることはなく、“みつぎたてまつる”と訓じられ、冊封や制度の普及、中國皇帝が行ふような豪華な文物の下賜はなく、朝貢の要件を充たすものではなかった。

都怒我阿羅斯等（つぬがあらひと）、亦の名を于斯岐阿利叱智干岐（うしきありしちかんき）は、意富加羅（おほから）國の王子である。意富（おほ）は尊称で加羅國であるが、三國遺事「駕洛國記」によれば、後漢、世祖、光武帝の建武十八年(AD42年）に、亀旨峰（クジボン）に天から箱が垂れ下がり、開けると、六個の黄金の卵があり、翌朝孵化して童子となり、その童子を王に迎へ、この地域に國が誕生したといふ3。それぞれが駕洛國、大加耶、星山加耶、阿羅加耶、小加耶、古寧加耶、加羅六國の王になるが、特に優れた首露（スロ）を全体の王となした。駕洛國は加耶、伽羅、狗耶國、南伽羅、金官國とも称され、対馬から望見され、良港があり、古来より倭人が往来する拠点であり、鉄の産地であった。首露の王妃は、錦繍（錦と刺繍を施した絹織物）、綾羅（あや絹とうす絹）、衣（上半身着）裳（下半身着）疋（二反）段（一反）、金銀珠玉、瓊玖（美しいおび玉）、服玩器を持参してきたインドのアユタ國王の娘、許黄玉（ホファンオク）4とされる。この婚姻の背後には、奢侈品貿易に携はっていたインド人の旺盛な交易活動があった5。駕洛の鉄を欲したのは楽浪郡の漢人や倭人ばかりではなかった。また、古代の交流は平成時代の我々が想像する以上に、往来があったことに留意すべきであろう。

蘇那曷叱知は瀬戸内海を航行し、大和川を遡り、奈良盆地（中洲）に入ったと思はれ、これは伽羅との交易ルートに沿ふ。都怒我阿羅斯等は、日本海側、敦賀の港、気比（けひ）に着いた6。新羅からは日本海沿岸に着くルートがとられていた。新羅や金官加羅の最高官位号「角干」をツヌカ（シ）と訓じるので、阿羅斯等が名となる。于斯岐阿利叱智干岐の干岐は小國の王号であり、阿利叱智が名であり、阿羅斯等と似ている。于斯岐（うしき）は”牛来“、蘇那曷の蘇は于斯、朝鮮語のsio、那曷は岐、来と同義、、出る、行く朝鮮語の語根na-kaをうつしたもの、とされ7、于斯岐と蘇那曷は同じであり、どれも同一人物とされるようである。都怒我阿羅斯等は、朝貢ではなく、日本國（やまとのくに）に帰化を求めたとある。しかし、一云8において、そうじゃなくて、童女を追いかけて来訪したとする。阿羅斯等は國に居た時、農作業に使っていた黄牛が郡公に食はれ、その代償に白石を得、寝所に持ち帰ると美麗き童女に化し、これと交はらんとすると、忽然と消へた。彼の妻は童女が東の方から来たものであると告げ、阿羅斯等は童女を追って日本（やまと）に来る。童女は、日本の難波の比賣語曾（ひめごそ）社の神、あるいは、豐國の國前郡（大分県東國東郡姫島村）の比賣語曾社の神の化身であったといふ。この話にしても、半島の南とは女（むすめ）を娶るために相互に往来のあったことを物語る。倭人が半島の女（むすめ）を求めるといふ話もしばしば見える。特に美人とされる新羅の女（むすめ）を憧れたようである9。

書紀は渡来人の起源について、朝貢、帰化、童女を求めてと三つの動機を紹介し、朝鮮半島の南の國の王子らしき人物が日本（やまと）にやってきたことから、対外記述をはじめた。

1)「任那國、蘇那曷叱知（そなかしち）を遣（まだ）して、朝貢（みつぎたてまつ）らしむ。任那は、筑紫國を去ること二千餘里。北、海を阻て以て鷄林の西南に在り。」書紀巻五、崇神天皇[六十五年秋七月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki14.htm#六十五年秋七月)

2)　魏志倭人伝　[帯方郡より倭に至る](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi1.htm#韓國)

3)「身長は九尺、則ち殷の天乙、顏は龍のごとくしてまさに漢の高祖、眉の八彩は則ち有唐の高（堯）、眼の重瞳は則ち有虞の舜、其の於月望日即位なり。始現し故に諱を首露（スロ）とす。或は首陵と云ふ。【首陵は是れ崩りて後に諡するなり】國を大駕洛と稱し、又伽耶國と稱す。即ち六伽耶の一なり。餘五人おのおの歸して五伽耶の主と爲る。」三國遺事「駕洛國記」[古代史獺祭](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokuiji/karakokuki/karakoku_gen.htm)

4)「所齎錦繍綾羅　衣裳疋段　金銀珠玉　瓊玖服玩器於是・・・王與后共在御國寢　從容語王曰　妾是阿踰陀國公主也　姓許名黄玉　年二八矣・・・妾也浮海遐尋於蒸棗　移天夐赴於蟠桃」駕洛國記、建武二十四年(AD48年）、（[古代史獺祭](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokuiji/karakokuki/karakoku_gen.htm)）

5) 「陸のシルクロードにおいて、『インドの商人たちは､カシュガル､ヤルカンド……トゥルフナンなどの遠隔の地に､通商基地と商人の居住地を建設したが､それらの地はすぐにインド商人ばかりでなく､仏教の伝道者たちによっても開発されることになった。ローマ帝國からの商人たちは､時折ゴビ砂漠に至るまでの進出を試みたが､インド商人たちはシナとローマ世界との奢侈品貿易における仲介者となる利を、直ちに理解した』。そのことは、海のシルクロードにおいても同じであったであろうが、交易圏としては広がりがあった。
　当初の『ローマとの貿易［において］は､東南アジア貿易に対するインド人の関心をあおるのにも、幾分かの役割を果した。ビルマとアッサムを経由しての陸路も探求されたが､海路の方が便利であった。説話集のなかにある金の島(ジャワ､スマトラおよびバリ)での商人たちの冒険物語から明白なように､危険は非常に大きかった。しかし､ローマ人に香料を売って得られる莫大な利益が､その危険を埋め合わせた』。それに最初に東方にのり出したのが､インドの西海岸と南海岸の商人階層であった（以上、ターパル著、辛島昇他訳『インド史 1』、p.99-100、みすず書房、1970）。」・・・・
「海のシルクロードにおける『漢人と東南アジアの商賈・船人との直接接触が盛んになり､広東から北ベトナムにかけての諸港の交易活動も活発となり､ついには漢人も遠くインドにまで赴く人々が現われるようになった』（長澤前同、p.54）。それを示す最初の史料も『漢書』巻28下・地理志である。それは前段と後段に分かれるが、いずれも南インドの黄支國（こうし）が目的地となっている。なお、この史料の最初の注釈者は藤田豊八氏である。
　前段は、漢の武帝の時代、『魏志倭人伝』と同じように、まず中國から黄支國までの交易ルートが示される。「日南郡の障塞（しようさい）である徐聞（じょぶん）､合浦（ごうほ）(この2つは……現在の雷州（らいしゅう）半島にあった)から、船で行くこと5か月ばかりで、都元（とげん）國がある。また、船で行くこと4か月ばかりで、邑慮没（ゆうろばつ）國がある。また、船で行くこと20日ばかりで、諶離（しんり）國がある。歩くこと10日ばかりで、夫甘都塵（ふかんとろ）國がある。夫甘都塵國から船で行くこと2か月ばかりで黄支國がある」とある。
　黄支國は南インドのパッラヴァ朝の都カーンチープラムとされ、現マドラスの近郊にあり、『エリュトラー海案内記』第60節がいうソーパトマである。都元國はベトナム南部、邑慮没國はタイ湾東部、諶離國はマレー半島東岸、夫甘都塵國はその西岸にある國とみられる。マレー半島を陸路横断後、ベンガル湾岸に沿って、黄支國に向かったとみられる。」[古代アジアにおける海上交易](http://www31.ocn.ne.jp/~ysino/koekisi2/page004.html)：[海上交易の世界と歴史](http://www31.ocn.ne.jp/~ysino/index.html)；篠原　陽一
6）「一に云はく、御間城天皇の世に、額（ぬか）に角有（つのお）ひたる人、一の船に乘りて越（こし）の國の笥飯浦（けひのうら）に泊れり。故、其の處を號けて角鹿（つぬが）と曰ふ。これに問ひて曰す。『何の國の人ぞ。』對へて曰す。『意富加羅國（おほからのくに）の王の子、名は都怒我阿羅斯等（つぬがあらひと）。亦の名は、于斯岐阿利叱智干岐（うしきありしちかんき）と曰ふ。傳に日本國（やまとのくに）に聖皇（ひじりきみ）有（ま）すと聞（うけたまは）りて、以てこれに歸化（まいおもぶ）く。』」書紀巻六、垂仁天皇[二年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki15.htm#二年春二月)

7）書紀巻五、崇神天皇六十五年　注釈20
8)「一に云はく、初め都怒我阿羅斯等、國に有りし時、黄牛に田器を負せて、田舍に將往く。黄牛、忽に失る。則ち迹の尋にこれを覓ぐ。跡、一郡家の中に留れり。時に一の老夫有りて曰はく、「汝の求むる牛は、此の郡家の中に入れり。然るに郡公等曰はく、『牛の所負せたる物に由りてこれを推れば、必ず殺し食はむと設る。若し其の主覓め至らば、則ち物を以て償ふのみ。』　即ち殺して食むなり。若し『牛の直は何物を得むと欲ふ』と問はば、財物をな望みそ。『便に郡内の祭ひまつる神を得むと欲ふ』と爾云へ。」俄して郡公等ここに到りて曰はく、「牛の直は何物を得むと欲ふ。」對へて老父の敎の如くす。其の所祭る神は、是れ白き石なり。乃ち白き石を以て、牛の直に授てつ。因り以て將來て寢の中に置く。其の神石、美麗き童女と化りぬ。是に、阿羅斯等、大きにこれを歡びて合せむと欲ふ。然るに阿羅斯等、他處に去る間に、童女、忽に失せるなり。阿羅斯等、これを大きに驚きて、己が婦に問ひて曰はく、「童女、何處か去にし。」對へて曰はく、「東の方に向にき。」則ち尋めて追ひ求ぐ。遂に遠く海に浮びて、以て日本國に入りぬ。求ぐ所の童女は、難波に詣りて、比賣語曾社の神と爲る。且は豐國の國前郡に至りて、復、比賣語曾社の神と爲りぬ。並に二處に祭らるを見む。」書紀巻六、垂仁天皇[二年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki15.htm#二年春二月)

9) 「三年（AD312） 春三月 倭國王使を遣はし、子の為に婚を求む。以て、阿の急利の女（むすめ）を送る。」新羅本紀第二・第十六代　[訖解 尼師今](http://toron.chu.jp/record/3shiki/shiragi16.html)

「美女の中でも、品格と教養のあるものを集めた、いわば美女軍団の団長とも言うべき人を、源花と呼び、美女集団の長に任命した。真興王三十七年（五七六）の項に、はじめて源花を奉じた。はじめ君臣たちは人材を見分けることができないのを心配して、多勢の美女たちを集めて遊ばせて、その行儀を観察してから、これを登用しようと考えた。そして最終的に、美女二人を選んだ。ひとりを南毛といい、もう一人は俊貞といった。仲間の女たち三百余人が集まると、この二人の女はその美貌を競って、互いに嫉妬し合った。俊貞は南毛を自宅に誘って、むりやり酒を飲ませて酔いつぶして、彼女を川までひきずって行き、その中に投げ込んで殺した。そのために、俊貞は死刑に処せられ、彼女の仲間たち（美女軍団）も和を失って、解散してしまった。これは、まるでギリシア神話にでもでてきそうな話であった。それを裏付けるかのように、ソウル大学名誉教授の李丙氏は、その著『韓國古代史』（金思訳、六興出版、一九七九年）の中で、次のように述べている。新羅人の霊肉一致思想。新羅人は、古代のギリシア人と同じく、肉体美を重んじると同時に、霊肉一致思想を抱いていた。つまり、美しい肉体には美しい精神がこもり、美しい精神には美しい肉体が伴うと観念した。（下巻、三三一頁）こうした新羅女性の美しさは、おそらく周辺諸國とは異った文化を受け容れていた社会の中から生まれてきた美しさであったのではなかろうか。あるいはまた、異文化（ローマ文化）とともに新羅にやってきた異國人たちとの混血によって生れてきた美女たちであったのかもしれない。いずれにしても、高句麗や百濟とは違っていた新羅独特の文化の中から生れ出てきた美女たちであったことは確かであろう。」[ローマ文化王國―新羅](http://www.shinchosha.co.jp/books/html/447601.html)：[由水常雄著、新潮社](http://www.shinchosha.co.jp/book/447601/)

**天日槍のもたらしたもの**

活目入彦五十狹茅天皇（いくめいりびこいさちのすめらみこと、垂仁天皇：すいにんてんわう）の御世になると、今度は新羅の王の子、天日槍（あめのひほこ）が来訪したといふ。「日本國（やまとのくに）に聖皇（ひじりのきみ）有すと聞（うけたまは）りて、則ち己が國を以て、弟、知古（ちこ）に授けて化歸（まうけ）り1。」と帰化が目的としている。玉、刀、桙、鏡、神籬（ひもろぎ）など七物を携へて来訪し、それが神の物、神宝となっており、貢といふより、新羅から贈呈を受けた感がある。一云では、天日槍は、艇（はしぶね）に乘り播磨國、宍粟邑（しきはのむら）に着き、日本側の使者と交渉を行ひ、日本側は、帰化先として、播磨國の宍粟邑と淡路島の出淺邑（いでさのむら）の二案を出すが、天日槍は諸國を巡って好きな所を選びたいと申し出る。その申し出は許され、天日槍は菟道河（宇治川）から近江國に入り吾名邑（あなのむら）に暫く住み、近江より若狹國を經て、西、但馬國で住居を定め、但馬の出嶋（いづし）の人、太耳（ふとみみ）が女(むすめ)、麻多烏（またを）を娶り、但馬の諸助（もろすく）を生んだ。諸助が但馬日楢杵（ひならき）を生み、日楢杵が清彦（きよひこ）を生み、清彦が田道間守（たぢまもり）を生んだ2とする。この系図が詳しいのは、これが氣長足姫尊（おきながたらしひめのみこと：神功皇后）の先祖となるからである。

古事記では應神記に、昔の話として、天之日矛（あめのひぼこ）の名で登場する。都怒我阿羅斯等が玉から生まれた孃子を追って、難波の比賣語曾（ひめこそ）社に着いたといふ話と似た話3で、どうやら混同して通用していたものと思はれる。古事記はまた、播磨國でなく、難波の比賣語曾社に向かったが、渡の神に遮られたため4、戻り、多遲摩（たぢま）國に至ったとする。古事記は七種でなく、八種の物をもたらしたとも伝へている。

播磨國風土記は、天日槍が伊和大神、出雲から来た大國主とされるが、と國を争ったと伝へている。黒葛を三条足に着けて投げあい、大國主の黒葛は、気多（気比神社の地）と夜夫（養父神社の地：兵庫県養父市）と穴禾（伊和神社の地：兵庫県宍粟市）に落ち、天日槍の黒葛は三つとも但馬（出石神社の地：兵庫県豊岡市）に落ち、國を分け合ったとする5。ここでは、天日槍の伝説は大國主の時代、神話の時代を反映するものでもあり、天日槍を祖とする帰化集団の世代にわたる伝承とみるべきであろう。

書紀では、三輪君が祖、大友主（大物主神を祭る大田田根子の子孫）と倭直（やまとのあたひ）の祖、長尾市（倭大國魂神を祭る市磯長尾市）といふ祭祀にかかわる重臣を播磨に送り、天日槍を新羅國の王の子と確認し、また、天皇が詔して、播磨國の宍粟邑と淡路島の出淺邑を居住地として選ばせたとする2。すでにみたごとく、天日槍は、菟道河（宇治川）から近江、気比のある敦賀、若狹國を経由して但馬といふルートを辿っており、玉、刀、桙、鏡、神籬から成る神宝に、出石の小刀、出石の桙と出石が冠せられており、その他のものも新羅から持ち込まれたものか、この道中で調達されたものか判然としない。いづれにせよ、金属採取と精錬に秀でた帰化集団であり、この始祖に日本（やまと）風の天日槍（あめのひほこ）といふ名を与へたものと推察できる。

出石神社の社伝に、鉄製農具により「当時泥海であった但馬を瀬戸・津居山の間の岩山を開いて濁流を日本海に流し、現在の豊沃な但馬平野を現出され、円山川の治水6」を手がけたとあり、出雲國引きの治水工事を彷彿させる技術集団でもあった。実の所、中洲（奈良盆地）も治水工事が不可欠であった。「出石神社の宮司家は長尾で、長尾市の末裔と云う7」とあり、戦ったはずの大國主と祖先を同じくする倭大國魂神を祭祀する系統が受容していることになる。それでいて、また、「筑前國風土記」怡土郡の条に、「高麗の國の意呂（おろ）山に、天より降り来し日桙の苗裔、五十跡手（いとて）是なり。8」とあるごとく、天孫であり、桙を奉じる役割を担ふと自称した。天日桙＝天日槍となる。五十跡手とは怡土（伊都）県主の祖であり、渡来人が祖となっている。後に氣長足姫尊（神功皇后）を岡水門に導くのも五十跡手とされる。魏志倭人伝によれば、伊都國は半島との交渉や交易の窓口であった9。この天日槍の子孫がこの國の開國を推進することになり、この時点では新羅に対してはマイナスイメージはない。出雲や日本海側には、九州を経由せずに来訪する新羅人があった。元来、百濟より新羅との関係がはるかに深かった。

1)「新羅の王の子、天日槍（あめのひほこ）來歸（まうけ）り。將て來る物は、羽太（はふと）の玉一箇、足高（あしたか）の玉一箇、鵜鹿鹿（うかか）の赤石の玉一箇、出石（いづし）の小刀一口、出石の桙（ほこ）一枝、日鏡一面、熊の神籬（ひもろぎ）一具、并せて七物。則ち但馬國に藏めて、常に神の物と爲す。」書紀巻六、垂仁天皇[三年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki15.htm#三年春三月)

2)「一に云はく、初め天日槍、艇に乘りて播磨國に泊りて、宍粟邑に在り。時に天皇、三輪君が祖、大友主と倭直（やまとのあたひ）の祖、長尾市とを播磨に遣して、天日槍に問ひて曰く、「汝は誰人ぞ。且、何れの國の人ぞ。」天日槍對へて曰く、「僕（やつかれ）は新羅國の主（こきし）の子なり。然れども日本國（やまとのくに）に聖皇（ひじりのきみ）有すと聞りて、則ち己が國を以て、弟、知古（ちこ）に授けて化歸（まうけ）り。」仍りて貢献る物は、葉細（はほそ）の珠、足高の珠、鵜鹿鹿（うかか）の赤石の珠、出石の刀子（かたな）、出石の槍、日鏡、熊の神籬（ひもろぎ）、膽狹淺（いささ）の大刀、并せて八物。仍りて、天日槍に詔して曰はく、「播磨國の宍粟邑と淡路島の出淺邑と、是の二つの邑は、汝、任意に居れ。」時に、天日槍、啓して曰さく、「臣が將に住まむ處は、若し天恩を垂れて、臣が情の願しき地を聽（ゆる）したまはば、臣親ら諸國を歴り視て、則ち臣が心に合へるを給はらむと欲ふ。」乃ちこれを聽す。是に、天日槍、菟道（うぢ）河よりこれを泝（さかのぼ）りて、北、近江國の吾名邑（あなのむら）に入りて暫く住む。復更、近江より若狹國を經て、西、但馬國に到りて則ち住處を定る。是を以て、近江國の鏡村（かがみのむら）の谷（はさま）の陶人（すゑびと）は、則ち天日槍の從人（つかひびと）なり。故、天日槍、但馬の出嶋（いづし）の人、太耳（ふとみみ）が女（むすめ）、麻多烏（またを）を娶りて、但馬の諸助（たぢまもろすく）を生む。諸助、但馬日楢杵（ひならき）を生む。日楢杵、清彦を生む。清彦（きよひこ）、田道間守（たぢまもり）を生む。」書紀巻六、垂仁天皇[三年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki15.htm#三年春三月)

3) 「また昔、新羅（しらぎ）の國王（こにきし）の子ありき。名は天日矛（あめのひぼこ）と謂ひき。この人、參（まゐ）渡り來つ。參渡り來つる所以（ゆゑ）は、新羅の國に一つ沼あり。名は阿具（あぐ）と謂ひき。この沼の邊（ほとり）に、一（ある）賎（いや）しき女（をみな）晝寢しき。ここに日（ひ）虹の如くの耀（かがや）きて、その陰上（ほと）に指しそを、また一（ある）賎（いや）しき夫（をとこ）、その状（さま）を異（あや）しと思ひて、恆にその女人（をみな）の行（わざ）を伺いき。故、この女人、その晝寢せし時より姙身（はら）みて、赤玉を生みき。ここにその伺へる賎しき夫（をとこ）、その玉を乞ひ取りて、恆に裹（つつ）みて腰に着けき。この人田を山谷（たに）の間に營（つく）りき。故、耕人等（たびとども）の飮食（をしもの）を、一つの牛に負（おふ）せて山谷（たに）の中に入るに、その國主（こにきし）の子、天日矛に遇逢（あ）ひき。ここにその人に問いて曰ひしく、「何（なに）しかも汝（な）は飮食（をしもの）を牛に負せて山谷（たに）に入る。汝（な）は必ずこの牛を殺して食ふならむ。」といひて、すなはちその人を捕へて獄囚（ひとや）に入れむとすれば、その人答へて曰ひしく、「吾（あれ）牛を殺さむとにはあらず。唯（ただ）、田人（たびと）の食（をしもの）を送るにこそ。」といひき。然れどもなほ赦さざりき。ここにその腰の玉を解きて、その國主の子に幣（まひ：贈物）しつ。故、その賎しき夫（をとこ）を赦して、その玉を將（も）ち來て、床の邊（べ）に置けば、すなはち美麗（うるは）しき孃子（をとめ）に化（な）りき。仍（よ）りて婚（まぐは）ひして嫡妻（むかひめ：正妻）としき。ここにその孃子、常に種種（くさぐさ）の珍味（ためつもの）を設（ま）けて、恆に其の夫（ひこぢ）に食はしめき。故、その國主の子、心奢（おご）りて妻（め）を詈（の）るに、その女人の言ひけらく、『凡そ吾（あれ）は、汝（いまし）の妻（め）となるべき女（をみな）にあらず。吾が祖の國に行かむ。』といひて、すなはち竊（ひそ）かに小船（をぶね）に乘りて逃げ渡り來て、難波に留まりき。【此は難波の比賣碁曾の社に坐す阿加流比賣の神と謂ふ】。ここに天日矛、その妻（め）の遁（に）げしことを聞きて、すなはち追ひ渡り來て、難波に到らむとせし間、その渡の神、塞（さ）へて入れざりき。」古事記、応神天皇　天之日矛　岩波文庫

4) 「故、更に還りて多遲摩（たぢま）の國に泊（よ）てき。すなはち其の國に留まりて、多遲摩の俣尾（またを）の女、名は前津見（まへつみ）を娶して生める子、多遲摩母呂須玖（たぢまもろすく）。この子、多遲摩斐泥（ひね）。この子、多遲摩比那良岐（ひならき）。この子、多遲麻毛理（もり）。次に多遲摩比多訶（ひたか）。次に清日子（きよひこ）。三柱。この清日子、當摩（たぎま）の咩斐（めひ）を娶して生める子は酢鹿（すが）の諸男（もろを）。次に妹菅竃上由良度美（いもすがかまゆらどみ）。故、上（かみ）に云へる多遲摩比多訶、その姪、由良度美を娶して、生める子、葛城（かづらき）の高額比賣（たかぬかひめ）の命【こは息長帶比賣命の御祖】。故、その天の日矛の持ち渡り來（こ）し物は玉津寶（たまつたから）と云ひて、珠（たま）二貫（ふたつら）、また浪振る領布（ひれ）、浪切る領布、風振る領布、風切る領布、また奧津（おきつ）鏡、邊津（へつ）鏡、并せて八種（やくさ）也【こは伊豆志の八前の大神なり也】」古事記、応神天皇　天之日矛　岩波文庫

5) 「穴禾の郡・御方の里（みかた）葦原志挙乎命（大國主）は天日槍命と黒土の志爾蒿（しにだけ）にお行きになり、お互いにそれぞれ黒葛を三条足に着けて投げあいた。その時葦原志挙乎命の黒葛は一条は但馬の気多の郡に落ち、一条は夜夫の郡に落ち、一条はこの村に落ちた。天日槍命の黒葛は全て但馬の國に落ちた。」播磨國風土記　[伊和神社（神奈備）](http://kamnavi.jp/it/kinki/iwa.htm)

6、７) [出石神社：神奈備](http://kamnavi.jp/ym/hiboko/izusi.htm)

8) [出石神社：神奈備](http://kamnavi.jp/ym/hiboko/izusi.htm)

9) 「特に一大率（いちだいそつ）を置き、諸國を検察せしむ。諸國これを畏憚（いたん）す。常に伊都國に治（ち）す。國中において刺史の如きあり。王、使を遣わして京都・帯方郡・諸韓國に詣り、および郡の倭國に使するや、皆津に臨みて捜露し、文書・賜遣の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯するを得ず。」[魏志倭人伝](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi1.htm#末廬國)

**新羅の建國**

三國史記によれば新羅の建國はBC57年とされる。辰韓の六村が、瓠（ひさご）の如き大きな卵から生まれた子を王として建國をした。瓠を朴（パク）といふことから朴といふ姓となし、辰人が王のことを居西干（ゴソガン）と称することから諱（いみな）を居西干とした1、とある。辰韓から新羅、馬韓から百濟、弁（卞べん）韓から駕洛（伽耶）が興るとされるが、当時は馬韓が他の二韓を属國扱ひしていた。以下のような話が記されている。馬韓から貢をせぬといふことで詰問を受け、辰韓の瓠公が使節に立った。「辰韓の六村は馬韓のみならず、楽浪や弁韓や倭人からも圧迫を受けていたが、王を得てからは、人事も治まり、倉庫も満ち、民も落ち着き、周辺の圧迫に恐れることがなくなり、王も礼を以て、私を派遣してこうして申し開きをさせている。何をお怒りになることがありましょう、」と一歩も引くことなく交渉を成立させたといふ2。瓠公は渡来してきた倭人であった、そういふ倭人は瓠公一人ではあるまい。かつて畏れる対象に倭人が入っていたが、これは、離れた日本列島の倭人ばかりか、半島における倭人でもあったようだ。瓠公のごとく、新羅の建國に大きな役割を果たした倭人も居たことにもなり、天日槍の説話と合はせれば、倭人との関係が悪かったとは言へまい。

辰韓は馬韓の東に位置するのであるが、一部に、秦の滅亡で中國から逃れてきた人々を住まはせ、それが馬韓との緊張を生んでいた。これらの住人の一部は更に海を渡り、日本列島に渡来し、秦氏と称されることになる。時代は異なるが、三國遺事、巻一、延烏郎（ヨノラン）・細烏女（セオニョ）の条に、新羅第八代阿達羅王の四年（AD157年）に東海の浜に、延烏郎・細烏女の夫婦があり、延烏郎が一巌に乗って日本に渡り、日本國人が彼を非常の人として王とし、細烏女も一巌に乗って日本に渡り、夫婦は再会し、貴妃となったといふ話もある。書紀においては、新羅を討つといふことに意識が傾いているが、むしろ、良好な往来が行はれていたとみるほうが伝承に即するように思はれる。

新羅本紀によれば、第二代南解　次次雄（なんかい じじゆう）のとき、脱解（だっかい）を、軍事と國政を統べる「大輔」とし3、第三代儒理尼師今（じゅり にしきん）の治世（在位 AD24-57）に六部六姓（李、崔、孫、鄭、裴、薛）を定め、十七の官位を設けたとする4。歴史的には、辰韓の部族連合段階であり、このような官位が導入されるのは、中央集権的な國家が形成される第十七代　奈勿 尼師今（在位AD356～402）以降とされ、案外、編者の金富軾（きむふしょく：1075～1151）が日本書紀に対抗してこの期に繰り上げて官位制度の成立を記したのかもしれない。

第四代　脱解 尼師今のとき、始林の樹間の鶏の鳴き声に導かれ、金色の小櫝（小箱）の中から小男児を得て、その名を閼智（あるち：知恵者）とし、金櫝から生まれたため、金氏とし、國号を鶏林にしたといふ5。また、自身が外戚であった脱解 尼師今は、朴氏を貴戚（身分の高い外戚）として、國内を州と郡に分けて州主、郡主とする配慮をしたとされる6。脱解は民間伝承によれば、卵から生まれた子である。倭國の東北千里にある多婆那國の王妃が妊娠して7年、卵を産み、これを怪しんだ國王はこれを捨てさせた。王妃は、卵を櫃（ひつ）に入れ船に乗せて流すと、辰韓の阿珍浦（慶州郡陽南羅児里）に流れ着いた。鵲（かささぎ）の鳴き声でそれに気付いた老婆が櫃を解くと子がおり、脱解とされ、鵲の昔を姓としたといふ7。多婆那國を丹波とみる説もあり、列島から新羅への漂着民も結構いたものと思はれる。

忱彌多禮（とむたれ：済州島）の神話では、土地の三神が国を開くにあたり、日本國8の使者が三女や馬、牛、五穀の種をもたらしたとある。これは天智天皇八年条の「耽羅王に五穀の種を賜ふ。」という現実と箱舟漂流型の神話が入り組んだものであるが、済州島あたりの往来も頻繁であったことを伺はせる。

辰韓には北から流入する漢人の居留地があり、倭人を登用するといふ往来があり、唐の時代には、新羅として、交易の才が発揮され、金銀製品および､東南アジア･インド･アラビア産の香料や薬物などの中継貿易を手がけ、遠く西域に足を伸ばし、由水常雄氏（ローマ文化王國―新羅）によれば、地中海東岸、アンティオキアからアレッポ、シリアのシドンやティル、エジプトのカイロやカラニスで生産されたと考へられるローマン・グラス等々の取引にも携はることになる。書紀は、玉、刀、桙、鏡、神籬（ひもろぎ）など七物の神宝をもたらしたのが新羅の王の子、天日槍と記し、後に神託で、「眉の美しい乙女のごとく海の向こうにある宝に満ち、天を享ける新羅」と云はしめる所以である。

一方、辰韓時代の伝承がもとになっているものと思はれるが、AD200年までの倭人との戦いや交渉に関する記述を拾ってみたい。BC50年に倭人が辺境を犯したが、始祖の神德を聞いて去ったといふ9。AD14年には倭人が兵船百余で海辺を掠めたが、防いだとある10。兵船百余ともなれば、一豪族では難しく、國の存在が想定されよう。AD59年には倭國と好を結ぶ11とあり、該当するのは奴國となる。AD73年に倭人が木出島を侵したが撃退12、AD123年に倭國と講和13、AD158年に竹嶺を開き、倭人を来聘したと続く14。この竹嶺（栄州市豊基邑水鉄里：[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）は小白（ソペク）山脈を越へて南漢江流域にでる、あるいは高句麗へと向かふ街道であり、「倭人を来聘した」となれば、倭國と手を結び、いづれかの方向へと進出することを意味する。書紀を読めば、新羅と日本（やまと）は対立する関係であり、想定できないものであるが、辰韓と倭といふ枠組みのなかでは、無視できない記述となる。更に予想を超へるのは、AD173年に卑弥呼が使者を派遣してきたといふ記述である15。これは、後にみることとするが、このふたつを結びつければ、違った光景が見えてくる。AD193年には、倭人が大飢饉のため、千余人渡ってきたともいふ16。中央集権的國家が形成されてない時代には、辰韓と倭といふ部族あるいは部族連合の國の半島と列島の往来は違った様相をみせるのかもしれない。新羅本紀においては、辰韓の時代に起こったことが、新羅の歴史に書き換へられていたり、後の時代の新羅の歴史が持ち込まれているのかもしれない。歴史的には辰韓と倭の時代であり、新羅と日本（やまと）といふ対立からのみではなく、まずは、予想外の事態もあり得ると、これらの記述に留意しておくことが必要であろう。

さて、加羅國が伝説として建國された頃(AD42年）とは、建武元年(AD25年）新を倒して後漢を建國した劉秀（光武帝）の晩年である。57年正月光武帝は「漢委奴國王」の金印を倭人に授与し、ニ月に歿した。倭の奴國が、光武帝に自らを國王と認めさせていた。107年十月、倭國王、帥升らが後漢に朝貢し、安帝に生口160人を献上したともされ、相当の力を有していたことになる。奴國は半島の諸國をさしおき、後漢と直接交渉、交易を行っていた。これは一体何を意味するのであろうか。

1) 「始祖、姓は朴（パク）氏、諱（いみな）は赫居世（ホコセ）。前漢、孝宣帝、五鳳元年(BC57年）の甲子の四月の丙辰【一曰正月十五日】に即位し、居西干（ゴソガン）と號（なづ）く。時に年は十三、國を徐那伐（ソナボル）と號く。是に先だちて、朝鮮の遺民、山谷の間に分れて居し六村をなす。一に閼川楊山村と曰（いは）く、二に突山高墟村と曰く、三に觜山珍支村【或ひは干珍村と云ふ】と曰く、四に茂山大樹村と曰く、五に金山加利村と曰く、六に明活山高耶村と曰く、是れを辰韓の六部と爲す。高墟村の長、蘇伐公が楊山（南山）麓を望むと、蘿井（慶州市塔里）の傍（そば）の林間に馬有りて、嘶（いななく）則ち往（ゆ）きて之を觀ると、忽（たちまち）に馬見えず、只（ただ）大きな卵有り。之を剖（さく）と、嬰兒有りて出ず。則ち之を收めて養ふ。年十餘歳に及び、岐嶷然（幼少より才知に優れる）として夙成（若くして大人びる）しており、六部の人は以て其の生れを神異となし、之を推し尊び、是に至りて立ちて君となす。辰人は瓠を謂ひて朴となす。以て初め大卵は瓠の如く、故に朴を以て姓となす。居西干は、辰では王と言う、【或ひは貴人の稱として云呼す】。」三國史記、新羅本紀

2) 「三十八年、春二月、瓠公を遣はし馬韓に聘（と）（訪問して安否をとう、臣下の礼）ふ。馬韓王、瓠公に讓りて曰く、辰卞二韓（辰韓と弁韓）、我が屬國となす。比の年、職貢（みつぎもの）を輸（おくら）ず。事大の禮、それこの若（ごとき）か。對へて曰く、我が國、二聖より肇めて興こり、人事修（をさま）り天の時和し、倉庾（米倉）充實し、人民敬して讓る。辰韓の遺民から卞韓、樂浪、倭人に至り畏（おそ）れを懷くことなし。而（しか）して吾が王、謙虚にして、下臣を遣し修（つつし）みて聘（と）ふ。禮に過ると謂ふべし。而して大王、赫怒（かっと怒）り、之を兵を以て劫（おびやか）す。是は何の意や。王、憤（いきどほ）りて之を殺さむとす。左右、諫（いさ）めて止む。乃ち許して歸へす。此の前に、中國の人、秦の亂に苦しみ東に來る者衆（おほ）し。多（さは）に馬韓の東に處す。辰韓と雜居す。是に至り寖（しだい）に盛す。故に、馬韓之を忌み、責む。瓠公は、未だ其の族姓詳（くはし）からず。本は倭人にて、初め腰に瓠を以て繋（つな）ぐ。海を渡りて來る。故に瓠公と稱す。」三國史記、新羅本紀
3）七年(AD10年) 秋七月、脱解を以て大輔と為す。以て軍國政事を委ねる。　新羅本紀第一第二代　南解次次雄
4) 九年(AD32年) 春六部の名を改め、仍ち姓を賜ふ。楊山部は梁部、姓を李と為す。高墟部は沙梁部、姓を崔と為す。大樹部は漸梁部、一に牟梁と云ひ、姓を孫と為す。干珍部は本彼部、姓を鄭と為す。加利部は漢祇部、姓を裴と為す。明活部は習比部、姓を薛と為す。又、官を設け、十七等有り。一は伊伐、二は伊尺、三は迊、四は波珍、五は大阿、六は阿、七は一吉、八は沙、九は級伐、十は大奈麻、十一は奈麻、十二は大舍、十三は小舍、十四は吉士、十五は大烏、十六は小烏、十七は造位なり。王、既に六部を定め、中を分けて二と為し、王女二人をして、各（おのおの）部内女子を率ゐ、朋を分ち黨を造る。新羅本紀第一第三代　儒理尼師今

5）九年(AD65年) 春三月 王夜に、金城の西、始林の樹間に、鶏有りて鳴聲を聞く。遅明、瓠公を遣しこれを視しむ。金色の小櫝（小箱）有りて樹枝に掛る。白鶏、其の下で鳴く。瓠公還りて告ぐ。王人をして櫝を取らしめこれを開く。小男児有りて其の中に在り。姿容奇偉なり。上喜こびて左右に謂ひて曰く、「此豈に天我に遺して以て令胤（跡継）すに非ざるか。」乃ちこれを収めて養ふ。長ずるに及びて聡明にて智略多し。乃ち閼智と名づく。其の金櫝より出るを以て、姓を金氏とす。始林を改め鶏林と名づく、因りて以て國號と為す。新羅本紀第一第四代　脱解 尼師今
6）十一年(AD65年) 春正月朴氏の貴戚を以て、國内を州郡に分理し、州主、郡主と號づけ為す。新羅本紀第一第四代　脱解 尼師今

7）「昔、倭國の東北千里に多婆那國があって、またの名前を龍城國とも言った。國王の名前を含達婆といい、女王國の女を王妃としていた。その王妃は妊娠から７年目にして大きな卵を産んだ。國王は怪しいと思って、それを捨てさせた。王妃は絹布で卵を包み、櫃の中に入れて船で海に流し「有縁の地に到り、國を建て、家を成しなさい」と祝福して別れを告げた。その船は阿珍浦（慶州郡陽南羅児里）に流れ着いた。その地の老婆が空を見上げると、鵲（かささぎ）が盛んに鳴きながら飛んで来たので、何故かと思って行ってみると、船の中に子供を見つけた。その子供を大切に育てると、人々が尊敬するような人物になった。鵲の飛鳴によって発見したので、鵲の字の鳥を除いた字である「昔」を姓とした。また、老婆が櫃（ひつ）を解いて出現したので名前を「脱解」とした。その賢名を聞いた朴氏第二世の南解王は、彼を婿に迎え、朴氏第三世の儒里王が崩御した後、遺言によって新羅國の第四代の王となった。」[阿珍浦伝説](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/sinkan-siragi/siragi-sinwa2-seki.htm)　民間伝承１　日中韓・三國通史

8）「初め無人。三神人、地より湧出で、今鎭山の北麓に穴有りて曰く。毛興是れ其の地なり。長じて良乙那（ヤンウルナ）と曰く。次に高乙那（コウルナ）と曰く。三に夫乙那（プウルナ）と曰く。三人、荒僻（荒れた僻地）に遊獵し皮を衣とし肉を食す。一（ある）日、紫泥で封された木函浮きて東海の濱に至り就くを見てこれを開く。內に石函有りて一（ひとり）の紅帶紫衣の使者隨ひ來たる有り。函を開くるに靑衣の處女三人及び諸（もろもろの）駒犢（子馬と子牛）五穀の種有り。乃ち曰く、『我は是れ日本國の使なり。吾が王此の三女を生みて云ふ。西の海中の岳に神の子降りて三人、將に國を開かむと欲し、是に配す匹（配偶者）無く、臣に命じ三女を侍して來り、宜しく配を作（な）し以て大業を成さむ。』使者、忽（たちまち）にして雲に乘りて去る。三女を以て歲次（年の順）に分けてこれを娶る。泉甘（清水湧き）土肥の處に就きて射矢卜地（弓で地を祓ひ、矢の落ちた所に地を定める）し良乙那の居る所を第一徒（都）と曰ふ。高乙那居る所を第二徒と曰ふ。夫乙那居る所を第三徒と曰ふ。始め五穀を播き且つ駒犢を牧して日く、富庶（国が富む）に就き、十五代孫の高厚、高淸、高季、昆弟三人船を造りて海を渡り、耽津（たんつ）に泊る。蓋し新羅の盛時なり。時に客星（突然明るく輝く星：超新星など）南方に見え、太史、奏が曰く、異國人來朝の象なり。厚等王に至るに及びてこれを嘉（よみ）し厚を稱して星主（ソンジュ）と曰く。以て其の星を動する象なり。淸をして袴下より出しめ己が子を愛するが如く稱して王子（ワンジャ）と曰く。又其の季を稱して徒內（トネ）と曰く。邑を號（なづ）けて耽羅（たんら）と曰く。以て初め來り耽津に泊りて新羅に朝すなり。各（おのおの）寶蓋（傘）衣帶を賜はりこれを遣して此れより子孫蕃盛し、新羅に敬事し、高を星主と爲し、良を王子と爲し、夫を徒內と爲し、其の後百濟に服事し、星主、王子の號を除き、以て其れ佐平と爲し使者恩率と爲し羅に及ぶ。濟、亡びて耽羅國主太子に見（まみ）へ未だ老朝せず。高麗太祖因りて星主、王子の爵を瑞山に賜ふ。 」『高麗史』巻57地理志2（耽羅縣）日本國といふは天武天皇以降のこと、五穀の種はそうであろうが、馬と牛は日本國からではない。後漢書卷　東夷列傳　弁辰条に、州胡とされる頃牛を飼っていた。

9）「八年（BC50） 倭人行兵す。邊を犯すを欲す。始祖神德有すを聞きて、乃ち還る。」　新羅本紀第一第一代　始祖赫居世居西干

10) 「十一年(AD14年) 倭人兵船百餘艘を遣し、海邊民戸を掠す。六部勁兵を發し以てこれを禦ぐ。」新羅本紀第一第二代　南解次次雄

11）「三年(AD59年) 夏五月倭國と好を結び聘を交す。」新羅本紀第一第四代　脱解 尼師今
12）「十七年(AD73年) 倭人、木出島を侵す。王、角干羽烏を遣し、これを禦ぐも克たず、羽烏死す。」　新羅本紀第一第四代　脱解 尼師今
13）「十二年(AD123年) 春三月倭國と講和す。」新羅本紀第一・第六代　祇摩尼師今

14）「五年(AD158年) 春三月竹嶺を開く、倭人来聘す。」新羅本紀第ニ・第八代　阿逹羅尼
15)「 二十年(AD173年) 夏五月 倭女王卑彌乎、使を遣し来聘す。」　新羅本紀第ニ・第八代　阿逹羅尼師今
16）「十年(AD193年) 六月 倭人大饑す、食を求め来る者千餘人。」　新羅本紀第ニ・第九代　伐休尼師今

**倭の奴國の朝貢**

渡来人のもたらした金属器、大陸系石器、支石墓の伝播経路は、有柄磨製石剣の分布状態で辿れるとされる。松浦、糸島、玄界灘沿岸を東進、遠賀川下流に集中し、一部が上流に達する。朝倉を中心とした筑後平野北部にも分布し、一部が大分県日田盆地に達し、玄界灘から遠賀川を上がり、田川盆地・京都平野を通った一群は四國北岸を更に東進し、一部は大阪湾に達するが、愛媛県松山市周辺に集中する。渡来人が持ち込んだ第二次の伝播経路（BC200年頃）は青銅武器、墓に埋葬された銅剣・銅矛・銅戈から知られる。唐津･糸島・早良・福岡・佐賀の平野に広がり、青銅器そのものは渡来人が持ち込んだり、製作を行なったとしても、被葬者は、その地で普通以上の地位にあった倭人である。吉武髙木遺跡や板付田端遺跡の群集墓は國の前段階の社会分化の始りをしめすものといふ1。

奴國の王墓は須玖岡本遺跡とされる。鉄製武器が普及していながら祭器化した日本製の青銅武器が多数副葬されており、祭祀権を掌握する王の存在を示すようだ。従来、銅鐸は近畿が中心とされてきたが、初期の銅鐸鋳型が春日市大谷遺跡、鳥栖市安永田遺跡、福岡市赤穂ノ浦遺跡で発見され、初期銅鐸も奴國を中心とした地域で製作され、九州以外に配布されていた2。しかし、1998年佐賀県吉野ケ里遺跡で銅鐸が発見され、吉野ケ里銅鐸も含めて、九州の銅鐸関連資料は主に集落遺跡の内部や、集落からそれほど遠くない周辺部で見つかっており、祭祀に用ひられたと考へられている3。青銅武器は、奴國で大量生産され、その銅矛や小形仿製鏡（漢代の鏡を倭人が模倣して作った小型の粗末な銅鏡）の分布から、北は対馬から東は四國を中心に中國地方まで広がっており、奴國がそのルートの制海権をも掌握していたとされる4。

さて、第二次渡来人のもたらした青銅武器の副葬される甕棺墓で「金海式」と称されるもの、これは釜山市の金海貝塚で発見され命名されたのであるが、倭人の墓である5。倭人が半島に渡航して、自ら先進技術を導入し成功していたことを物語る。半島での倭人の存在は、文献のみならず、これらの遺跡で裏付けられ、それは、紀元前108年、漢の武帝が衛氏朝鮮を滅ぼし朝鮮半島に楽浪郡など４郡を置いたことが、大きな影響を与へたと考へられる。

日本人は倭人とは、日本人の古い呼び方と思っているが、楽浪郡に漢人が進出する以前の中國人の認識は、異なる。戦國時代以前に洛陽で編纂されたとされる山海経（せんがいきょう）によれば、洛陽からみて、東北の隅が燕（えん）6、その南が蓋國（がいこく）、その南が倭7である。東海の内で、北海の隅が朝鮮8。海は必ずしも海洋とは限らず、遠く離れた薄暗い土地の意味でもある。朝鮮は燕に属す列陽（れつよう）の東海、北山の南とされ、倭より朝鮮の方が遠くにあるとみていた。後漢の「論衡」に、倭人が、周の時代に鬯艸（ちょうそう、鬯；黒黍で醸した酒、艸;草の香りつける。）、暢草（ちょうそう；酒に浸す薬草）、暢（ちょう：祭りに用いる酒）を貢納9してきたとあるが、これは日本列島の倭人でなく、上記の倭人であろう。

倭人の國が半島の彼方、海を隔ててあるなどは、楽浪郡（[地図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/sangokusimp.pdf)）を経由した奴國人が朝貢をして、ようやく認識された現実であろう。建武の初(AD25年）に、遼東太守の祭肜（さいゆう）の下に東夷の濊（わい）・貊（はく）・倭（わ）・韓（かん）が朝獻してきた10。倭は半島の濊系の東夷とみなされていた。57年に洛陽にいたna國の使者を想像してみよう。奴は漢音でド、呉音でヌであるが、“なこく”と訓じており、“な”としよう。我は、wa人じゃないna人だと懸命に言ふも、na人など聞いたことがない、東夷でna人に近いのはwa人しかない、wa人だろう、と後漢の官吏も困った。大陸東北に居た倭人が海を渡って國を形成しているといいたいのか？とでも考へねば、つじつまが合はない。分かった、それならwa人のなかのna人にしよう、と、後漢書、光武帝紀では、「東夷倭奴國王遣使奉獻」東夷の倭waに属す奴na國とされてしまった。

奴國人は交渉にあたって、自らを奴國の大夫11と称しており、中國の制度に通じていたことを伺はせる。しかし、漢側は、あくまでも倭國にこだはり、その南の果てにある奴國とした。「漢委奴國王」の印璽を賜ふとは、奴國王に確実に渡るように、楽浪太守なり誰か漢人使者が列島を訪れて、奴國王に渡したはずであるが、残念ながら、その記録は残されていない。しかし、この朝貢以降、やっと、倭人は、楽浪郡の彼方の海の中といふ認識に変はったのであろう12。班固（AD32～92年）の漢書、「地理志」に反映されるが、相変はらず燕地条で語られ、海中といっても位置は、会稽（浙江省）の東の海の彼方と漠然としたもので、倭人が、呉・越人系といふ見方が影響していたのであろう。

委の奴の委については、漢書に注した如淳（にょじゅん）は、「墨の如く面を委（あや）す」、晋の瓉（さん）は、「倭は是れ國名、墨を用いるを謂はず、故に、これを委(あやか)ると謂ふなり」から来るとみていた。顔に墨（いれずみ）をせず、それと同様に委る義としている。会稽の民には、海中での作業で龍の如き魚の害を避けるため、文身（いれずみ）する風習13があり、倭人も漁労に秀でており、同じく文身の風習14があり、そのことはよく知られていたとみへ、委(あやか)るとされた、といふ注である。顔師古はそうでなくて、委を平声で発音する、つまり、倭人は自らを「iuāi」と発音したので委となったといふ注である。

奴國が朝貢して50年後には、もはや奴國でなく、統一された倭國の王15が朝貢してきた、と認識されていた。三國時代になり、魏が親魏倭王の印璽を与へるために、卑弥呼の下に、帯方太守弓遵（きゅうじゅん）、建中校尉梯儁（ていしゅん）等を使節に派遣し、日本列島に住む人間が倭人の中核であり、濊・貊・倭・韓の倭とは異なることが明確に認識されたのであろう。書紀においては、この倭（わ）の呪縛から逃れるために、倭を“やまと”と訓じてみたり、日本を“やまと”と訓じ、日本を通用せしめんとするが、倭といふ國号はもはや変更することが出来ないほど中國では定着していた。

さて、後漢の國王印璽を得て、奴國は後漢の権威を背後に、他國に秀で、楽浪郡に至る海路を確保し、國内においてもその地位を確固たるものにしたのであろう。國内的には、銅矛の分布から徳島を除く四國、大阪湾、兵庫まで点在する地域に影響力を行使したとされる16。奴國を興隆せしめた交易を担ったのは、北九州の志賀島を本拠とする海人系の安曇(阿曇)氏と海北道中(福岡県宗像郡から沖ノ島一帯)を本拠とする宗像(胸形・宗形)氏であった。
　奴國が国内的に東に向かって輸出した青銅器や鉄器に対する見返りとして、何が東から西に動いたかは特定されていない。墓に残されない物も多数あろう。國の形成であり人口が集中し統治機構や衣食住が整備されれば、その社会の仕組みや生活の質、製品が輸出され、必要な素材の開発、調達が必要になる。農産品や塩、調味料はもとより、木材や玉石、鉱産物や燃料や土、布や染料や皮革等々が求められることになる。そして、陸路でこれを運搬するより、河川や海で舟を利用することがはるかに有利であった。

奴國の交易活動が引き起こしたと考へられているものに、海人族の来襲を避けて、高地に営まれた集落、高地性集落があげられる17。瀬戸内海では、来島（くるしま）海峡、芸与（げいよ）諸島における、大三（おおみ）島の鷲ケ頭（わしがとう）山、大島の八幡（やわた）山、伯方（はかた）島の宝股（ほこ）山、岩城（いわき）島の積善（せきぜん）山、香川県三豊（みとよ）郡詫間（たくま）町紫雲出（しうで）山、塩飽（しわく）諸島の心経（しんきょう）山、小豆島近くの豊（て）島の檀（だん）山、岡山の児島、貝殻山、倉敷の種松（たねまつ）山等に分布する高地性集落遺跡（140～430mの山頂）である。奴國は半島を経由し洛陽へのルートを開いたばかりでなく、国内においても、瀬戸内海ルートを開いて、その交易を淀川や大和川流域にまで及ぼした勢力でもあった。瀬戸内海ルートは潮の干満を熟知しなければならず、潮待ちを行う拠点が必要となる、穴門、安芸、吉備、播磨、難波などへの関心が高まったことであろう18。

　宗像氏は日本海沿岸交易に積極的であり、かの大國主命、少彦名命による葦原中國の平定を担った勢力となろうか。環日本海交流の痕跡は四隅突出型古墳という特徴をもち、1969年島根県瑞穂町順庵原一号以降、島根県、鳥取県、広島県北部の山陰地方に、1974年北陸、杉谷四号墳で確認されて以来、富山県、石川県、福井県への広がりが知られてきた19。
　書紀によれば、出雲を代表する大國主命の（海から現はれた）幸魂奇魂（さきみたまくしきみたま）が大和最古の宮とされる三輪山で和魂として祭られる大物主神と伝へている。この勢力は、古志（越）から川沿いに諏訪方面、若狭から山背、そして、奈良盆地に進出を果たし、全土を平定したとされる。中國側で奴國の後、倭國の成立とみなされたものであろう。書紀でこれに見合ふとすれば、大國主命、少彦名命等の國神（くにつかみ）による葦原中國の平定となろう。祖先である素戔嗚尊は高天原を追放されたのであるが、韓國に渡り船舶や宮や棺槨用の木材（杉、檜、柀）の種を持ち帰り、五十猛命（いたけるのかみ）、大屋津姫命（おほやつひめのみこと）、枛津姫命（つまつひめのみこと）の三子とともに紀伊で植林に従事したとされる。紀伊半島の名草や丹敷では朱の染料を得るため、水銀製錬・鍍金のための丹朱鉱脈の開発も行はれていた。大國主命とは別であろうが、祖先は素戔嗚尊であり、國神（くにつかみ）に連なる。

中國においては、呉が越に破れ、越は楚に破れ、楚は秦に破れ、秦は漢に破れた。秦の後裔が半島の辰韓に逃れ、列島に渡来してきたことはすでにみた。江南の地から追い落とされた呉越、呉は太伯、越は禹の苗裔で夏后帝少康の後裔であり、江南の稲作や農耕具、ガラス玉や絹、高床式の建築、環濠集落の俗が持ち込まれたとされる20。江南からは黄海海流の戻り、あるいは対馬海流で運ばれる21（[日本海の海流図](http://www3.pa.hrr.mlit.go.jp/nihonkaikankyo/shizen/kairyu/ryukyo.html)）。海面の潮の流れは季節風、陸上との温度差による風、干満により異なり、海人達は巧みに利用したのであろう。秦の始皇帝が不老不死薬を求めて除福に捜索をさせたのであるが、一つには中國で枯渇してきた水銀の探査があった。金を精製するに用ひられるが、微量の水銀、鉛、砒素などを服用すれば不老不死が得られると信ぜられていた22。列島では、呉越から追はれ、その技術を持つものが渡来し、その子孫が、熊本や佐賀から、大分、広島、出雲、播磨、敦賀、四國各地、淡路、紀伊、三重、岐阜、長野、静岡、千葉、群馬と各地に広がり、丹朱の精製に携はった。これは、丹生神社の分布に一致する。

彼等に國譲りを迫るのが天神（あまつかみ）、天孫族である。五島列島、佐賀、長崎、笠沙、日向、宇佐沿岸交易に携はる勢力であろう。五島列島や南方からの流入者を抱へ込んだ勢力で、呉人の伝承を有し、日本書紀においては海神族としてあらはれる。黒潮に乗って四國南岸、紀伊半島を経由し、尾張はもとより、東國にまで進出する。天孫族と海神族の連携を介したのが鹽土老翁（しほつつのをおぢ）東北の塩釜では製塩の神として祭られている。奈良盆地を迂回して尾張に進出するのが火明命（ほのあかりのみこと）、奈良盆地に入ったのは饒速日命（にぎはやひのみこと）、日向を発ち奈良盆地を目指したのが、いはゆる神武天皇であった。

1、2) 森浩一氏編「日本の古代」中公文庫

3) 九州の銅鐸　[福岡市博物館](http://museum.city.fukuoka.jp/je/html/171-180/179/je179_01.html)

4、5) 森浩一氏編「日本の古代」中公文庫

6) 「強大なる燕は東北隅にあり。」山海経、海内東経

7) 「蓋國は、強大なる燕の南、倭の北にあり。倭は燕に属す。朝鮮は、列陽の東の海、北山の南にあり、列陽は燕に属す。」山海経、海内北経

8) 「東海の内、北海の隅に國あり、名は朝鮮」山海経、海内経

9) 「周の時、天下太平、越裳白雉を献じ、倭人鬯艸を貢す。」論衡、巻八・儒増篇「暢草（ちょうそう；酒に浸す薬草）倭より献ず」論衡、巻十三・超奇篇、「成王の時、越裳雉を献じ、倭人暢を貢す」論衡、巻十九・恢國篇

10) 「建武の初め(25年）、また來たり朝貢す。時に遼東太守の祭肜（さいゆう）は、威を北方に讋（おそ）れしめ、聲は海表に行はれたり。ここに濊（わい）・貊（はく）・倭（わ）・韓（かん）は萬里朝獻す。」後漢書　卷八十五　東夷列傳第七十五

11) 「建武中元二年、倭の奴國、奉貢朝賀す。使人、自ら大夫と稱す。倭國の極南界なり。光武、印綬を以って賜う。」後漢書　東夷列傳

12) 「樂浪海中に倭人有り、分かれて百餘國と爲し、歳時を以って來たり獻見す、と云う。」漢書　卷二十八下 地理志第八下 燕地条

13) 「文身斷髮し、以て蛟龍の害を避く」漢書

14) 「黥面文身す」[魏志倭人伝](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/gishi1.htm#皆黥面文身)

15) 「安帝の永初元年（107年）、倭國王帥升等、生口百六十人を獻じ、見（まみ）ゆるを請願す。」後漢書　東夷列傳

16、17）森浩一氏編「日本の古代」中公文庫

18) 後には、赤間関（下関）、中の関、室積、上関、沖の家室、津和地（松山市）、蒲刈（三ノ瀬）、尾道、鞆ノ浦、下津井、牛窓、室津、兵庫、大阪がその拠点となる。[潮待ちの港、風待ちの港](http://www.iokikai.or.jp/siomatinominato.index.html)　美遊人

19）森浩一氏編「日本の古代」中公文庫

20) 東シナ海からみた吉野ケ里遺跡跡　安志敏　東シナ海と西海文化　小学館

21）「水産学シリーズ 5 対馬暖流 海洋構造と漁業」（昭和49年5月、株式会社恒星社厚生閣）
22）中国史にみる水銀鉱　岸本文男（[地質ニュース351号](http://www.gsj.jp/Pub/News/pdf/1983/11/83_11_03.pdf)）によれば、「西漢前期の馬王堆の墓で発見された女性の遺体がみずみずしさをとどめていたのは、水銀、鉛、砒素が異常に多くふくまれていたことによる。これは当時王侯貴族の間に流行していた“錬丹術”によるもので、辰砂などを原料にした不老不死の仙薬を服用していた結果らしい。・・・また、秦の始皇帝の驪山陵では宝石で月や太陽や星のレリーフをつくり宇宙を表し、揚子江や黄河や海を表現するために大量の水銀が用いられていた。・・・隋代の短命な統一国家の正史<隋書>の物産編<食貨志>にも水銀鉱産地の名がなく、むしろ日本から輸出していたと思われる。」

**神日本磐余彦天皇（神武天皇）の建國**

磐余彦尊（いはれひこのみこと）は、遠く塩釜に至るネットワークを有する海人族、海鹽土老翁（しほつつのをぢ）から、東に青山が四周に巡る美しい地（くに）があり、そこが六合（くに）の中心であり、すでに饒速日がそこに降り立っているが、そここそ都を定めるべき地と聞き、日向を発つ1。奈良盆地であり、そこは、三輪山で和魂として祭られる大物主神、つまりかの大國主命の幸魂奇魂の地である。かつて、大國主命が全土を平定したときにここを本拠地とした。今や、饒速日（にぎはやひ）がそこを治めているが、そここそ皇位を継ぎ天下を治めるところと、鹽土老翁が示唆したことになる。

天孫族が豊玉姫や玉依姫を妻としたのは、海神の海運力を求めてのことである。舟師（軍船）を親帥（自ら率ゐ）し、速吸之門（大分の佐賀関半島の一帯、複雑な海岸線で古代より海人族の住みついた処）で釣魚する珍彦（椎根津彦）を得る。これは、文王が太公望を得た故事を連想させる。

珍彦は一行をまず菟狹（宇佐）に導き、磐余彦尊は菟狹津媛を中臣氏の遠祖（とほつおや）天種子命（あまのたねのみこと）の妻とした2。菟狹は、天照大神が地上に降ろされた、田心姫（たこりひめ）、湍津姫（たぎつひめ）、市杵嶋姫（いつきしまひめ）を祭る地でもあり、宗像氏など海人族の崇敬する要衝の地であった。続いて岡水門（福岡県遠賀郡蘆屋遠賀川河口附近）を一月程訪れている3。遠賀は、北九州に渡来した文化が拡散する基点となった地、宇佐と下関と遠賀と友好関係を結べば、東征に関して背後の憂ひはなくなる。

次に向かったのは、安藝國の埃宮（えのみや）4、ここで四ヶ月駐留したのは、出雲に対する牽制であろう。続いて、吉備國、高嶋宮で三年の準備を行っている。吉備國は東征の中核となる力を有し、この地で磐余彦尊は「一擧げて天下を平かむと欲す。」5と、決意を披露する。

磐余彦尊が難波6に着いたとき、不思議なことに饒速日命の方からの迎撃はなかった。白肩（枚方）7の近辺は、事代主神が八尋熊鰐（やひろわに）となって出没した地、葛城の鴨族、溝咋（みぞくひ）一族が進出してきた地、三嶋があり、ここを拠点に、敵情、淀川から木津川ルート、岩船街道など一月ほど情勢を調べ、味方となる勢力への働きかけなどを行ったのであろう。岩船街道ルートには、その妹を饒速日命の妻に差し出している実力者、長髓彦（ながすねびこ）が居り、守りが固く断念する。大和川沿いを行くと、龍田で道が細く険しく困難とみ、饒速日命の聖地のある生駒山を一気に攻めたが、山上の長髓彦の軍勢から大量の矢を射掛けられ、命からがら退却する8。

この方面からは無理と判断し、紀の川沿いのルートを目指したが、紀國の竈山（かめやま：和歌山市和田）で矢傷を負った五瀬命（いつせのみこと）が亡くなる9。名草では地元民とのいざこざから、戸畔(とべ：女主人)を惨殺する事件により、五十猛命（いたけるのみこと）、大屋津姫命（おほやつひめのみこと）、枛津姫命（つまつひめのみこと）の後裔、名草や丹敷(にしき)の神を祭る民の反撃に会い、更に紀伊半島を回り、背面の三重方面へ向ふことになった。途中、暴風に遭遇し、稻飯命（いなひのみこと）、三毛入野命（みけいりののみこと）が入水10して風波を治めるのが精一杯で、難破し航行不能となる。生駒から紀伊の土地の神、海の神の怒りに磐余彦尊は対応できず、兄弟をすべて失ふ代償を支払うことになった。

結局、熊野の荒坂津（あらさかのつ：那智海岸、新宮市の三輪崎、熊野市の二木島等諸説あり）方面から深い山中に奈良盆地を目指すといふ難行軍を強いられることになる。荒坂津は丹敷浦（にしきのうら）ともされ、そこで敵対する丹敷戸畔を殺したが、その毒気に全軍が気力を奪はれ行軍不能となる。事態を静観していた天照大神がはじめて動かれた。狙いを定めたのは熊野高倉下（たかくらじ）、饒速日尊の子とされるが皇帥に味方させ、剣を授け毒気を祓はせた。続いて、頭八咫烏（やたのからす：神魂命孫鴨建津之身命）を道案内に降ろされた。これによって磐余彦尊は自信を取り戻し、頭八咫烏を追って大伴氏の遠祖（とほつおや）日臣命（ひのおみのみこと）、大來目（おほくめ）が道を切り開き菟田（うだ）下縣（しもつこほり）にたどり着き、その功績で日臣命は道臣（みちのおみ）を賜った。鴨建津之身命（かもたけつのみのみこと）は単なる道案内ではなく、地の利を心得、吉野では井光（ゐひか：吉野の首部が始祖）、磐排別之子（いはおしわくのこ: 吉野の國樔部が始祖）、苞苴擔之子（にへもつのこ：阿太（あだ）養鸕鳥部（うかひら）の始祖）等を味方に引き込んでいたのであろう。

菟田（うだ）は奈良盆地（中洲）攻撃の拠点であり、まず、魁帥（ひとごのかみ：首領）である兄猾（えうかし）と弟猾（おとうかし）に軍門に下るよう呼び出したが、弟猾は軍威を畏れ応じたが、兄猾は来なかった。兄猾は新宮に招き建物を崩し、磐余彦尊を殺すつもりであると聞き、道臣命に調べさせるとその通りであり、天孫の威、このことを広く知らしめるために、兄猾達を皆殺しにし、そこは菟田の血原（ちはら）と云はれることになった11。

菟田から中洲を攻略するには、山越へ、女坂（上宮奥の大峠）、男坂（半坂峠）、墨坂（榛原町西方）があるが、それぞれ八十梟帥（やそたける）、女軍、男軍、焃炭（おこしずみ）を配し、背後の磐余邑には強力なる兄磯城（えしき）の軍が控へていた12。弟猾によれば、｢倭國（やまとのくに）の磯城邑（しきのむら）、磯城の八十梟帥（やそたける）有り。又、高尾張邑（たかをはりのむら）【或本云　葛城邑（かづらきのむら）也】赤銅（あかがね）の八十梟帥有す。此の類、皆、天皇と距（ふせ）き戰はむと欲ふ。｣と勇士がてぐすねを引いて待ち構へていた。（書紀がここで倭國と用ひるのは磐余彦尊に敵対する奈良盆地の古い國の義であり、中國の書に記される倭國（わこく）とは異なるので注意が必要。）

兄磯城（えしき）は万全の陣を敷いており、尋常の手段では到底攻略はできない。兄磯城の兵一人は磐余彦の兵百人に相当すると評されていた。困り果てた磐余彦尊に天神は夢を送った。敵の聖地、天香山（あまのかぐやま）の土（はに）を奪い、平瓮（ひらか）、嚴瓮（いつへ）を造り、天神地祇を敬ひ祭り、嚴呪詛（いつのかしり）を行なへといふ。弟猾も、名前は八十梟帥と野蛮人の長のごとき形容をしているが、聖地を守護する強力な武人で、寝返るようなことは考へられない相手であると念をおす。両者の祖神は同じ、問題は地祇の支持である。これを懐柔するためには、土地の神の土をもって祭らねば効果は期待できない。社とは土地の神である。饒速日命側以上の祭りを行なひ、自らの正統性を訴へ、饒速日命側を賊軍となし、呪詛をせよといふ。幕末の鳥羽伏見の戦いにおける錦の御旗のごときものである。天香山の土は天社の神とも地社の神とも通じる土であった。

磐余彦尊は椎根津彦と弟猾に老父（おきな）・老嫗（おみな）の格好をさせ、天香山の頂きの土を取りに行かせ、二人は首尾よく土を持ち帰ることが出来た。磐余彦は神意を得たりと心底悦んだ。自らの手で八十平瓮（やそひらか）、八十嚴瓮（やそいつへ）に天香山の埴の霊力を込めた。丹生（にふ）の川上に陟（のぼ）り、これらを焼き土器とし、天神地祇を祭り、嚴呪詛を為す。地祇である水神と丹敷戸畔者を誅した時に毒氣を吐いた神、丹生の神といふべきか、その意向を問ふ。祭った平瓮を試してみた。清水無くして飴が出来るならば、吉野の水神が磐余彦を守護したことになる。刃でなく水でもって天下を平定できる。嚴瓮も試してみた。皇帥を眠りに陥しいれた毒氣が如何にあらはれるか。丹生の川に沈め、魚が大小にかかはらず、柀の葉のごとく浮き流るるなら丹生の神が磐余彦を守護したことになる。この國を定めることができる。「飴（たがね）自づから成り、魚皆浮き出で、水の隨（まにまに）に噞喁（あぎとふ）ふ。」13と成就した。

磐余彦尊は喜び、丹生川上の五百箇（いほつ）眞坂樹（まさかき）を拔取にして、諸神を祭（いは）ふ。高皇産靈尊（たかみむすひのみこと）の霊を自に降ろし、道臣命に嚴媛（いつひめ）の名を授け斎主（いはひのうし）とし、埴瓮（はにへ）を嚴瓮、火を嚴香來雷（いつのかぐつち）、水を嚴罔象女（いつのみつはのめ）、粮を嚴稻魂女（いつのうかのめ）、薪を嚴山雷（いつのやまつち）、草を嚴野椎（いつののづち）と爲した。高皇産靈尊はついに吉野の地祇をとりこみ、丹生の川上は聖地となった。磐余彦の天日嗣（あまつひつぎ）は神的にはこの時点で約束されたことになる。14

天神地祇を敬ひ祭った嚴瓮の粮を磐余彦尊は嘗め、兵を勒（ととの）へて出陣し、國見丘の八十梟帥を撃ち破り、斬る。忍坂邑には、道臣命と大來目に酒を持ち込ませ、穴に伏兵を忍ばせ、敵兵に酔いが回ったところで一気に撃ち殺した15。この勝利により、神意はわが側にありと、幕末に薩長側が徳川慶喜を逆賊扱いしたごとく、心理戦を行ひ、兄磯城に逆賊の意有りとして、弟磯城等を離反させた。更に、忍坂で道臣命、大來目部の奇襲を受けた兄磯城側の心理をついた。忍坂を攻めれば、女軍であろうと敵は主力と思い、精鋭を墨坂からも動員する、その隙に椎根津彦が強健の兵で、菟田川の水を取り、墨坂のいこっている炭火を消して、背後から挟撃が可能となる。これが見事功を奏して、兄磯城は命を落した。16

　最強の敵、長髓彦が残った。決着がつかない。饒速日命も天神の子、磐余彦尊も天神の子、互いに天から授かった物により決着をつけようではないかとなった。しかし、物では決着がつかない、実は天表といふものがあり、それを見て長髓彦の足がすくんだ。長髓彦は正統な世嗣を知っていながら、饒速日命と妹の子、宇摩志麻治命に継承させようとしていた、とする説がある17。天表を見て足がすくんだとは思はれない。磐余彦尊を見て、世嗣文に記された尊（みこと）と直感したのであろう。饒速日命は天人之際（天神と人間の間の義）であり、磐余彦尊と通じるところがあり、長髓彦ではそのことを了解させることは無理とみて、長髓彦を殺した。「饒速日命、本より天神の慇懃を知る、唯、天孫、是與にす。且つ見夫の長髓彦の稟性愎佷を見、以て天人之際を敎へ可からず、乃ち之を殺す。其の衆を帥ゐて歸順ふ。天皇、素より饒速日命、是、天より降る者と聞きて今果して、忠效を立つ。則ち之を褒めて寵む。比、物部氏之遠祖也。」饒速日命が磐余彦尊に従ったことで、中洲は新しい時代を迎へることになった。

　磐余彦尊は皇天（あまつかみ）之威（いきほひ）18に導かれて、本来あるべき地、中洲に戻る。それ故、神日本磐余彦天皇（かむやまといはれひこのすめらみこと）と命名され、橿原宮（かしはらのみや）に於て、即帝位（あまつひつぎしろしめ）し19、神意が地上において成就した。平成時代に生きる人間にとって、これを歴史とするには、違和感があるが、記述を辿れば、このような構成となる。何を言はんとしたのであろうか。

1) 「東に美き地（くに）有り。青山、四周（よもにめぐ）れ、其の中に亦、天磐船（あまにいはふね）に乘りて飛び降る者有り。余、謂（おも）ふに、彼の地には、必ずや以て大業（あまつひつぎ）を恢弘（ひらきの）べて、天下に光宅（みちを）るに足りむ。蓋し六合（くに）の中心（もなか）か。厥（そ）の飛び降る者、是れ饒速日と謂ふか。何ぞ就きて之を都とせざるか。」書紀巻三　神武天皇　[神日本磐余彦天皇の決断](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm)

2) 書紀巻三　神武天皇[冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm#冬十月丁巳)

3) 書紀巻三　神武天皇[十有一月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm#岡水門)

4) 書紀巻三　神武天皇[十有二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm#至安藝國)

5) 書紀巻三　神武天皇[乙卯年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm#乙卯年)

6) 書紀巻三　神武天皇[戊午年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm#戊午年)

7) 書紀巻三　神武天皇[三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm#三月（やよひ）丁卯)

8) 書紀巻三　神武天皇[夏四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki7.htm#夏四月（うづき）)

9) 書紀巻三　神武天皇[五月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki8.htm)

10) 書紀巻三　神武天皇[六月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki8.htm#六月（みなづき）乙未)

11) 書紀巻三　神武天皇[八月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki8.htm#秋八月（はつき）甲午)

12、13、14) 書紀巻三　神武天皇[九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki8.htm#九月（ながづき）甲子)

15) 書紀巻三　神武天皇冬[十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki9.htm)

16) 書紀巻三　神武天皇[十有一月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki9.htm#十有一月)

17) 「香具山(奈良県橿原市)を司る長髄彦は、奇玉火之明尊に御子が無かったので、天照神より伝わる子守神の『世嗣文(ヨツギフミ)』(系図)をもって天押雲尊に祈らしのですが、その文(フミ)を頂きたいと願い出たのですが許されず、鵜葺草葺不合尊が亡くなられる時に天種子命はその文を三笠山の倉に納められて武仁尊(タケヒト：後の神武天皇)のお伴をし、筑紫に行かれたのです。長髄彦は、その留守を狙って倉から文を取り出し写し取ってしまうのです。この事件により政事は混乱するのです。そして長髄彦は、世を乱すようになり、それを平定するために東征が行われる。」（[ほつまつたゑ](http://www1.ocn.ne.jp/~hotsuma8/ht121.html)）

18) 書紀巻三　神武天皇[三月辛酉](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki10.htm)

19) 書紀巻三　神武天皇[辛酉年春正月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki10.htm#辛酉（かのとのとり）)

**神代紀―國譲りとその不思議**

　伊奘諾尊、伊奘冉尊の産んだ國を大八洲國（おほやしまのくに）と言ひ、産んだ順番は、淡路洲、大日本（おほやまと）豐秋津洲（とよあきづしま）、伊豫二名洲（いよのふたなのしま）、筑紫洲（つくしのしま）、雙（ふたご）となる億岐洲（おきのしま）と佐度洲（さどのしま）、越洲（こしのしま）、大洲（おほしま）、吉備子洲（きびのこしま）である。日本、これを耶麻騰（やまと）と云ふ1。對馬嶋（つしま）、壹岐嶋（いきのしま）といった小嶋は皆、潮（しほ）沫（あは）が凝り固まったと分類された。古事記では豐秋津洲は佐渡島の次であるが、書紀はそれを断固訂正し、最初とした。

　淡路の「路」とは神が通ふ路のことで、淡路洲は未熟児であったので、縁が淡く、通いづらい路といふことで、大日本がついていない。最初の洲であるが、中心から少し外れている。中心は豐秋津洲といふのが書紀の譲れない見解である。豐秋津洲は本州の畿内のことであるが、秋津の語源は、腋上（わきがみ）嗛間丘（ほほまのをか）から奈良盆地を眺めた形が蜻蛉（あきづ：トンボ）が臀呫（となめ：交尾、子孫繁栄）している形に似ていることからきており2、奈良を中心とした本州である。この國の中心は奈良盆地、中洲であるといふのが書紀の基本であり、磐余彦尊が東征にあたり、青山、四周、六合の中心としたところである。

　天神が住む高天原（たかまがはら）に対して、地上は豊葦原中國（とよあしはらなかつくに）と称されるが、元来は荒れており、岩石草木に至るまで凶暴であったものを、大國主命（おほくにぬしのみこと）と少彦名命（すくなびこなのみこと）が力を合はせて、説き伏せて従はせた3。この世の人々や畜産の療病（やまひをさむ）方法、鳥獣、昆虫の災いを払うための禁厭（まじなひやむ）方法を定めて治めたといふ4。”おほ”は尊称。”くに”は土地、天に対する國、”ぬし”は大人（うし）、貴人の尊称、その地を支配することを意味する。その名のとおり、大國主命が葦原中國を治めていた。大國主神の幸魂奇魂（さきみたまくしみたま）が三輪に住んだ大物主神（おほものぬしのかみ）、その子、事代主神（ことしろぬしのかみ）は葛城（御所市一帯）から八尋熊鰐（やひろわに）に化して三嶋（枚方近辺）の姫のもとに通っており、書紀においては、この統治は中洲（奈良盆地）を本拠として行はれていたことは明らかである。

天神は、葦原中國（地上）の実権を得るために、天穗日命（あまのほひのみこと）や天稚彦（あめわかひこ）を派遣するが大己貴神（おほあなむちのみこと：大國主神）に懐柔され、姫を娶り、天上に報告も返さぬほどであったとする。天照大神は天稚彦に、「豐葦原中國、これは、吾が兒が王たるべき地なり。」と告げ、地に降ろしたはずである。困った天照大神に代はり策を立てたのが高皇産靈尊（たかみむすひのみこと）であった。武神、經津主神（ふつぬしのかみ）、武甕槌神（たけみかづちのかみ）の二神を派遣し、彼等は出雲國五十田狹（いたさ）の小汀（をはま）に到り、大己貴神に國譲りを迫る5。大己貴神は、その子、事代主神に相談するが、國譲りを避けることは不可避との事代主神の進言を容れ、平定に用いた廣矛を二神に渡し6、「この世の統治は天神である皇孫が行ってください、私はあの世、幽界（霊界）を治めましょうと」葦原中國（地上）を去った7。

不思議なことに、天神は皇孫、天津彦彦火瓊瓊杵尊（あまつひこひこほのににぎのみこと）を葦原中國の中心である中洲（奈良盆地）ではなく、日向の襲の高千穗峯に降ろした。高皇産靈尊は、高天原に呼びつけた大國主神の御魂である大物主神に、國神（くにつかみ）でなく我が女（むすめ）の三穗津姫（みほつひめ）を妻とするならば、八十萬神を嶺（ひき）ゐて皇孫を護るべし、と地上に返している8。八十萬の國神を率ゐて皇孫を護持するとは、皇孫の葦原中國統治のナンバー２、大國主神に成り代はり、皇孫を補佐する立場である。中洲における支配のことには直接には触れられていないが、皇孫が中洲に降りないとするなら、一体誰が中洲を統治したのであろうか？この場合、暗に、大物主神に委ねたとせねばなるまい。この不可解さは、瓊瓊杵尊を、中洲には降ろせない事情、書紀や古事記が書けない事情が、中洲にあった、と考へる他あるまい。

それは、百余國のなかで力をつけた奴國の後の國、より統一された形での倭國、卑弥呼を共立して邪馬台國と称された國、あるいはそれ以外の國であるのかもしれない。中洲を言及することのできない勢力が占めていた。それは、饒速日命以前の勢力でなくてはならない。國譲りが行はれてから、饒速日命に至るまで中洲を治めていたのは誰か？中洲は、磐余彦尊の東征になって、突如、六合の中心として、呼び起こされ、磐余彦尊によって、天神の意が実現されることになる。倭でなく、書紀における日本（やまと）の成立であった。かくて辛酉（かのとのとり）年春正月（むつき）庚辰（かのえたつ）朔（ついたち）（BC660.01.01）、神日本磐余彦天皇（かむやまといはれひこのすめらみこと：神武天皇）は橿原宮において、即帝位（あまつひつぎしろしめ）された。しかし、この現実離れした年代設定が様々な問題を引き起こした。

書紀の編纂者達に紀元前660年といふ考へ方はない。干支を駆使し、時代を遡った。中國では春秋時代、斉に管仲ありて、桓公が中原の覇者となった時代、我が國においては、神日本磐余彦天皇が日本（やまと）國を樹立したと定めた。先に見たように、後漢の「論衡」に、「周の時、天下太平、越裳白雉を献じ、倭人鬯艸を貢す。」「成王の時、越裳雉を献じ、倭人暢を貢す」とあり、周の頃は倭であったかもしれないが、もはや春秋時代の覇者がでる頃には、我が國は、日本（やまと）であったと宣言したことになる。先に、蘇那曷叱知と都怒我阿羅斯、天日槍等が半島から日本列島に渡来した話をみたが、書紀のなかでは、日本列島から半島に行く話しは、素戔嗚尊（すさのをのみこと）が韓國に渡ったといふ伝承以外には、氣長足姫尊（おきながたらしひめのみこと：神功皇后、じんぐうくわうごう）が紀元200年に遠征を行ふまでは無い。徳川時代と同じく、鎖國状態であり、860年間それが続いたことになる。平成の世に生きる人間からすれば、奇想天外な時代設定であり、コンピュータもない時代に、どうしてそのようなタイムスパンに暦を割り振り、登場人物をはめ込むことが出来たのか、驚嘆に値する。

そうしなければならない事情におかれた編纂者の苦労は想像を超へる。これを矛盾無く記述することは不可能であり、文中では若々しくとも、登場人物の年齢を計算すれば、老男、老女となる。この点で、書紀は、古事記とは全く別の書と云はねばならない。何故このような設定をしなくてはならなかったのか、それは、氣長足姫尊をみてから、考へてみることにしたい。

1) 書紀巻一　神代上　[國産み](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki1.htm#伊奘諾尊　伊奘冉尊)　古事記は、淡道の穂の狭別島（淡路島）、伊豫二名島（伊豫、讃岐、粟、土佐）、隠岐三子島、筑紫島（筑紫、豊、肥、熊曾）、伊岐島（壱岐）、津島（対馬）、佐度島、大倭豐秋津島（畿内）、（大八島國）。還りに、吉備兒島、小豆島、大島（山口）、女島（大分）、知訶島（五島列島）、両兒（長崎男女群島）を生んだとする。奴國の時代の海路が基本となり、大倭豐秋津島（畿内）に政権が樹立されたことを反映したものと思はれる。書紀は対外的配慮上からも、大日本豐秋津洲を中心とした。

2) 書紀巻三　神武天皇　[卅有一年夏四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki10.htm#卅有一年夏)

3) 「本より荒芒（あら）びたり、磐石草木（いはくさき）に至及（いた）るまでに、咸（ことごとく）に能(よ)く強暴（あしか）る。然れども、吾已（すで）に摧（くだ）き伏（ふ）せて、和順（まつろ）はずといふことなし。」書紀巻一　神代上　[大國主神](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki3.htm#大國主神)

4)「復、顯見蒼生（うつしきあをひとくさ）及畜産（けもの）の爲は、其の病（やまひ）を療（をさ）むる方（みち）を定む。又、鳥獸（とりけだもの）昆蟲（はふむし）の災異（わざはひ）を攘（はら）はむが爲は、其の禁厭（まじなひや）むる法（のり）を定む、是を以て、百姓（おほみたから）今に至るまでに、咸（ことごとく）に恩頼（みたまのふゆ）を蒙（かがふ）れり。」書紀巻一　神代上　[大國主神](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki3.htm#大國主神)

5) 書紀巻二　神代下　[經津主神、武甕槌神の派遣](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki4.htm#天照大神　勅（みことのりす）)

6) 「『我が怙（たの）む子（事代主神）、すでに避り去りぬ。故に、我も、また、まさに避らむ。もし、吾防禦（ほせかま）すは、國内の諸神、必ずやまさに同じく防禦す。今我避り奉るは、誰かまたあえて順（まつ）ろわざる者あるや。』そして、國を平く時に杖（つ）くところの廣矛をもって、ニ神に授けて申された。『吾この矛をもってついに功を治すあり。天孫もしこの矛をもって國を治すは、必ずや平安かなわむ。今、我まさに百たらぬ八十隈に隠れ去らむ。』言い終わるや遂に隠る。」書紀巻二　神代下　[經津主神、武甕槌神の派遣](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki4.htm#天照大神　勅（みことのりす）)

7) 「吾治む所の顯露（あらは）の事は、皇孫治むにかなふ。吾まさに退り幽事（かくれたること）を治めむ。」書紀巻二　神代下　[一書](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki4.htm#天神（あまつかみ）遣)

8) 「高皇産靈尊、大物主神に勅す。「汝、もし國神をもって妻となすは、吾なお汝に疏（うと）し心有りと謂ふ。故に今吾が女、三穗津姫をもって汝に配せ妻と爲す。宜しく八十萬神を領ゐ、永に皇孫の爲に護り奉るべし。すなはち、還してこれを降らしむ。」書紀巻二　神代下　[一書](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki4.htm#天神（あまつかみ）遣)

**二章　半島をめぐって**

**氣長足姫尊の政策転換**

　氣長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）は足仲彦天皇（たらしなかつひこのすめらみこと：仲哀天皇）の皇后である。父は、近江國坂田郡に勢力を築いた氣長宿禰王（おきながのすくねのおほきみ）であり、稚日本根子彦大日日天皇（わかやまとねこひこおほひひのすめらみこと：開化天皇）と和珥臣の遠祖、姥津命（ははつのみこと）の妹、姥津媛（ははつひめ）の子孫である1。母は新羅の王の子、天日槍を祖とする田道間守2の血をひく葛城高顙媛（かづらきのたかぬかひめ）であり倭（やまと：奈良）、近江、北陸、半島を視野に置く一族の女（むすめ）であった。

皇后による半島への進出は、神託に始まる。足仲彦天皇は熊襲（くまそ）征伐で筑紫の橿日宮（かしひのみや）に入るが、神が皇后の口をかりてこう告げた。「何も無い熊襲ではなく、眉の美しい乙女のごとく海の向こうにある宝に満ち、天を享ける新羅を討て、船と穴門の直（あたひ）から献上された田をもて私を祭れば、血を流さずとも服従し、熊襲も従ふ3。」熊襲の背後にあるのは新羅であると云はんばかりの神託であった。

天皇は岳に登り海の彼方をご覧になったが國は見えず、皇祖から私にいたる天皇が、これまで、ことごとくの神祇を祭ってきたが、祭り忘れた神があっただろうかと、問ひ直された。神は再び皇后の口をかりて、天の水にくっきりと影が映っており、従へるべく我が眼力で睨みつけているといふに、それが見えないならば、その國を得ることは出来ぬ。皇后がはじめて胎（はら）み、その子を獲（え）ると吉祥を伝へたもふたが、天皇は、そのことも信じられず、熊襲を討つこともならなかった4。

天皇が崩（かむあが）られて後、皇后は神託をくだされた神について尋ねられた5。その神は、撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命（つきさかきいつのみたまあまさかるむかつひめのみこと）と申された6。天照大神の荒魂（あらみたま）、荒魂とは災害や病気や戦いをもたらす魂、和魂（にきみたま）の反とされる。撞賢木嚴之御魂（つきさかきいつのみたま）とは、榊に憑く、撞くごとく威力のある魂、荒魂を意味しようか、天疎向津媛命（あまさかるむかつひめのみこと）は、天から遠く離れ、港に向かう媛、まるで氣長足姫尊（神功皇后）その人の未来を暗示するような名前である。他に神はおられるか、更に問ふと、稚日女尊（天照大神の分身あるいは妹）、經津主命や武甕槌命といった軍神、予知を司る事代神、航海を司る表筒男・中筒男・底筒男神と答へが返ってきた。吉備臣の祖、鴨別（かものわけ）を遣はして、熊襲國を撃たしむと、熊襲は平定され、神意は示されたと皇后は意を強くされた7。

田を定め、溝を掘り、河の水を引き、神田として奉納をし、新羅を討つ決意を固め8、神意を確かめるために、海水に髪をすすぎ二つに分かれるか“うけひ9”をされると、髪は二つに分かれ神意が示された10。さりとて、師（いくさ）を興すは國の大事、神意で夢のごときお宝が約束されているとは言へ、鎖國のような状態からいきなりの海外派兵であり、冷静に考へれば、まさしく無謀、その責任は重大、ましてや皇后は女性である。男となって（男装して）國の大事にあたる覚悟を示された11。神祇の助けはもとより、これには群臣の協力が欠かせない。成功すれば群臣の功、失敗は我が身一つの責任、その意を固めたが、共によく謀ることを群臣に求められた。橿日宮に集められた群臣は同意したといふ12。

実のところ諸國から軍卒を集めることは難しかった。書紀的には鎖國の状態が続いており、この政策の急転換は、唐突、準備不足であり、神意と言はれても、受け容れられるものではなかった13。大三輪の神（大物主神）に刀矛を奉納し、地祇、“くにつかみ”の首領に願って、やっと「軍衆自ら聚（あつま）る」ことができた。

天の水にくっきりと影が映る國、新羅の捜索が行はれ、「磯鹿（しか）の海人、名は草を遣はして視しむ」と國があるとの報告が入った14。志賀島の海人であり、すでに見たように、彼等は奴國の時代から半島と交易をしており、半島のことは当然分かっており、書紀においても、蘇那曷叱知と都怒我阿羅斯、天日槍等の来訪のこともあり、ここで新羅がやっと見つかったといふのは理解に苦しむ。とにもかくにも、「和魂は王身に服ひて壽命を守らむ。荒魂は先鋒として師船を導かむ。」と船出をされた。皇后は実は身重であり、片や和魂（にきたま）で胎児を守り、片や荒魂（あらたま）で師船を鼓舞しての船出であった15。

庚辰年冬十月の己亥の朔辛丑（AD200.10.03）、天神地祇の助けにより、たちまちに大波をともなって新羅を襲ひ、新羅の王（こきし）は、大波が押し寄せ、都の水没を恐れるほど驚き、神國（かみのくに）日本（やまと）の聖王（ひじりのきみ）、天皇（すめらみこと）の神兵と思ひ、戦はずして服した16。飼部（みまかひ）となり、春秋に貢ぎを絶やさぬことを誓ったとも云ふ17。寶庫を封印し、圖籍文書を收め、皇后の矛を王の門に掲げ、神託は成就された18。様子を伺っていた高麗（高句麗）と百濟の王は、新羅が圖籍文書を收めたことを見て、服し、朝貢を約し、皇后は三韓に、内官家屯倉を定めた19とするのが書紀の立場である。三韓とは、ここでは、新羅、高麗、百濟であり、いはゆる馬韓、辰韓、弁韓とは異なるので注意を要する。

書紀は、磐余彦尊によって、天神の意が実現され、皇孫の子孫が本来あるべき中洲に入場したように、氣長足姫尊によって天神の意が実現され、三韓が服したと記した。この二つで一つのセットとなる。歴史といふよりは、アキレスやヘクトールの戦いがその守護神の戦ひであるごとく、どこか歴史を反映しているものの、神と英雄の物語、神話とみるほうがすっきりする。我が國では、この神話に基づき、祭祀が引き継がれることで、その人々の歴史となり、長い年月を経る中でその神話を生きるといふ現実を生み出してきた。

この遠征の物語は、実は大きな國内問題の裏面であった。日本（やまと）外交の大転換であり、それも、中洲の纏向（まきむく）ではなく、神託により橿日（かしひ）で決定されたものであり、重臣が参加していたとはいへ、中央では疑心があった。足仲彦天皇が氣長足姫尊を娶る前の子、麛坂王（かごさかのみこ）、忍熊王（おしくまのみこ）をはじめとする有力氏族などは、この政策決定には関与しておらず、正確な情報も伝達されていなかった。結果的に、遠征は成功したらしい。氣長足姫尊が男装したのは、実のところ御子のできたことを隠す意図があり、臨月のまま軍事行動を行ったにもかかはらず、無事に御子すら生まれたらしい、政権がその子に継がれるなら、麛坂王、忍熊王等にとっては、最悪のシナリオとなる。古事記では、皇后側は、御子は死んだといふ噂を放ち、喪船すら用意させたと云ふ20。麛坂王、忍熊王は父、足仲彦天皇の陵を作ると偽装し動員をかけて、人毎に兵器、武具を持たせた。これに組する若狭、難波を基盤とする倉見別（くらみわけ）と五十狹茅宿禰（いさちのすくね）が将軍として日本武尊の遺産ともいふべき東國の兵を徴集した21。吉備氏と大伴氏は息長足姫尊（神功皇后）側に合流した。

皇后は、天照大神の荒魂を穴門（忌宮神社）と廣田（広田神社）、稚日女尊を活田長峽（生田神社）に、事代主尊を長田（長田神社）に、表筒男、中筒男、底筒男、三神を渟中倉の長峽（摂津國菟原郡住吉郷、住吉大社：難波説もある）に祭り、味方を増やしつつ、紀伊に到り、太子を日高（和歌山県日高郡）の小竹宮に避難させる22。日食が起こったことを幸いに、決戦の場で、皇后が亡くなったとの噂を流したと古事記は伝へる23。決戦の場は宇治川となった。皇后側は連合して、君主になった側がお互いを安堵すればどうかと、武装解除をし、相手もそれに従ふよう誘ひ、武将解除したところを別働隊に襲はせ勝利を得た24。最終的には瀬田川に持ち越されるが、皇后側は、この川の手前で忍熊王を殺し、東國側の兵との合流を阻止、分断し、勝利を得ている25。

書紀は古事記とは異なり、足仲彦天皇が皇后を伴ひ角鹿（つるが）に行啓し、皇后を残し紀伊國へ巡狩したと記した26。その際に、熊襲の反乱が起こり、天皇は武内宿禰をはじめとする紀伊國の勢力を率ゐ、皇后は氣長氏の勢力を率ゐて、それぞれ別途に豐浦に向かった。この二つが開国への原動力であった。豐浦（とゆら）の津（港）は瀬戸内海航路への出入り口、潮待ちの最初の港であり、大陸や半島の情報の集まる地であった。豐浦忌宮（いみのみや）神社の数方庭（すほうてい）の伝承によれば、熊襲を煽動して豊浦宮に攻め寄せた新羅の塵輪（じんりん）を仲哀天皇が射倒したとされ27、熊襲と新羅が提携していたとする。豐浦から岡水門へ天皇は熊鰐（くまわに）の導きで外海航路をとり、皇后は五十迹手（いとて）の導きで洞海湾（古代は岡水門に通じていた）、内海ルートをとり、その地の海神の協力を仰いだ28。熊鰐（岡縣主の祖、穴門より宇佐あたりの海域から岡水門を治める）や五十迹手（怡土（伊都）県主の祖、天日槍の子孫）が熊襲の海人勢力に対抗して、天皇と皇后をいただき土地の海神の了解を得たことになる。熊襲といふと野蛮に聞こへるが、大足彦忍代別天皇（おほたらしひこおしろわけのすめらみこと：景行天皇、けいかうてんわう）が筑紫國の高田行宮（たかたのかりみや）を巡狩されたとき29有明海沿岸や筑後川沿いに、大陸や半島との交易による文物の跡をご覧になったごとく記されているが、それは過去のことではなく現実であった。後の磐井の乱かつての吉野ケ里の南の地、先進地域で拓けていた、それ故、皇后は半島の前に熊襲を討ち、この海人勢力と新羅との関係を絶っておかねばならなかった。大陸や半島との間の海人間の動きを視野にいれ、九州や日本海側における海人を着実に皇后の勢力に加へたことが、財政的にも開国勢力を支へた、とも読める。

皇后はその御子を皇位につけるためには手段を選ばなかった。息長足姫尊の本領はこの政権交代の実現にあり、そのすざまじさから、半島への進出のスーパーレディーに祭り上げられたのかもしれない。神意を取り次ぎ、これらの神々への崇敬を高め、崇敬者を開國勢力に取り込む手腕は、卑弥呼の一面を彷彿させる。この國を武力統一することに力を尽くした日本武尊に連なる勢力を中洲に閉じ込め、淀川水系を活用し、河内に基盤を築き、開國を推し進めた勢力を結集し、大きな歴史の転換を図った姿が、皇后の本来の顔ではなかったか。半島進出を推進した勢力を率ゐたことは間違ひなかろうが、臨月でありながら男装し、自ら軍勢を率ゐて渡韓したことは神話であろう。その御子が譽田天皇（ほむたのすめらみこと）、應神天皇である。このあたりから、実在の人間の歴史が描かれるとされる。

ただ年代に関しては、干支を二運、60年x2=120年、タイムマシンのごとく操っており、これから見る半島との交渉も、年代を干支で換算して辿ることをせざるを得ない。その前に、いましばらく、日本列島をとりまいていた状況を見ておきたい。

1）書紀巻四、開化天皇　[六年春正月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki12.htm#六年春正月辛丑)

2) 書紀巻六、垂仁天皇　[三年春三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki15.htm#三年春三月)

3) 「天皇、何ぞ熊襲の服（まつろ）はざるを憂へたまふ。是、膂宍（そしし）の空國（むなくに）ぞ。豈（あに）、兵（いくさ）を擧げて伐つに足らむや。この國に愈（まさ）りて寶（たから）有る國、譬（たと）へば處女（をとめ）の睩（まよびき）の如くにして、津に向へる國有り。眼炎（まかかやく）の金（こがね）・銀（しろかね）・彩色（うるはしきいろ）、多（さは）にその國に在り。是を栲衾（たくぶすま）新羅國（しらきのくに）と謂ふ。若し能く吾を祭りたまはば、曾（かつ）て刄（やきは）に血（ちぬ）らずして、その國必ず自づから服ひなむ。復、熊襲も服ひなむ。その祭りたまはむには、天皇の御船、及び穴門直（あなとのあたひ）、踐立（ほむたち）の獻れる水田（こなた）、名けて大田（おほた）といふ、是等の物を以て幣（まひな）ひたまへ。」書紀巻八、仲哀天皇　[八年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki20.htm#八年春正月)

4) 書紀巻八、仲哀天皇　[八年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki20.htm#八年春正月)

5、6、7) 書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年三月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#三月（やよい）壬申",)

8) 「吾、神祗（あまつかみくにつかみ）の敎（みこと）を被（う）け、皇祖（おほみおや）の靈（みたまのふゆ）を頼（かうぶ）りて、滄海（あをきうなばら）を浮渉（わた）りて、躬（みづか）ら西を征たむとす。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#夏四月（うづき）壬寅)

9) 「これを以て、頭（かしら）を海水（うしほ）に滌（すす）がしむ。若し驗（しるし）有らば、髮（みぐし）自（おの）づからに分れて兩（ふたつ）に爲（な）れ。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#夏四月（うづき）壬寅)

10) ｢即ち海（わた）に入れて洗（すす）ぎたまふに、髮自づからに分れぬ。皇后（きさき）、便ち髮を結分（あ）げたまひて、髻（みづら）にしたまふ。｣書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#夏四月（うづき）壬寅)

11) 「それ師（いくさ）を興し衆（もろもろ）を動すは、國の大事（おほきこと）なり。安（やす）さも危（あやふ）さも成り敗れむこと、必（ふつく）に斯（これ）に在り。今征伐（う）つ所有り。事を以て群臣に付（さづ）く。若し事成らずは、罪群臣に有らむ。是、甚だ傷（いた）きことなり。」まして、「吾婦女（たをやめ）にして、加以（また）不肖（をさな）し。然れども暫く男（ますらを）の貌（すがた）を假りて、強（あながち）に雄（をを）しき略（はかりこと）を起さむ。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#夏四月（うづき）壬寅)

12) 「上は神祗の靈を蒙（かうぶ）り、下は群臣の助に藉（よ）りて、兵甲（つはもの）を振（おこ）して嶮浪（たかきなみ）を度り、艫船（ふね）を整へて財土（たからのくに）を求む。若し事成らば、群臣、共に功（いさをしきこと）有り。事就（な）らずは、吾獨罪有れ。既にこの意（こころ）有り。それ共に議（はか）らへ。群臣、皆曰す、『皇后、天下（あめのした）が爲に、宗廟（くに）社稷（いへ）を安みせむ所以を計ります。且（また）罪臣下（おのら）に及ぶまじ。頓首（つつし）みて詔（みことのり）を奉（うけたまは）りぬ。』」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年四月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#夏四月（うづき）壬寅)

13) 「諸國に令（みことのり）して、船舶を集へて兵甲（つはもの）を練（ね）らふ。時に軍卒（いくさびとども）集ひ難し、皇后の曰はく、『必ず神の心ならむ。』則ち大三輪社を立てて、刀矛を奉りたまふ。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#秋九月（ながづき）庚午)

14、15) 書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年秋九月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#秋九月（ながづき）庚午)

16) 「新羅の國を建てしより以來、未だ甞も海水（うしほ）の國に凌（のぼ）ることを聞かず。若（けだ）し天運（よのかぎり）盡（つ）きて、國、海と爲らむとするか。」と驚き畏れ、「吾聞く、東に神國（かみのくに）有り。日本（やまと）と謂ふ。亦聖王（ひじりのきみ）有り。天皇（すめらみこと）と謂ふ。必ず其の國の神兵（みいくさ）ならむ。豈兵（いくさ）を擧げて距（ふせ）くべけむや。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)

17)「今より以後、長く乾坤（あめつち）に與（ひと）しく、伏（したが）ひて飼部（みまかひ）と爲らむ。其れ船柂（ふねかぢ）を乾（ほ）さずして、春秋に馬梳（うまはたけ）及び馬鞭（うまのむち）を獻らむ。復海の遠きに煩（いたつ）かずして、年毎に男女の調を貢らむ。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)

18) 「重寶（たから）の府庫（くら）を封（ゆひかため）め、圖籍文書（しるしのふみ）を收（とりをさ）む。即ち皇后の所杖（つ）ける矛（みほこ）を以て、新羅の王（こきし）の門に樹て、後葉（にちのよ）の印としたまふ。故、其の矛、今猶新羅の王の門に樹てり。爰に新羅の王（こきし）波沙寐錦（はさむきむ）、即ち微叱己知波珍干岐（みしこちはとりかんき）を以て質（むかはり）として、仍（よ）りて金（こがね）銀（しろがね）彩色（うるはしきいろ）及び綾（あやきぬ）羅（うすはた）縑絹（かとりのきぬ）を齎（もたら）して、八十艘の船に載（のせい）れて、官軍（みいくさ）に從はしむ。是を以て、新羅の王、常に八十船の調を以て日本國に貢る。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)

19) 「新羅の圖籍を收めて日本國に降りぬと聞きて、密に其の軍勢を伺しむ。則ちえ勝つまじきことを知りて、自ら營の外に來て、叩頭みて款して曰す、『今より以後は、永く西蕃と稱ひつつ、朝貢絶たじ。』故、因りて、内官家屯倉を定む。是所謂三韓なり。」書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)

20) 「ここに息長帶日賣の命、倭に還り上（のぼ）ます時、人の心疑はしきによりて、喪船（もふね）を一つ具（そな）へて、御子をその喪船に載（の）せて、まづ『御子は既に崩りましぬ。』と言ひ漏さしめたまひき。」古事記　仲哀天皇　忍熊王の反乱　岩波文庫

21、22) 書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇明年春二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#明年（くるつとし）春二月)

23)「ここに建振熊の命、權（たばか）りて云はしめけらく、『息長帶日賣の命は既に崩りましぬ。故、更に戰ふべきこと無し。』といはしめ」古事記　仲哀天皇　忍熊王の反乱　岩波文庫

24、25) 書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇明年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）癸亥)

26）書紀巻八　仲哀天皇　[仲哀天皇二年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki20.htm#二年春正月)

27）「数方庭の由来と鬼石　第十四代仲哀天皇は、九州の熊襲の叛乱を平定のためご西下、ここ穴門（長門）豊浦（長府）に仮の皇居を興されたが仲哀天皇七年旧暦の七月七日に朝鮮半島の新羅国の塵輪が熊襲を煽動し豊浦宮に攻め寄せた。皇軍は大いに奮戦したが宮内を守護する阿部高麿、助麿の兄弟まで相次いで討ち死にしたので、天皇は大いに憤らせ給い、遂に御自ら弓矢をとって塵輪を見事に射倒された、賊軍は色を失って退散し皇軍は歓喜のあまり矛をかざし旗を振りながら塵輪の屍のまわりを踊りまわったのが数方庭（八月七日より十三日まで毎夜行われる祭）の起源と伝えられ、塵輪の顔が鬼のようであったところからその首を埋めて覆った石を鬼石と呼んでいる。」[忌宮神社](http://homepage3.nifty.com/chofu/guidimin.htm)　[城下町長府](http://homepage3.nifty.com/chofu/index.htm)

28）書紀巻八　仲哀天皇　[仲哀天皇八年春正月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki20.htm#八年春正月)

29）書紀巻八　仲哀天皇　[仲哀天皇十八年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki17.htm#十八年春三月)

**陳寿と張華　―　魏志倭人伝の裏側**

陳寿は、魏志倭人伝を著はした人である。蜀の巴西郡安漢県（四川省南充市の北東：233年）に生まれ、若くして俊才であった。散騎常侍の譙周（しょうしゅう）に学を受け、春秋左氏伝・公羊伝・穀梁伝。史記、漢書などに精通していた。譙周は劉備の子、劉禅に仕へ勧学従事であったが、諸葛孔明の死後、劉禅に魏への降服を勧めた政治家であり儒学者であった。西晋になって、散騎常侍、皇帝の側近として勅書の伝達をする係、に任命されたが病死している。陳寿はその弟子として、歴史に興味を持ち、觀閣令史、宮中の図書編纂係、に抜擢された1。

しかし、反骨精神の持ち主で、度々咎められ、退けられたとある2。また、その父は、孔明が泣いて切ったとされる馬謖に連座し罪を得るといふ逆境にあった3。陳寿もまた、孔明の子、瞻（せん）に認められなかった4。父の葬儀には病気のため間に合はず、郷党においても貶（とがめ）を受け、それがため、蜀が魏に平定された後も不遇であった5が、譙周の弟子であったことで運が開けたといふのも巡り合はせであろう。

陳寿は、当時の史家達が中央の歴史の編纂に参画しようとしたこととは異なり、巴や蜀の地方の傳（歴史）の編纂に向かった6。これが散騎常侍の文立の目にとまり、晋の武帝に推薦され、中央へ出仕することになる7。そこで司空の張華に見出され、諸葛孔明集を撰し、これが認められ、呉が滅んで後、魏、呉、蜀三國の歴史、三國志の編纂を命ぜられることになる8。元来、尚書や三傳、司馬遷の史記といふ伝統的な歴史を学んで育った陳寿である。このような伝統的な歴史編纂と異なり、遠くインド、太秦（ローマ）に至る西域の地誌を著した班固は、当時、新たなジャンルを拓いていた。陳寿もこれに大きな刺激を受けており、三國志のみならず、後に、辺境の東夷傳を編纂することに情熱を傾け、最東端と思はれた倭人伝に取り組んだものと思はれる。郭義恭（かくぎきょう）が「広志」、（逸文のみで今はないが）という博物誌のなかで、蕃夷部倭國条にも言及しており、その筋の人間の関心が高かったのであろう。

陳寿が三國志を書く前に、官修の史書として、魏には王沈（おうちん）の魏書、呉には韋昭（いしょう）の呉書があり、私家の史書として魚豢（ぎょかん）の魏略があった。魏書、魏略は失はれて定かでないが、陳寿は、これを参照し得たとされるのであるが、それを超へた。

卑弥呼が魏へ使節を送ったのが239年、陳寿6歳、卑弥呼が魏に援軍を請うたのが247年、陳寿14歳、倭の情勢は、蜀の陳寿には如何なる係はりもなかった。およそ海に縁のない陳寿が朝鮮半島情勢に目覚めるのは、40歳以降のことで、それは、彼を取り立てた張華によろう。

張華の妻の父、劉放は魏の明帝のお気に入りの中書監（秘書官）で司馬懿を斉王曹芳（そうほう）の後見人にするのに力を添へた人物である。張華はその縁で、司馬懿の次男である司馬昭（しょう）の秘書となり、司馬昭の子供の炎（えん）が武帝に即位すると、次席秘書官である中書令になり國事に参与した。

しかし、あまり力を持ちすぎたので、首席秘書官の中書監であった荀勗（じゅんきょく）に憎まれ282年から287年の間故郷の幽州（北京）に赴任して、軍事面での総司令官（持節・都督幽州諸軍事・領護烏桓校尉・安北将軍）の要職に就き、大いに業績を上げた。特に朝鮮半島の経略に力を入れたので、東夷の馬韓・新弥（しんび）の諸國や沿海から山間部の、幽州より四千余里も隔たり、歴世いまだ中國に付いたことのない二十余國も、ついに使いを派遣して朝貢するといふ有様となった。

また、張華は267年以後、数年の間に博物誌といふ本を書いている。もと四百巻であったが、内容にあまりに誇張や虚偽が多いとのかどで、武帝に書き直しを命じられ十巻に縮めている。この本の内容は、山川地理の知識、歴史的人物の伝説、奇異な草木・虫魚・鳥獣の描写、神仙方技の故事などであった9。

この張華と陳寿が出会ったおかげで、この当時の東夷の歴史が今に伝へられることができた。更に、陳寿が張華の人脈を辿り、卑弥呼の使節に対応したと思はれる司馬懿の関係者から、当時の倭との交渉について聞き及んでいた可能性もある。あるいは、張華その人や知人から倭の現況の情報を仕入れていたかもしれない、また、張華の書の地理、地誌を引用していたのかもしれない。西域とはくらべものにはならないが、東夷への関心の高まりが興っていたことは確かであろう。東夷伝が記されたのは、単なる好事家が興味本位でまとめた記録ではなく、当時にそれを促すような社会的な潮流があり、魏志倭人伝は極東の東夷伝として、陳寿にとっても格別の伝であったと推察される。

1) 「少（わか）くして學を散騎常侍の譙周（しょうしゅう）に受け、尚書・三傳（春秋左氏伝・公羊伝・穀梁伝）を治め、史（史記）・漢（漢書）に鋭精し、蜀に仕えて觀閣令史（かんかくれいし）となる。」晋書巻八十二、列伝第五十二、華陽國志巻第十一 、後賢志

2) 「宦人の黄皓（こうこう）、專ら威權を弄し、大臣皆な意を曲げて之に附するも、壽（陳寿）は獨り之が爲に屈せず、是に由りて屡々譴黜（けんちゅつ）せらる。」前掲書

3) 「壽の父は馬謖（ばしょく）の參軍と爲り、謖、諸葛亮（諸葛孔明）の誅する所と爲り(228年）、壽の父も亦た坐して髠刑（こんけい:髪を剃られる刑）せらる。」前掲書

4) 「諸葛瞻（しょかつせん）、又た壽を輕んず。」前掲書

5) 「父の喪に遭ひ、疾有り、婢をして藥を丸めしむるに、客、往きて之を見、鄕黨、以て貶議を爲す。蜀の平らぐに(263年11月）及び、是に坐して沈滯すること累年す。」前掲書

6) 「益部は建武より後、蜀郡の鄭伯邑・太尉の趙彦信、及び漢中の陳申伯・祝元靈、廣漢の王文表は、皆な博學洽聞を以て、巴蜀耆舊傳を作る。壽は以て遠を經むに足らざると爲し、乃ち巴・漢の撰を并せて益部耆舊傳十篇と爲す。」前掲書

7) 「散騎常侍の文立は其の傳を表呈し、（晋の）武帝之を善し、著作郞と爲す。」前掲書

8) 「司空の張華、其の才を愛し、以へらく、壽、嫌に遠からずと雖も、情を原ぬるに貶廢に至らずと。舉げて孝廉と爲し、佐著作郞に除し、出でて陽平の令に補す。蜀相諸葛亮集を撰し（274年）、之を奏す。著作郞に除せられ、本郡の中正を領す。魏・呉・蜀の三國志を撰し、凡そ六十五篇なり。時の人、其れ善く事を敘し、良史の才有りと稱す。」「呉平ぐ(280年3月）の後、壽は乃ち三國の史を鳩合し、魏・呉・蜀の三書六十五篇を著し、三國志と號す。」前掲書

9) 森浩一氏編「日本の古代」（中公文庫）

**東夷と楽浪郡**

陳寿によれば、後漢の桓帝、霊帝の末（146年－189年）には世が乱れ、黄巾の乱が発生し、半島における後漢の影響力は後退していた。建安年間（196年－220年）となると、遼東郡の太守であった公孫氏が力を持ち、帯方郡を開き後漢の遺民を集め、兵を起こして、倭や韓を帯方郡の南に従へていた。とはいへ、先に見た、濊（わい）・貊（はく）・倭（わ）・韓（かん）の元へ難を逃れる漢人が流れ込み、東夷の漢の文化受容を促進させ、國の形成の機運を作り出していた。景初年間（237年－239年）、明帝が密かに劉昕（りゅうきん）と鮮于嗣（せんうし）をそれぞれ、海を越へて帯方郡太守、楽浪郡太守として、二郡に送り込んできた1。その時、卑弥呼がこれと手を結ぶ決断をしている。それを見る前に、半島にどういふ状況が生まれていたかを、陳寿に聞いてみよう。

まず、半島に住んでいた人々の位置関係([地図](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/images/sangokusimp.pdf))であるが、濊から見れば、南が貊、辰韓、馬韓、弁韓、北が高句麗、沃沮（よくそ）、扶餘（ふよ）、東が海、西に帯方、楽浪の漢人となる。東夷は朝鮮の東を指しており、陳寿から見れば、濊、辰韓、高句麗、沃沮などが頭に浮かんだのであろう2。そのうち、濊、高句麗、沃沮は、扶餘系（韓は別）であった。中國人は、東夷を従順で、素直で誠があり、恥を知る民とみなす傾向があった。殷王朝の末裔で賢人であった箕子（きし）が、逃れて八條の教を作り、民を教化したとされる朝鮮3の影響を受けているとしたのであろう。

陳寿によれば、濊は、全体で二万戸、山川を境にして分かれて住み、妄りに往来はしない。同姓は結婚せず、病人、死人が出ると、住居を改めた。絹糸、綿を作り、星座を観測して季節と天候を知り、収穫の予知をした。十月節とは立冬のこと、立冬をもって歳を改め、その日には、晝夜、飲酒歌舞、舞天とし、虎を神と祭った。相手を侵犯すれば、生口・牛馬をもって償（つぐな）ひ、人を殺せば、死でもって償はしめた。戦いには三丈の矛を数人が突きたて歩戦をした4。朝貢するには、檀弓（まゆみで作ったそりの高い強弓）、班魚（いさき）、皮、豹、果下馬を用ひた5。果下馬とは、博物志、魏都賦に、「高さ三尺、これに乘り果樹下へ行くことができる」と注されたものである。山川の境による部族別の生活であり、國を運営するといふような組織立ったものではなさそうである。

箕子が中國から逃れて王となったといふ伝承があるごとく、遼東の地では中央を逃れた漢人有力者の一団が中華の風習を導入する役割を果たしていた。秦の時代、朝鮮は秦に服し、朝鮮候となっていたが、否（ひ）の子、準（じゅん）は秦が乱れると王と称した。陳勝や項羽等が秦に叛き戦乱となると、難民が朝鮮に逃れ、燕人の（衛）満は魋結（さいづち形のまげを結い）夷服（えびすの服装をする）の格好をして、一旦は準に帰服し西辺の令守となる。その後も難民は増し、（衛）満はこれを吸収し力をつけ、準を追い払ひ、都を王険城（平壌）に定め、衛氏朝鮮（BC194～108年）を樹立した6。この90年は國づくりといふことからすれば、先駆的な地となったのであろう。

この状況を一変させたのが漢の武帝であった。弁辰等からの朝貢を遮断し、莫大な利益を上げている衛氏朝鮮を武帝は放置せず、討ち、朝鮮國を楽浪郡、玄菟國を玄菟郡、臨屯國を臨屯郡、真番國を真番郡に格下げして直接統治に移した。本物の漢人が直接統治をし、文物・制度を持ち込んだインパクトは大きなもので、文明と未開の間を峻別しはじめたと云ふ7。候、邑、君、三老といふ官職が導入され、下戸を治め8、濊の西は楽浪郡に属し、東の七県は都尉が司った。都尉とは、郡太守を補佐し、郡内の武職や兵卒を掌る官職である。濊は漢人の支配を受けながらも、その制度を取り入れて、國というものの在り方を学んでいた。後には、都尉に代って渠帥（きょすい：統率者）を用ひ、候と為した9。それは、他の東夷にとっても同じことであった。

臨屯郡、真番郡は濊貊を、楽浪郡、玄菟郡は高句麗や沃沮を治める郡であったが、BC82年には楽浪郡に編入され、玄菟郡も当初は濊貊を視野にいれていたが、満州方面に移されるなど、東夷の勢力の在り方によって移動しており、位置がはっきりしていない。しかし、楽浪郡は、文明への入り口となり、周辺の族を吸引し、44年には、東夷の韓人で廉斯（れんし）邑の蘇馬諟（そばし）らが、47年には、高句麗が、49年には、扶余王が、54年には、鮮卑大人が、57年には、東夷の倭奴國王の使者が、107年には、倭國王帥升らが訪れ10、ここを経由して、洛陽へ朝貢を行ひ、文物･制度の吸収、交易を図っていた。ところが、楽浪郡は必ずしも安定していたわけではなかった。

1) 「桓、靈の末、韓、濊、彊盛、郡縣能く制せず、民多く韓國に流入す。建安中に、公孫康、屯有縣以南の荒地を分ち、帶方郡と為す。公孫模、張敞等を遣はし、遺民を收集し、兵を興し、韓、濊を伐ち、舊民稍（わずか）に出ず。是の後、倭、韓遂に帶方に屬す。景初中、明帝密に帶方太守劉昕を遣し、樂浪太守鮮于嗣海を越へて二郡を定む。」三國志、魏書巻三十、東夷傳、馬韓

2) 「濊、南に與（おこ）るは辰韓、北に與るは高句麗、沃沮（よくそ）に接す。東は大海に窮（きわま）る。今朝鮮の東、皆その地なり。」三國志、魏書巻三十、東夷傳、濊

3) 「戸は二萬。昔、箕子（きし）既に朝鮮に適（ゆ）き、八條の教を作り、以てこれを教す。門戸の閉無くして民、盜みを為さず。」「その耆老（長老）舊（ふるく)自ら句麗と同種と謂う。その人の性、愿愨（素直で誠がある）、嗜欲（特に欲しがること）少く、廉恥有り、（句麗に）請（こわ）ず。言語や法俗は大抵、句麗と同じであるが衣服は異る。男女の衣は皆、曲領（曲がった衿）を著（つ）け、男子は銀花を撃ち數寸に廣げ以て（冠）飾と為す。）」前掲書

4) 「漢末、更に句麗に屬す。その俗、山川を重じ、山川各（おのおの）に部分（ぶわけ：人口分布）有り、妄（みだ）りに相い渉（わた）り入るを得ず。同姓婚せず。忌諱（きき：おそれはばかること）多し、疾病、死亡、輒（すなわち：その都度）舊宅を損ない棄て、更に新居を作す。麻布、蠶桑（蚕を飼い桑を植える）有り綿を作す。曉に星宿を候（うかがい）、年歳（穀物の）豐約を豫知す。誅（珠）玉を以て寶と為さず。十月節を常用し天を祭り、晝夜、飲酒歌舞す。これを名づけて舞天と為し、又、虎を祭り以て神と為す。その邑落（邑里と同じ）相侵犯すれば、輒ち相生口牛馬を罰責し、これを名づけて責禍と為す。人を殺す者は死で償（あがな）う。寇盜少し。矛の長さ三丈に作し、或いは數人共にこれを持ち、能く歩戰す。」前掲書

5) 「樂浪檀弓、その地に出ず。その海、班魚、皮を出し、土地、文（文様の美しい）豹饒（おお）く、又、果下馬を出す。漢の桓（帝）の時これを獻じる。（臣松之按：果下馬の高さ三尺、これに乘り果樹下へ行くことができる故にこれを果下と謂う。博物志、魏都賦に見ゆ。）」前掲書

6) 「その後四十餘世、朝鮮侯、（淮）〔準〕僭を號し、王と稱す。陳勝等起つ。天下、秦に叛き、燕、齊、趙民、地を避け朝鮮數萬口。燕人、衛滿は、魋結（さいづち形のまげを結い）夷服（えびすの服装をする）、復た來りてこれを王とす。」前掲書

7) 「漢の武帝、（衛氏）朝鮮を伐ち滅ぼす。その地を分けて四郡と為す。是よりこの後、胡（北方の異民族）と漢は稍（だんだん）別れる。」前掲書

8) 「大君長無く、漢より已來（それよりのち）、その官として侯邑君、三老が有り、下戸を統（す）べ主（つかさど）る。」前掲書

9) 「單單大山領より以西、樂浪に屬す。領より以東七縣、都尉これを主り、皆、濊を以て民と為す。後、都尉を省（はぶ）き、その渠帥（きょすい：統率者）を封じ侯と為す。今、不耐濊（ふたいわい）皆その種なり。」

10) [朝鮮四郡](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kochosen/kochosen5-kanyongun.htm)　日中韓・[三國通史](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/index.htm)

**卑弥呼**

魏志倭人伝に、「その國、本また男子を以て王となし、住（とど）まること七、八十年。倭國乱れ、相攻伐すること歴年、乃（すなわち）共に一女子を立てて王となす。名づけて卑弥呼という。鬼道に事（つか）え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿（ふぜい）なく、男弟あり、佐（たす）けて國を治む。王となりしより以来、見るある者少く、婢千人を以て自ら侍せしむ。ただ男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。宮室・楼観・城柵、厳かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す1。」とある。しかし、古事記にも、書紀にも、古語拾遺、風土記、いづれの書にもこの話はない。よほど、都合が悪く、見事なまでに削除された。

後漢書に、「桓・霊帝の間、倭國大いに亂れ更に相攻伐し、歴年主無し。」とあり、178年から183年、5年間倭國は主なしとされる。70～80年前の男子の王ならば、107年に後漢に朝貢した帥升（すいしょう）等（すいしょうら、までを名とみる説もある）が該当し、奴國の後、倭國王とされる男王である。彼等は、楽浪郡を経由して、朝貢をしていた倭人であり、鏡をはじめ漢の文物を交易していた倭人団であったが、111年に扶余が楽浪郡に攻め込み、また、馬韓、濊が彊盛となると、その交易活動は不安定な立場に置かれた。その時期は、倭國自体も乱れており、184年に黄巾の乱が勃発すると、後漢との交易は極めて困難な状況となった。まして、遼東で、公孫度が半独立政権を樹立し、205年、公孫度の継嗣「公孫康」が後漢に服属し、左将軍の官位を授けられているとはいへ、楽浪郡の南部都尉治を切り放し、南に帯方郡を置き、韓や倭を従へるといふ事態となると、大陸、半島の状況は、倭國にとって厳しいものとなっていた。そのなかにあって、倭國において、女子が王に共立されたといふのが歴史である。

共立は烏丸鮮卑東夷伝、夫余の条で、王の位宮（いきゅう）に嫡子がなかったので死後諸加が孼子（げっし：庶子）の麻余（まよ）を共立した例と高句麗の条で、長子の抜奇（ばっき）が不肖であったので、國人が小子の伊夷模（いいも）を共立した例が挙げられ、王位継承が尋常ならざる場合に使はれるとされる2。この二例では共立した主体は諸加、國人としているが、共に一女子を立てて王となした主体は明らかでなく、文章上では「その（倭）國」が主語となろうが、陳寿もそこが分からず、あいまいな表現にしたのかもしれない。いづれにせよ、共立は中国人からすれば、普通じゃない事態と映っていた。陳寿はこの國を女王國と称し、以前の倭國の延長とみなしたわけではなかった。異様なものを感じていたのであろう。中國的には王とは言ひがたい存在である。
　鬼道に通じた未婚の年長者であり、城柵を兵に守らせ、楼観があり、宮室に婢千人を侍らせ、その姿を見るものは少ない。これは象徴として祭り上げられた存在であり、政治の実権は別の所にあったとみられている。我が國の政（まつりごと）における権威と権力のありかたの原点がある。しかし、婢千人はただごとではない。話半分としても、重さがある。大率、大倭、大人等を統御する力があり、政治力のある人材が集められていたことであろう。大陸や半島の情勢についても、的確な情報がもたらされていたはずである。さもなくば、絶妙のタイミングで魏と手を結ぶことなど、出来ようはずもない。女王として親魏倭王に叙せられたことは、権威としては神功皇后の比ではあるまい。天照大神が女性とみなされるのは、この歴史的経験と無縁ではなかろう。

205年、公孫康が帯方郡にまで勢力を伸ばして3年後、208年、江東の支配者・孫権と荊州の支配者・劉表の客将・劉備の連合軍は、魏の曹操を赤壁において破り、天下の形成が変化する。曹操は213年魏公、216年魏王となるも、219年に歿する。220年に曹操の子曹丕が東漢献帝に禅譲を迫り、魏帝として洛陽に都を置き魏王朝を建國、蜀の劉備は翌221年に成都に都を置き蜀漢を興し、呉の孫権は229年に建業に都を置き孫呉を興した。230年魏では、曹真が大司馬、司馬懿が大将軍に、公孫淵が車騎将軍に任ぜられる。しかし、奇妙な事態が水面下で進行していた。
　半島では、209年公孫康は高句麗王伊夷模（いいも）を都から追ひ落とし、弟の公孫恭が後を継ぎ、221年曹丕に車騎将軍に任ぜられている。公孫恭は、甥の公孫淵に位を奪はれ、228年公孫淵は曹叡から揚烈将軍・遼東太守に任ぜられていた。孫権は魏の背後を突こうとして、229年公孫淵に使者を送り、233年に公孫淵を燕王に任命する。五丈原に迫り来る蜀の諸葛孔明と、南から魏を同時に攻め込む密約を交はしていた。魏の将軍司馬懿（仲達）にとっては驚くべき事態の展開であった。諸葛孔明と孫権が示し合はせて攻めてくるならニ正面で対応せねばならない。その背後を公孫淵に脅かされるとなれば、容易ならざる事態となる。しかし、孫権が軍を動かそうとせず、孔明が単独で魏を攻めざるえない形勢と見るや、公孫淵は何と孫権の使者を殺し、魏から楽浪公に任命されるといふ事件が起こった。孫権は、今度は、高句麗王を単千（ぜんう）に叙し、朝鮮半島に圧力をかけた。

ところが234年諸葛孔明が五丈原で病死すると、236年高句麗王は、単千を返上し、魏に従ふことになった。蜀の脅威がうすらぎ、明帝が遼東の公孫淵討伐に乗り出すと、公孫淵は再び孫権に支援を求める。孫権は援軍を送るが間に合はなかった。景初中とは、景初は三年で改元されるため、景初二年(238年)となろうか。明帝は密かに帶方太守劉昕(りゅうきん)、樂浪太守鮮于嗣(せんうし)を派遣し、海を越へて二郡を定めた。公孫淵が帯方郡を目指して逃げたが捕へられたのはこのためであった。

これらの情勢は女王國の交易の官である大倭や伊都國一大率に集められ卑弥呼のもとに送られていたはずである。女王國の前には、韓、濊、公孫淵、高句麗、はたまたその先に、魏あるいは呉があった。この時期、女王國の交易は帯方郡を支配する公孫淵を経由せねばならなかった。ところが公孫淵の行動は洛陽との交易を崩壊させかねないものがあり、公孫淵が呉と結んだ時に、女王國はこれを決定的不利な展開とみなし、明帝が密かに派遣した帶方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣と接触し、魏と結ぶことを選択したのであろう。魏からすれば、奴國以来一貫して洛陽に朝貢してきた國、今や、女王國であるが、それが、公孫淵の背後を脅かす存在となるなら、好都合であったことに変りは無い。

そして、倭には呉の末裔と称する勢力があった。陳寿は、文身の風習が会稽（呉越）の民と倭人に共通するのは、倭の諸國が会稽の東にあり3、会稽からの移住者であるからとさりげない記述をしている。魏略は、「其の旧語を聞くに、自ら太伯の後と謂ふ。昔し、夏后小康の子、会稽に封ぜられ、断髪文身、以て蛟龍の害を避く、今、倭人、亦文身し、以て水害を厭ふなり4。」と記している。陳寿は、「自ら太伯の後と謂ふ。」「倭人、亦文身し」の部分を削除、ないしは、「倭の水人」と訂正した。呉の太白の子孫といふは、天孫族の言ひ伝へとされる5。卑弥呼には敵対する勢力とみるべきであろう。魏の立場にある陳寿が呉と倭人の関連の記述に慎重な配慮をしていたのかもしれない。それはともかく、卑弥呼が「親魏倭王」に任じられるには、魏に対してそれだけの貢献をしたと考へるべきである。

「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし汝の大夫難升米（なしめ）・次使都市牛利（つしごり）を送り、汝献ずる所の男生口四人・女生口六人・班布（はんぷ）二匹二丈を奉り以て到る。汝がある所踰（はる）かに遠きも、乃ち使を遣わして貢献す。これ汝の忠孝、我れ甚だ汝を哀れむ。今汝を以て親魏倭王となし、金印紫綬（しじゅ）を仮し、装封して帯方の太守に付し仮授せしむ。汝、それ種人を綏撫（すいぶ）し、勉めて孝順をなせ。汝が来使難升米・牛利、遠きをわたり、道路勤労す。今、難升米を以て率善中郎将となし、牛利を率善校尉となし、銀印青綬を仮し、引見労賜し遣わし還す。今、絳地（こうち：濃い赤の地）交龍錦（龍が交わる柄の錦織）五匹・絳地縐粟（すうぞく：ちぢみで泡立つ）罽（けい：手織物）十張・蒨絳（せんこう：深紫紅）五十匹・紺青五十匹を以て、汝が献ずる所の貢直に答う。また特に汝に紺地句文錦（曲線模様の錦織）三匹・細班華罽（さいはんかけい：細かいまだらの花柄の毛織物の壁掛）五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二ロ・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各ヽ五十斤を賜い、皆装封して難升米・牛利に付す。還り到らば悉く録受し、もって汝が國中の人に示し、國家汝を哀れむを知らしむべし。故に鄭重に汝によきものを賜うなり6。」この制詔は陳寿がここに記さねば残ることは無かった。倭國にとっては歴史的文書であった。しかし、皮肉なことに、中國に臣従した証として、削除される運命となる。当時としては、半島においては、比類なき位置を占める証であり、奴國以来の栄光を卑弥呼が復活し、帯方でも楽浪においても倭人が大手を振ることができたに相違あるまい。國内においても政権基盤を高めたことであろう。

正始元年（240年）帯方太守弓遵（きゅうじゅん）、建中校尉梯儁（ていしゅん）といふ漢人と部下が、詔書・印綬を間違ひなく卑弥呼に手渡すために、女王國を訪れた7。詔書・印綬が他の者に渡れば、その者が「親魏倭王」となるため、その授受の証を使者は持ち帰らねばならない。彼等の報告が、何らかの形で陳寿の記述に反映されていよう。

女王國と魏の関係はこれにとどまらなかった。正始八年（247年）卑弥呼は國内的軍事情勢の悪化により、魏へ援軍を求め、帯方太守が塞曹掾史(さいそうえんし)張政(ちょうせい)を派遣してきた8。六年には、幽州刺史から安邑侯となっていた毋丘倹（かんきゅうけん）が高句麗を征した時、玄菟郡太守の王頎(おうき)に高句麗王の位宮（いきゅう）を買溝（ばいこう）まで追はせている。その王頎が、帯方太守に就任していた。魏としては、半島については、ほぼ制圧をしており、女王國が公孫淵の背後にあった時と比較すれば、その価値は下がっており、司馬懿は中央では政権からはずれていたこともあり、半島のことは、彼と対立することになる毋丘倹の統制下でもあり、卑弥呼が期待した援軍とはならなかったようである。

塞曹掾史とは、防衛のための出城を掌る下級の官吏、軍事担当、毋丘倹は王頎に命じて、軍事顧問団を送ったのであるが、難升米（なしめ）に詔書と黄幢（こうどう）を拝仮せしめる程度の援軍である。檄とは、「檄至らば亟（すみや）かに県、道に下し、咸（みな）をして陛下の意を喩さしめよ。忽（ゆるがせ）にすることなかれ9。」の如く、帝の命令を下達する形式である。「魏帝の親魏倭王である卑弥呼に背く卑弥弓呼を討伐すべし」といふ文面になるのであろうか。もし、文字が分らないとすれば、何等意味のないことになる。告喩することが不可能である。檄文が何らかの形で告喩することができたと解釈すべきであろう。さもなくば、難升米はこれを拒否し、行なはせなかったであろう。魏皇帝直々の黄幢を翻して檄することの効果が如何ほどであったかは分からない。しかし、これだけではなく、魏式の兵の組織方、兵法や軍事訓練などは施されたことであろう。それも、あまり効果はなかったようで、卑弥呼は死ぬ。

卑弥呼の死後、男王を立てたのは張政の助言が強く反映されたものであろう。案の定、國中服さず。相誅殺であるから互いに罪を咎めて殺すといふ価値観のからむ相克となり、当時千余人がその犠牲となった10。陳寿が当時と記したのは、かの平和であった時代に起こったことを念頭に置いてのことであろう。

幕末に尊皇攘夷といふことで天誅なる言葉が用ひられた。”ひみこ”が魏に操られていいものか、とみなす向があったろう。難升米等魏から叙された重臣の立場も微妙なものとなったかもしれない。張政も困ったことであろう。また、中國人としては信じ難いが、卑弥呼の宗族（卑弥呼の宗族の名は不明である）の女（むすめ）壱与年十三なるを立て王となすと、國中遂に定った。しかるに、張政はいまだこりず、檄を以て告喩した。これでは治まるものも治まらない。壱与の重臣等は、張政等を帰還せしめる決断をした。魏の援助を得ることの代償について学んだといってもよい。

卑弥呼が共立されたのが184年と考へ、248年に亡くなったといふことは、在位64年。共立された時、鬼道に通じた未婚の年長者とされ、13才の壱与よりはかなり年長であったと思はれ、当時としては異様に長寿であり、何時死んでもおかしくない年齢であった。

また、少なくとも生前は平和が保たれており、60年間の平和な環境が女王國の発展を強く促がしたと筆者は想像する。古事記や日本書紀や古語拾遺においては完全に無視されるのであるが、女王によるかくも長期の平和といふものは、倭にとって、大変な政治的経験となったことであろう。実際の歴史がどうであったかは、分からないが、神話構成を持つ氣長足姫尊の対外政策と比べれば、卑弥呼の対外政策は、歴史の脈絡で位置づけることができる。

ところで、新羅本紀に、AD123年に倭國と講和、AD158年に竹嶺を開き、倭人を来聘し、AD173年に卑弥呼が使者を派遣してきたといふ記述をみた。扶余、馬韓、濊貊が楽浪郡を圧迫し、倭人が非常に困っていた時期である。この時、新羅（辰韓というべきであろうが）は倭人と手を結んでいたことになる。竹嶺（[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）を倭人に開くといふことは、倭人が洛東江を遡り、竹嶺街道を越へ、南漢江に至りこれを下り、楽浪郡の南（後の帯方郡）へと至ることを可能とする。それを辰韓は提供し、共に、馬韓、濊に対抗しようとしたことを伺はせる。辰韓は、兵船百余で海辺を掠める倭の海運、海戦力を求めたのであろう。帥升等が120人の生口を運搬しており、3世紀には、少なくとも14人の漕ぎ手による船を用ひていたと推察され11、この記述によるならば、千数百人単位の漕ぎ手を動員できたことになる。また、倭人は漁労に秀でており、この技術を導入するといふ動機もあろう。楽浪に至る海路もさることながら、卑弥呼もこのルートを確保せんとして、使者を派遣したと考へることもでき、倭人が一方的に加羅寄りであったとみるのも早計なのかもしれない。

これで補助作業は終へ、いよいよ、書紀における対外政策をみることとしよう。

1) 魏志倭人伝　[下戸與大人](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi2.htm#下戸、大人と道路)

2) 森浩一氏編「日本の古代」（中公文庫）

3) 「男子は大小となく、皆黥面文身す。古より以来、その使中國に詣（いた）るや、皆自ら大夫と称す。夏后少康の子、会稽に封ぜられ、断髪文身、以て蛟竜の害を避く。今、倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕え、文身し、また以て大魚・水禽を厭（はら）う。後、やや以て飾りとなす。諸國の文身各々異り、あるいは左にしあるいは右にし、あるいは大にあるいは小に、尊卑差あり。その道里を計るに、まさに会稽東冶の東にあるべし。」魏志倭人伝　[皆黥面文身](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi1.htm#皆黥面文身)

4) 「帯方より女國に至るは万二千余里、其の俗、男子皆黥して文す。其の旧語を聞くに、自ら太伯の後と謂ふ。昔し、夏后小康の子、会稽に封ぜられ、断髪文身、以て蛟龍の害を避く、今、倭人、亦文身し、以て水害を厭ふなり。」魏略　逸文

5) 「日本いふ。呉の太伯の後なりと。蓋し呉、亡んで、その子庶、海に入って倭となる。」通鑑前編（つがんぜんぺん）、金仁山（きんじんざん：宋末元初の朱子学者）。新井白石は、古史通或問（こしつうわくもん）において「漢魏之間に通じて王を称せしみへし三十余国のごとき、其先世またいかにや有らむ。今皆考ふべからず。其三十余国之中、或は少康或は太伯之後に出しものあらじともいふべからず。」とのべた。「日本に渡来した太伯が神武天皇であったとの「皇祖太伯説」が中・近世の国史の大問題になった。」以上、「太伯と除福」　上野武、東シナ海と西海文化　小学館

6) 魏志倭人伝　[其年十二月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi3.htm#その年十二月)

7) 「正始元年、太守弓遵（きゅうじゅん）、建中校尉梯儁（ていしゅん）等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭國に詣り、倭王に拜仮し、ならびに詔を齎（もたら）し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。」魏志倭人伝　[正始元年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi3.htm#正始元年)

8) 「その（正始）八（247）年、太守王頎（おうき）官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯（さいし）烏越（うをち）等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史（さいそうえんし）張政（ちょうせい）等を遣わし、因って詔書黄幢を齎（もたら）し難升米に拝仮せしめ檄を為（つく）りてこれを告喩す。」魏志倭人伝　[其八年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi3.htm#その八年)

9) 漢書、司馬相如伝、（巴蜀太守び告ぐの文末　森浩一氏編　日本の古代　中公文庫）

10) 魏志倭人伝　[卑弥呼以死](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi3.htm#卑弥呼以て死す)

11）「元水産庁漁船研究室主任研究官であった石井謙治氏によれば、各地で発掘された古代の複材丸太船（準構造船の船底部分）の遺物や、残された文献（風土記）等から見て、全長30ｍ、幅3ｍ、排水量30トン、漕ぎ手40人（約時速3ノット：6ｋｍ／時）位の船は当時建造出来たのではないか、と言う。・・・石井氏は、1975年に朝鮮海峡を渡った野生号（雑誌野生時代の編集長だった角川春樹氏の発案で、古代船を復刻し朝鮮海峡を渡ろうという趣旨の元に建造された）の設計者であるが、この船は排水量13トン、全長16.5ｍ、漕ぎ手14人で巡航2ノット（時速3.7ｋｍ）というものであった。テストでは2ノット出たそうだが、実際に海峡を渡った実績では平均1.7ノットだったらしい。氏は、野生号は3世紀の船の復元では無いと強調しながらも、3ノットで大陸への航海は十分可能と言う。排水量15トン、全長20ｍ、漕ぎ手24人で3ノット可能であろうと言う。ちなみに、野生号は西都原出土の舟形埴輪をモデルにしている。」科学する邪馬台國　[古代の船と航海ルート](http://inoues.net/science/war.html)　邪馬台國大研究

**三章**　**漢文化を求めて**

**半島への進出**

　歴史的には、日本列島からの半島への進出は、奴國の時代から見られたことである。奴國単独といふよりは、駕洛（加羅）國の交易活動と連携していたのであろうが、漢が楽浪郡に太守を配し、直接統治に乗り出したことが大きな転機であった。漢は西域のみならず、東西南北あらゆる方面に中華文明を広めんとした。半島においても、日本列島においても、國を形成するといふ動きが醸成されてゆく。幕末から明治へと近代國家を建設するには、政府のみでは不足で、議会の創設、そのための政党の設立、その根幹となる憲法の発布、行政と議会と司法の三権分立、その一方での殖産興業、富國強兵を推進、西欧の國民國家形成原理を受容することが必須であったように、交易により社会を刺激し、富を蓄へ、中國の律令の原理を受容し、独自の統治機構を築いてゆくことが大きなうねりとなるのが東アジアの歴史であった。

その前段階としては、朝貢を通じて、おぼろげながら漢文化を受容するといふ過程が避けられない。ところが、古事記や書紀や古語拾遺が編纂された時代の識者は、それを飛び越へ、日本（やまと）は独自の建國の原理を有するとしたかった。このために、書紀は、建國を紀元前660年、漢よりも、孔子よりもはるか昔に置き、天孫である磐余彦尊が神意を実現して、かねてから予定されていた中洲（奈良盆地）に建國をしたと記した。半島から色々な人物が日本（やまと）に来訪してきたが、それは天皇（すめらみこと）の徳を慕ってのことであり、日本（やまと）が半島に進出することになったのも、紀元200年氣長足姫尊が神意を受けてのことであり、半島の國が臣従するようになるのも神意の実現による、といふ独自のスタンスを執った。

魏志倭人伝の卑弥呼以前に、日本（やまと）は天皇を擁き、氣長足姫尊がすでに半島を従へていた、その脈絡の上で、書紀は、氣長足姫尊（神功皇后）の三十九年条に、「是年也　大歳己未（AD239）　【魏志に云く、明帝の景初三年の六月、倭（わ）の女王（ぢょわう）、大夫（たいふ）難斗米（魏志倭人伝では難升米）等を遣はして、郡に詣り、天子に詣（いた）らむことを求めて朝獻（てうけん）す。太守、鄧夏、吏を遣はして將を送りて京都（けいと）に詣らしむ。】1」と記した。書紀の中では、倭は一般的には奈良盆地を指すことが多く、そこの女王が臣下を明帝に朝貢させた、それは中國の書物、魏志、に書かれていることを、記しておいたにすぎぬ、と云はんばかりで、当時、魏志「倭人伝」があることを知る人間は極めて限られており、意味がとれないまま、読み飛ばす人も多かったものと思はれる。続いて、四十年に、「【魏志に云く、正始の元年に、建忠校尉（けんちうかうゐ）梯携（ていけい）等を遣して、詔書（せうしょ）印綬（いんじゅ）を奉りて、倭國（わのくに）に詣らしむ。】2」とあるも、魏志が「魏志倭人伝」であり、印綬が「親魏倭王」の金印と紫綬と読み取れ、これが卑弥呼のことと知る人などは滅多にいるものでもなかった。4年後には、今度は奈良盆地の王が臣下を朝貢させた、と記した。「四[十三年](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/shoki22.htm#卅十六年春三月)（AD243）　【魏志に云く、正始の四年に、倭王（わわう）、復、使大夫伊聲者掖耶約等八人を遣はして、上獻す。】3」中國側に対しては、我々は日本（やまと）の王であって倭王とは異なる、そちらで倭と称されている國は、自分達の一地方にすぎぬ、そういふ女王と王の具体名を挙げていただきたいと、とぼけることもできたであろう。

書紀が重視したのは、200年に、新羅の王、波沙寐錦（はさむきむ）が、微叱己知波珍干岐（みしこちはとりかんき）を質（むか）として季節の朝貢を約したこと、百濟、高麗、二國の王もこれに従ひ、朝貢を約し、三韓に内官家屯倉（みやけ）を定めたといふ立場である4。神功皇后、四[十六年](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/shoki22.htm#卅十六年春三月)（246年）に、百濟も天皇の下に朝貢を自発的に申し出てきた。斯摩宿禰（しまのすくね）を卓淳國（とくじゅんのくに）に派遣すると、卓淳の王、末錦旱岐（まきむかんき）の下に、百濟の王、肖古王（せいこわう）が臣下を派遣し、日本（やまと）の天皇への道案内を願ひ出ていたといふ5。斯摩宿禰は、失はれた「百濟記」に記されていた人物で不詳の人物。卓淳國（[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）は加羅七國の一つ、慶尚北道大邱、新羅の西側に接する交通の要衝にあたる。末錦（まきむ）と寐錦（むきむ）は同じく新羅の王号、旱岐は加羅諸國の王号、末錦旱岐とは双方の王といふ妙な命名である。肖古王は、五代肖古王【166－214年：十三代近肖古王（346～375年）の説が支配的であるが】と特定できるが、歴史的には、246年は卑弥呼が存命中であり、半島は毋丘倹の統制下にあり、百濟も新羅も建國前、馬韓、辰韓の時代であり、成立しない。新羅と百濟の間に貢物をめぐって争いが起こったといふ話6は、後世の現実が持ち込まれたのであろうが、主テーマの構成は、先にみたように、歴史ではなく、神意の延長線上にある。歴史の現実と合はせるには、少なくとも、干支を二運（120年）すすめた半島の歴史と照合する必要があった。従って、氣長足姫尊（神功皇后）、譽田天皇（ほむたのすめらみこと：應神天皇：おうじんてんわう）と大鷦鷯天皇（おほさざきのすめらみこと：仁德天皇：にんとくてんわう）の時代は、往来自由、タイムマシンの世界となり、双方の時間をフリーにして干支で調整して因果関係を辿るしかない。

さて、書紀が最初に触れたものは、御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）六十五年(BC33年)の「任那國、蘇那曷叱知（そなかしち）を遣（まだ）して、朝貢（みつぎたてまつ）らしむ。」であった。任那の位置については、新羅の西南、拘邪韓國のあたりとみた。このあたりは弁韓の地であり、弁辰ともされ、十二カ國に分かれ、後漢書、弁辰伝によれば、倭人と同じく文身（いれずみ）をする者が多い7と伝へている。つまり、このあたりは、倭人と近い風俗があるとみなされていた。

建武十八年(AD42年）に駕洛（加羅、加耶）の六國を首露が統一して、駕洛國を建國したといふ伝説はすでにみた。首露はインドのアユタ國王の娘、許黄玉を妻とし、彼女が入港した主浦村の朝鮮語の訓読み(nim-nae)を転写したものが任那(nima-na、mimana）とされる8。後の内陸部の大加羅ではなく、駕洛は、沿岸部金官國を中心として、手広く交易をしており、日本列島にも文物をもたらしていた。三國志魏書、弁辰伝によれば、鉄を産し、韓、濊、倭いづれもこれを入手せんとした。鉄は、鉄製品を作るためのみでなく、売買決済に用ひられ、通貨の役割を果していたといふ9。その鉄を楽浪と後の帯方の二郡10に駕洛國は供給しており、楽浪郡と帯方郡は彼等にとっては格好の交易の場となった。建國二年後（建武二十年：44年）、韓人で、廉斯（れんし）人の蘇馬諟（そばてい）が楽浪郡に貢献し、光武帝が彼を廉斯邑の君とした話11がある。光武帝は、建武三十三年(57年)に奴國人を謁見し、楽浪の彼方に興味を示しており、楽浪に鉄を供給する駕洛國にも関心があったかもしれない。ところで、駕洛國は北東の辰韓、北西の馬韓に圧迫を受け、ゆるやかな連合体であり軍事的には劣勢であり、背後の倭人と友好関係を結んだのであろう。また、馬韓の西の海上には、牛や豚を養ひ、船で往来し、馬韓など韓中で商売をする州胡國があった12。州胡國は忱彌多禮（とむたれ：済州島）ともされる。その地は、韓中との交易もさることながら、江南や山東半島から避難する漢人、五島列島や有明海からの倭人が訪れる地でもあった。海岸線の入り組んだ半島南では島伝いの海路が輸送には向いており、駕洛や倭の海人にとっては、好都合なものであった。

奴國人や倭王師升等が洛陽まで達するには、駕洛のこれらの交易ルートは必須であったろう。後漢が乱れた頃には、濊や韓が力を持ち、不安定な楽浪郡といふものは、駕洛人にとっても倭人にとっても歓迎できるものではなかった。卑弥呼が共立された頃には、半島の南や東では、韓や濊が力をつけていた13。その後公孫氏が楽浪・帯方二郡を支配し、卑弥呼の女王國としては、これを通さざるをえなく、もどかしいものがあったことはすでにみた。

倭人は倭人で、加羅（駕洛）の交易ルートを活用し、楽浪郡との交易の利を受け、更に、洛陽にまで足を伸ばした。加羅は加羅で、日本列島の旺盛な需要に魅力があった。後に軍事面で倭人を活用するに至る。二郡の安定に対する両者の思惑は一致していたのであろう。統一された卑弥呼の女王國は、公孫氏が滅ぼされるや、人口、國力において半島の諸國に抜きん出ていた。加羅は、魏志倭人伝では、拘邪韓國であるが、書紀では、任那、広開土王碑では、任那加羅といふ名称で呼ばれることになる。氣長足姫尊（神功皇后）、譽田天皇（應神天皇）そして大鷦鷯天皇（仁德天皇）は、これらの過去の歴史の遺産を継承しているのであるが、書紀は、バッサリ切り捨てて、御間城入彦五十瓊殖天皇の名前、御間城（みまき）にちなんで任那と命名されたといふ神話を作った。

氣長足姫尊が新羅を攻めたとき、大船団が阿利那禮河（ありなれがわ14）を遡り一気に王宮金城（慶尚北道慶州市）まで到達したことになっているが、日本（やまと）に、海浜の邑を略奪する船団を組み得ても、新羅を軍事的に制圧できるほどの兵力を動員できる実力があったとは思はれない。次のステージは、突如、加羅七國の一つ、慶尚北道大邱、新羅の西側に接する交通の要衝にある内陸の卓淳國が現れる。加羅といっても、一足飛びに、大加羅國に焦点が移っている。日本（やまと）が新羅を攻めるために卓淳國に居るごとき印象を与へるが、それは無理である。歴史的にみるならば、加羅が新羅からの攻撃を抑止するために、派兵を要請していたとみるほうが自然である。加羅の利権を守ることが日本（やまと）の利権を守ることに結びついていたのであろう。卓淳國には更に、荒田別（あらたわけ）、鹿我別（かがわけ）の二将軍を投入するも、兵の数が足らず、木羅斤資（もくらこんし）・沙沙奴跪（ささなこ）の援軍を得て防ぎえ、比自火本（ひしほ：慶尚南道昌寧：[韓國地図](http://www.fuzita.org/wldculture/korea/kr.htm#r16d16)、[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）、南加羅（ありひしのから：慶尚南道金海）、喙國（とくのくに：慶尚北道慶山）、安羅（あら：慶尚南道咸安）、多羅（たら：慶尚南道陜川）、卓淳（とくじゅん）、加羅（から：慶尚北道高霊）、新羅の南西の七國が平定されたとする15。これは大加羅國を前提としたものであり、書紀の編者のなかでは、タイムマシンを進めていることになろう。この地域を平定すれば、かつて辰韓と倭人の間で往来のあった、洛東江から鳥嶺、竹嶺を通じ南漢江に出るルートを確保することになる。つまり、百濟との内陸部での往来が確保できることになる。

沙沙奴跪は不詳であるが木羅斤資は百濟の将軍であり、百濟が加担して、防衛が可能であったことになる。更に、西の古奚津（こけいのつ：全羅南道康津、[古地名図](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/images/mapkochosen.pdf)）、忱彌多禮（とむたれ：済州島）を平定し、百濟の肖古王（近肖古王：346～375年）、に与へたとする。比利（ひり：全羅北道全州）、辟中（へちう：全羅北道金堤）、布彌支（ほむき：忠清南道新豊）、半古（はんこ：全羅南道羅州）南西の四邑も降服し、百濟の王、父子及び荒田別、木羅斤資等、共に意流村（おるすき16）で会ひ盟約をしたとする17。これは、海路において百濟へ至る要衝の地である。栄山江流域の半古は後にみる慕韓の地であり、倭人の墓と思はれる古墳も多く、古くから有明海方面の倭人とも交易しており、これを百濟に与へるとなれば、焦点はもはや加羅ではなく、百濟に移っている。書紀のこれらの記述は、干支二運(120年)先の半島の歴史に飛んでいることは確かであろう。

1) 書紀巻九　神功皇后　[卅九年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅九年　是年也)

2) 書紀巻九　神功皇后　[四十年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十年)

3) 書紀巻九　神功皇后　[四十三年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十三年)

4) 書紀巻九、神功皇后　[仲哀天皇九年冬十月](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki21.htm#冬十月（かむなづき）己亥)

5) 書紀巻九　神功皇后　[四十六年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十六年春三月)

6) 書紀巻九　神功皇后　[四十七年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十七年夏四月)

7) 「其國（弁辰）は倭に近く、故に、頗(すこぶ)る文身の者有り」後漢書、弁辰伝

8) 鮎貝房之進『日本書紀朝鮮地名攷』

9) 「國、鐵を出ず。韓、濊、倭、皆從ひてこれを取る。諸れ巿買、皆、鐵を用ふ、中國、錢を用ひる如し、又、以て二郡に供給す。」三國志魏書、弁辰伝

10) 二郡を楽浪と帯方とすれば、帯方郡は205年、公孫康以降であり、成立しない。ただ駕洛國記は高麗の文宗（王徽、在位1046年 - 1083年）年間に記されており、周知の二郡とみたのかもしれない。

11) 「建武二十年（44年）、韓人、廉斯人、蘇馬諟（そばてい）等、樂浪に詣で貢獻す。光武（帝）、蘇馬諟を封じ、漢の廉斯邑の君と為す。樂浪郡に屬せしめ、四時朝謁せしむ。」後漢書卷　東夷列傳　弁辰

12) 「馬韓の西、海の島上に州胡國有り。其の人、短小、髡（はげ）頭、韋衣（毛皮）を衣、上有りて下無し。好んで牛豕を養ふ。船に乘りて往來し、韓中にて貨市す。」前掲書

13) 「靈帝の末（189年）、韓、濊、並びて盛にして、郡縣制すること能はず、百姓、苦亂、多く流亡し、韓に入る者なり。」三國志、魏書巻三十、東夷傳、馬韓

14) 慶州付近の北川、古名閼川 ：アリナル

15) 書紀巻九　神功皇后　[四十九年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十九年春三月)

16) 諸説あるが、京畿道河南市の漢山：百濟の始祖、温祚が都とした地

17) 書紀巻九　神功皇后　[四十九年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#卅十九年春三月)

**百濟―どこまで扶余でどこまで馬韓か？**

異伝があるが、三國史記、高句麗本紀によれば、扶余の金蛙王（きんあおう）の下で、天帝の子を自称する解慕漱（かいぼそう）が河伯（河神）の娘、柳花（りゅうか）を孕ませて、卵が生まれ、金蛙王はこれを捨てたが、鳥が卵を守り、生まれたのが朱蒙（しゅもう）である。東扶余の言葉で弓の名手を意味し、成長して狩りの獲物をめぐって、金蛙王の7人の王子に妬まれ排斥され、扶余から逃れた。朱蒙が卒本（遼寧省本渓市桓仁県）に至って都邑を定め、漢の孝元帝の建昭二年（BC37年）に建てた國が高句麗である1。ところで、これも異伝があるが、三國史記、百濟本紀によれば、卒本扶余王が朱蒙を三人娘の二番目の娘の婿に迎へ、沸流（ふつりゅう）、温祚（おんそ）の二男が生まれる。卒本扶余王が亡くなると、朱蒙は王位（高句麗建國）に就くのであるが、北扶余で生んだ子が逃れて来、これを太子とした。これに危険を覚へ、沸流と温祚は十臣と共に南へ、漢山（広州）に逃れ、成帝の鴻嘉三年（BC18年？）に、温祚は河南の慰禮城を都と定め國を開き、十臣が補佐したことで、國号を十濟とした。兄の沸流は、これを嫌い、民を分け、彌鄒忽（仁川）で暮らしたが、住環境が悪く、慰禮城へ移るが亡くなる。百姓が戻ったことにより、國号を百濟としたといふ。2

四年（BC15年）には、使者を楽浪郡に遣はして修好（國交）したが、八年（BC11年）には楽浪郡太守と対立し、以降敵対することとなった。その南の馬韓を、二十七年（10年）頃に併合し3、以降十二代契王までの傳はあるが、これをそのまま百濟の歴史とすることは、疑問視されている。

馬韓伝によれば、衛満に追はれた朝鮮の準候は、左右の官を率ゐて海を渡り、船で韓の地に逃がれ、そこで韓王として統治をした4。結構よく統治したとみへ、亡くなって後もその地の韓人はその祭祀を行ひ、楽浪郡が出来たときには、いち早く、楽浪郡に属し漢に朝貢をした5。馬韓の北方は中國の動向に大きく左右された。辰韓の西には、すでに見たごとく、秦滅亡時に逃れ来た漢人の居住する所があった。王莽の地皇年間（20年－22年）、廉斯（れんし）邑の鑡（さく）といふ男の話がある。辰韓の右渠帥（うきょすい：副首領）となり、楽浪郡の土地が肥沃で、人民は豊かで安楽に暮らしていると聞き、楽浪郡に逃れ服しようとした。途中で、韓人に襲はれ仲間1500人を奴隷にされた漢人の戸来（こらい）に出会い、一計を案じた。楽浪郡の含資県に訴へ、事情を話し、船で戸来と辰韓へ行き、仲間を返さないと楽浪郡が辰韓を船で攻撃すると脅し、1000人の仲間を取り戻し、すでに死んだ500人の弁済に、辰韓から一万五千人、弁韓から布を一万五千匹を得て、楽浪郡に服し、楽浪郡は彼を厚遇したといふ6。楽浪郡には魅力があった。先に見た廉斯人、蘇馬諟もこれに魅せられたのであろう。

桓、靈の末（146年－189年）、韓、濊が彊盛となり、楽浪の郡縣が彼等を制することができずに、民多く韓國に流入したこと。建安年間（196年－220年）には、公孫康が屯有県以南の荒野を分けて帯方郡とし、兵を挙げて韓と濊を討伐し、倭と韓を帯方に帰属させたことはすでに見た。景初年間（237年－239年）には、魏の明帝が再び二郡に進出し、公孫氏を滅ぼすと、韓國の臣智（しんち：有力者）に、邑君の印と綬を加賜したり、衣や頭巾で身分を分け、漢に似た制度が流布しはじめていた。楽浪郡に部従事といふ官職が設けられ、これが韓國全体を統括し、辰韓も八國に分け楽浪郡に帰属させた。しかし、それらの臣智との約束事に誤訳があり、彼等が帯方郡を攻めるといふ事件に発展し、両郡の太守がこれを鎮圧し、韓が滅びたといふ7。晋書、馬韓伝には、武帝の太康元年(280年)、二年(281年)、七年(286年)、八年(287年)、十年(289年)に使を遣し方物を入貢す8、とあり、馬韓が無くなった訳ではなく、半島の南に押し込まれたのであろう。

三國史記、百濟本紀は、高句麗も百濟も扶余の出、ツングース系の騎馬民族であり、その百濟が慰禮城にあって、馬韓を併合したと主張する。帯方郡の位置は定まっておらず、諸説があるが、この地は建安年間には公孫氏、その後は魏の支配下にあり、温祚以来百濟が一貫して慰禮城で統治したとは云へず、馬韓伝によれば、魏により馬韓ともども慰禮城あたりからは追い払はれたことになり、収拾がつかなくなる。

馬韓は韓族であり、農耕を主としており、ツングース系ではない。どこまでが馬韓でどこからが百濟なのかが判然としない。西晋が混乱し、高句麗が312年に楽浪郡を滅ぼすといふ情勢の中で、馬韓のなかの伯濟國を中心に百濟が興ったとされる。逃れ来た漢人を吸収して、國家建設が軌道に乗り、近肖古王の時代に急速に力をつけている。魏書、百濟伝は、百濟は高句麗の南千余里、小海（楽浪湾）の南に拠を置いたが、民は土着で湿気が多く山に住んだ9とし、百濟王余慶（蓋鹵王）が472年に北魏に使者を送ったとき、百濟と高句麗は扶余の出であるが、近肖古王の時、高句麗と袂を分かち、これを攻め、北魏に朝貢するに至ったと上表しており10、馬韓の地に國を拓いたが扶余であるとみなしている。

梁書、百濟伝は、百濟は三韓の一つ、力を持ち小國を糾合し、高句麗と同族であるが、高句麗が遼東を占拠したとき、遼西、晉平二郡に百濟郡を設置した11とみている。通典、「百濟」においては、後漢末の夫餘王、尉仇台（いきゅうたい）の後、百家で海を濟り、百濟と称した扶余人で、遼西、晉平二郡、今の柳城から北平の間の幽州を占拠し、晋以降、楽浪郡が滅びて後は、諸國を併合して馬韓の地を占拠した12とされる。中國人の見方である。「後漢書」によれば、建光元(121)年に、馬韓・濊貊が数千騎を率ゐ玄菟郡を包囲した時に、扶余王は尉仇台を派遣し二万余人を率ゐてこれを討たせたとあり、通典は、この尉仇台を百濟の祖とし、事実上この地で百濟が建國されたとみなしたのであろう。ただ、海を濟る前は、百濟とは称していなかった。かつて衛満に追はれた候準が海を濟り韓の地に逃れたように、公孫氏に圧迫されて、海を濟り韓の地で自らを百濟としたとみた。4世紀初頭に、高句麗が楽浪郡を略有し、百濟をも圧迫するが、近肖古王の時に、百濟は、高句麗を討ち、かつて尉仇台が攻略した玄菟郡、更に遼西、晉平二郡まで占拠し、南は馬韓も併合した、と記している。馬韓のなかからそうのような強國が生まれたのではなく、元々扶余の族であったとする観念があったのであろう。

三國史記、百濟本紀は、責稽王（せきけいおう：286年―298年）が、帶方の王女、寶菓（ほうか）を娶っており、帯方を救援したことを高句麗が怨み百濟に侵寇した13と記している。汾西王（ふんせいおう：298年 - 304年）は、楽浪の西の県に密かに船で兵を渉し、西から攻撃して占拠をしたが、放たれた刺客により殺されたといふ14。百濟は帯方の南にあって、北方を伺っていたとする。洛陽においては、西晋が八王の乱により、弱体化すると、匈奴・鮮卑・羯・氐・羌など五胡をふくめてそれぞれが國を建てるといふ混乱状態が生まれた。三國史記、高句麗本紀によれば、美川王（300年－331年）は三年（302年）に、兵三万を率ゐて玄菟郡に侵攻、捕虜八千人を獲得し、これを平壤に移し、十二年（311年）に、遼東郡西安平県を略取、十四年（313年）に、楽浪郡に侵攻し、男女二千余人を捕虜とし、十五年（314年）に、南の帯方郡を侵略している15。これに対抗したのが近肖古王であり、二十六年（371年）に攻め込んできた高句麗を破り、逆に、太子と精兵三萬で高句麗に侵入し、平壤城を攻め、高句麗王、斯由（故國原王：ここくげんおう）は流矢に中（あた）り死に、百濟は都を漢山に移した。翌年（372年）には、近肖古王は東晋に使を遣し朝貢し、「鎮東将軍領楽浪太守」に叙せられている16。遼西から馬韓に至る地域を支配したことを東晋が認めた。

高句麗の圧迫を受けた扶余の一派が、準候が逃れて韓王として拓いていた馬韓の北へ移り、土着の韓人と融合するといふ流れがある。一方、馬韓は元来辰韓、弁韓の優位に立ち、建光元(121)年に、濊とともに玄菟郡を包囲する勢いがあった。しかし、すでに見たように、扶余王の派遣した尉仇台に討たれている。この尉仇台を百濟の祖とみるのは、どうやら高句麗を共通の敵とみたこと、楽浪や帯方の漢人の文物を受容する方向で、連携、融合を図ることができたのであろう。百濟の意識はそれ故に、基本的に北と中國に向いている、その百濟が日本（やまと）に目を向けたのは、高句麗と新羅とに対峙せねばならない現実があったことによる。

この時代の半島においては、漢字を用いて、國家の仕事を記録し、編纂する作業が行はれ、高句麗では、広開土王の碑文が残され、創世記からを記した「 留記（ユギ）」100巻、百濟では、近肖古（クンチョゴ）王（346-375）のとき博士高興（ゴフン）による「書記」、新羅では後（真興王六年：565）になるが、居漆夫（コチルブ）による「國史」が編纂された。書紀の編者達は、｢**百濟**記｣｢**百濟**新撰｣｢**百濟**本記｣等に触発もされ、引用もした。いづれも、今は、失はれて存在しないけれど。

1) 三國史記、高句麗本紀　[東明聖王](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/koukurigaisi/kokuri-king1-tomei.htm)

2) 三國史記、百濟本紀　[温祚王](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kudaragaisi/kudara-king1-onso.htm)　成帝の鴻嘉三年（BC18年？）だと建国四年(BC15年)と合致しない。

3) 前掲書　四年、八年、二十七年

4) 「その左右の宮人を將（ひき）いて走（のが）れ海に入り、韓地に居し、自ら韓王と號した。」　三國志魏書　[馬韓伝](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kanbun/bakan-kanbun1-gisi.htm)

5) 「その後、絶滅し、今、韓人なおその祭祀を奉ずる者有り。漢の時、楽浪郡に属し、四時（季）朝謁す。」前掲書

6) 「諸々の韓國の臣智（しんち）に、邑君の印綬を加賜し、その次に邑長に与ふ。その俗は衣幘（いさく：衣と頭巾）を好み、下戸（上戸の反）、郡に詣で朝謁するに、皆、衣幘を借り、自ら印綬と衣幘に服する者は千余人。」前掲書

7) 「部従事（官職名）呉林は以て楽浪を本とし韓國を統べる。辰韓を八國に分割し、楽浪に與へ、吏の譯轉（訳転）に異同有りて（誤訳のため）、臣智、激し、韓、忿し、帯方郡、崎離営を攻む。時の太守、弓遵、楽浪太守、劉茂は兵を興しこれを伐つ。弓遵、死す。二郡、遂に韓を滅す。」前掲書

8) ｢武帝太康元年(280年)、二年(281年)、其の主頻、使を遣し方物を入貢す、七年(286年)、八年(287年)、十年(289年)、又、頻び至る。｣晋書、[馬韓伝](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/kanbun/bakan-kanbun3-sinzho.htm)

9) 「百濟國、其の先、夫餘より出ず。其の國、北に去ること高句麗、千餘里、小海の南に處す。その民は土着、土は下湿多く、皆を率ゐ山に居る。」魏書、百濟伝

10) 「臣と高句麗、夫餘に源出す、先世の時、篤く舊款を崇し、其の祖、釗（故國原王）、鄰好を輕廢し、親ら士衆を率ゐ、臣境を陵踐す。臣の祖、須（近肖古王の子、近仇首王）、旅を整へ、電邁し、機に應じて馳せ撃つ」前掲書

11) 「百濟は、其の先、東夷、三韓國に有り・・・其の一つなり。後に漸（しばらく）して強大、諸（もろもろ）の小國を兼ね、其の國は、本は (高)句驪と與に遼東の東に在り。晉の世、句驪、既に遼東を略有し、百濟、亦、遼西、晉平二郡の地を據有し、自ら百濟郡を置く。」梁書、百濟伝

12) 「百濟、即ち、後漢末の夫餘王、尉仇台（いきゅうたい）の後、魏の時、百濟王、上表して云ひて語ぐ、「臣と高麗、先に夫餘を出ず。初め以て百家にて海を濟（わた）り、因みて百濟と號（な）づく。」「晉の時（265年－316年）、句麗、既に遼東を略有し、百濟、亦、遼西、晉平二郡を據有す。今柳城、北平の間。晉より以後、諸國を呑并し、馬韓故地を據有す。」通典、「百濟」

13) 「帶方の王女、寶菓を娶り夫人と爲す。故に曰く、帶方、我が舅甥の國、其の請に副へざる可らず。遂に師を出し之を救ふ。高句麗怨みて、王慮、其れ侵寇す。阿且城・蛇城を修め、之に備ふ。」三國史記、百濟本紀は、責稽王

14) 「七年、春二月、潛師し樂浪の西縣を襲ひ取る。冬十月に王、樂浪太守遣す所の刺客の爲す賊害にて薨ず。」三國史記、百濟本紀は、汾西王

15) 三國史記、高句麗本紀　[美川王](http://members3.jcom.home.ne.jp/sadabe/koukurigaisi/kokuri-king15-bisen.htm)

16) 三國史記、百濟本紀　[近肖古王](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/kudara/240213gen.htm)

**倭から夜摩苔（ヤマト）―書き換への歴史**

百濟の建國が判然としないように、大和政権成立も判然としない。書紀は饒速日命に代はり、紀元前660年に橿原で政権を開いたとするが、これは歴史ではない。さりとて、その年を紀元200年後半に移動させて済むものでもあるまい。邪馬台（壱）國が狗奴國に攻められて國が乱れ、再び壱与で治まったとする後の歴史が分からない。書紀からは、その脈絡で、何時、如何なる経緯で、大和政権が奈良盆地で成立したかは読み取れない。ヤマト、大和の命名の起源も定かでない。そもそも國号を漢字で表記し、それが國号として周知されるには、歴史的認知が必要である。中國側の呼称、「奴」や「倭」といふものが歴史的に通用してきた以上、それを変更することは、容易なことではなかった。

奴國人が、自身をどう称し、邪馬台（壱）國の卑弥呼の使者が自身をどう称していたのか？魏志倭人伝には百余國、通訳可能な國が三十國と記載されており、陳寿的にいえば、女王國の境界内に對海【馬】國、末廬國、伊都國、投馬國、邪馬壱國、斯馬（シメ；以下、呉音表記）國、已百支（イヒャクシ）國、伊邪（イジャ）國、都支（トシ）國、彌奴（ミヌ）國、好古都（コウコト）國、不呼（フコ）國、姐奴（シャヌ）國、對蘇（ツイス）國、蘇奴（スヌ）國、呼邑（コユウ）國、華奴蘇奴（ゲヌスヌ）國、鬼（キ）國、爲吾（イゴ）國、鬼奴（キヌ）國、邪馬（ジャメ）國、躬臣（キュウジン）國、巴利（ハリ）國、支惟（シユヰ）國、烏奴（ウヌ）國、奴（ヌ）國があり、邪馬台（壱）國が卑弥呼の國で、その南に敵対する狗奴國、があった1。どこまでを倭國といふべきか、女王國といふべきか、陳寿は慎重であり、倭人が國邑を為す2という表現で記述を始めていた。これら百余國の中からヤマトはでてきたはずである。ヤマトは、倭（ワ、イ、:ヰ）、奴（ド：漢音、ヌ：呉音）、大和（ダイワ:呉音、タイカ（クァ）：漢音）からは発音されない。万葉仮名では、夜麻登、夜萬止、耶魔等、夜麻等、野麻登、“やまと”の「と」は乙類で「邪馬台」とは一致するが、中國音では、邪はジャ、ヤ、馬は呉音でメ、漢音でバ、唐音でマ、台は呉音でダイ、漢音でタイ、怡に通じイであり、呉音ではジャ（ヤ）メダイ、ジャ（ヤ）メイ、漢音では、ジャ（ヤ）バタイ、ジャ（ヤ）バイであり、ヤマトの音を置き換へたとはしづらい。

晋書、武帝紀、泰始二年（266年）十一月条の、「倭人来りて方物を献ず。」が、壱与の邪馬台國による朝貢記録の最後となる。次に中國の記録にあらはれるのは、（413年）に高句麗の長壽王が朝貢し、「使持節都督営州諸軍事征東将軍高句麗王楽浪公」を得たとき、梁書、倭伝や南史・東夷傳による、「倭王、讃、使を遣し朝貢す。」、宋書卷九十七、列傳第五十七、夷蠻伝・倭國（宋書、倭國伝）による、「倭國は高驪の東南大海の中に在り、世々貢職を修む。高祖の永初二年（421年）、詔していわく、『倭讚、萬里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらは）すべく、除授を賜うべし。』と。太祖の元嘉二年（425年）、讚、また司馬曹達を遣わして奉を表り方物を獻ず。」である。この時の倭はヤマトである。讃の使者は自らを“ヤマト”と称したであろうが、倭をヤマトに変更することが出来る立場にはなく、倭をヤマトと読ませる方向に向ったようである。

宋（420年 - 479年）の都は建康、呉（222年 - 280年） がここに都を置いたときは建業、東晋（317年 - 420年） の元帝が西晋の愍帝（司馬鄴）の諱（いみな）に触れるので、建康といふ名に変へたものである。後の南京であり、斉（479年 - 502年） 、梁（502年 - 557年） 、陳（558年 - 589年）、いはゆる六朝の都。倭國の王、讃は、卑弥呼と同じく、中國本土の政治情勢を注視しており、朝貢の機会を窺っていた。讃が求めたものは、後に、現れる「使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六國諸軍事安東大将軍倭國王」であった。讃は、自らを倭國王としている。使持節都督とは、軍政の官、倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓の六國諸軍事における安東大将軍を求めている。百濟の近肖古王が得た「鎮東将軍領楽浪太守」、高句麗の長壽王が得た「使持節都督営州諸軍事征東将軍高句麗王楽浪公」を意識し、この二人が楽浪太守、あるいは、楽浪公といふ形で制圧した遼東、遼西、晋平二郡を太守あるいは公として支配する叙任を求めたものであるが、讃は、倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六國の軍事権を求めた。秦韓は洛東江を北上し竹嶺を経由するルート、慕韓は海路で帯方へ向かうルート3を確保する上での要衝と思はれる。416年には、百濟の直支王（ときわう）が安帝から「使持節都督百濟諸軍事鎭東將軍百濟王」を得ており、讃は、これを上回る地位を要求していたことになる。基本的には、奴國、邪馬台國と同じく、中國皇帝の権威を得て、優位な立場に立とうとした。

ヤマトが、本格的に半島から来訪する人間を迎へるなり、半島に進出し得るのは、楽浪、帯方郡崩壊、314年以降、ヤマトであっても河内政権以降のこと、息長足姫尊（神功皇后）を支へる勢力が手段を選ばず、御子を守り、天皇とするために日本武尊に連なる勢力との死闘を制し、國を開く方向に変へしめ、事が可能となった。歴史的には、河内政権は半島との交易の利を手中にせんとし、交易パートナーであった任那加羅と手を結んだのであろう。卑弥呼の路線を踏襲するものであるが、軍事的緊張の半島にあって、その利を追求することは、邪馬台國の時代とは異った。中國大陸の北部も不安定となり、宋に「使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六國諸軍事安東大将軍倭國王」を求める頃には、ヤマトは抜き差しならぬ軍事介入のさなかにあった。

書紀の編者達は、よくよく分かっていたこの歴史を、魏志倭人伝、漢書、後漢書等々にも蓋をして、神話解釈を施し、歴史を書き換へた。任那、新羅、百濟、高麗、卓淳國から入り、いきなり新羅を攻め、新羅が従い、百濟も高麗も従い、天皇に朝貢する事態となったのは神意とした。この主張は、書紀編纂時の國家政策として、採用されたものであり、外交上の現実的な選択であった。

神功皇后五十二年(252年：252+120=372年)、百濟王が神功皇后に「七枝刀一口・七子鏡一面、及び種種の重寶を獻る。4」と記した。百濟の西、行きて七日強の地、谷那（こくな）の鐵山の鉄で作った七枝刀であり、百濟王が「天恩（みうつくしび）を垂れて、海の西を割きて我に賜へり。是に由りて、國の基（もとゐ）永（とこしへ）に固し。汝（いまし）當善く和好（よしび）を脩め、土物（くにつもの）を聚斂（つみあつ）めて、奉貢（みつぎたてまつ）る5。」ものとした。七枝刀には銘文が刻され、裏面には、「先の世以来未だこの刀を見ず、百濟王と世子（太子：貴須）、奇しくも聖音（聖王の導き：福音の音）に生く、故に倭王の為に旨（けい：詣、稽に通じる）して造りて□世に傳ふ6」とあり、大意は書紀と同じである。谷那は、黄海北道の谷山郡、時の百濟の王都、広州古邑（南漢山北麓）から七日の遠さ、371年に近肖古王が高句麗を攻め平壌を攻略した折に、この鉄山を手中に入れたとされる7が、銘文の表に、泰和四年（369年）とあり、2年前の製作で合致しない。泰和（太和）は東晋の年号であり、「七支刀□百兵（多くの兵）を辟（さ）く、宜（よろ）しく候王に供す□□□□」と、天子が侯王に下す慣用句となっている。侯王とは、天子から封せられたその地の王。東晋の年号ではじまり、東晋の帝が侯王に七支刀を下賜した、つまり百濟王、近肖古王に下賜したといふ文意になる。そう解釈すると表の銘文の意味が通らない。このため様々な異説が出されている。この刀が、石上神宮に奉納されたのは、その不明瞭さによるものであったのかもしれない。東晋が百濟に高句麗を攻めることを要請するためにこれを下賜したと釈せば、「辟百兵」の意味は通る。東晋から表の銘文のみで下賜されていた七支刀を「先世以来末有此刃」と釈し、裏に銘文を加へてヤマトの王に献上したといふ説も成り立つのかもしれない。

しかし、「奇生聖音故為倭王旨造」は非常に謙った言ひ回しである。369（249+120）年は、書紀では、荒田別（あらたわけ）、鹿我別（かがわけ）と木羅斤資（もくらこんし）、沙沙奴跪（ささなこ）等による加羅七國平定の年であり、372年に七枝刀等が齎（もたら）されている。369～372年といふ時代は、歴史的には、主役は百濟であった。高句麗と対峙するために廃帝の東晋と結び、新羅と対峙するためにヤマトと結んだ。百濟は北は高句麗の平壌を攻略し、遼西、晋平に至り、南はヤマトと連携し済州島までを平定、新たな東晋の帝、簡文帝より、鎮東将軍領楽浪太守を授けられた。この急激な軍事的膨張を支へる軍事力を維持することは、百濟にとっては非常な負担となったことであろう。ヤマトの軍事的支援が対新羅にとどまらず、更に対高句麗においても、喉から手が出るほど必要としたに違ひあるまい。

神功皇后六十二年(262年：262+120=382年)、新羅が朝貢しないので、襲津彦（そつびこ）を派遣して新羅を撃たせた8とある。書紀の本文ではそれだけの簡略な記述であるが、百濟記から、奇妙な事件について引用をした。

この年（壬午：382年）に、新羅を討つべく派遣した沙至比跪（さちひこ）が、新羅から美女二人を受け加羅を討つといふ事件が起こった。加羅王は家臣を率ゐて百濟へ逃れ、加羅王の妹、既殿至（けでんち）は大倭（やまと）に訴へ、それを聞ひた天皇は激怒された。天皇は木羅斤資（もくらこんし）を派遣し、沙至比跪を討ち、加羅を王の手に復した。沙至比跪の妹が皇宮に仕へ、沙至比跪はこの妹を通じて天皇の赦しを求めたが、不可と知り、石穴（いはつぼ）に入り死んだ9。

沙至比跪は襲津彦、妹は襲津彦の女（むすめ）磐之媛、天皇は大鷦鷯天皇（おほさざきのすめらみこと：仁德天皇）とされる10。沙至比跪は、百濟より新羅と結ぶ方向に向っており、美女二人と加羅を土産にすれば、風向きを変へることができる、とでもみたのであろうか。新羅の宮廷工作が、そのクラスに及んでいたことを暗示している。卑弥呼が共立された頃は、辰韓との提携がなされており、伝統的には馬韓と倭とは対立しがちであった。書紀においては、襲津彦は葛城襲津彦であり、新羅との軍事交渉に大功をあげた将軍であり、その娘は大鷦鷯天皇の皇后磐之媛である。本文においては、襲津彦は新羅を撃ち、死にもしていない。しかし、襲津彦は、後に失脚し、半島から戻ることなく、磐之媛の後年に暗い影を落しており、根も葉もない話ではなかったと思はれる。ヤマトは決して百濟一辺倒ではなかったことに留意する必要があろう。百濟とてヤマトに対する警戒心を新たにしたことであろう。

この反乱に対して、ヤマトはその収拾を、百濟の将軍、木羅斤資（もくらこんし）に頼った。しかし、何故、百濟記が、「天皇、大きに怒りたまひて、即ち木羅斤資を遣して」と、天皇が百濟の将軍を派遣するといふ表現を用ひたのであろう。譽田天皇（ほむたのすめらみこと：應神天皇、おうじんてんわう）の二十五年条に、木羅斤資はこの時、その新羅の婦を娶り、子（木滿致：もくまんち）を生み、木滿致が任那を専（もっぱら）にした11といふ百濟記を引用し、その木滿致が幼い久爾辛（くにしん）王（直支王の子）を補佐し、百濟の國政を執ったが、無礼が多く、天皇が呼びつけた12と記している。つまり、新羅が沙至比跪を取り込んだように、ヤマトは木羅斤資を取り込んでいた。一時期、任那は、木羅斤資により、維持される状態にあったことが伺へる。半島情勢は複雑な展開をみせていた。

神功皇后の記述においては、干支二運(120年)が自在に駆使され、上に見た時代にワープしたかと思っていると、突如、六十六年（AD266）条13に、【是年、晋の武帝の泰初の二年（AD266）。晉の起居の注に云く、「武帝の泰初の二年の十月に、倭（わ）の女王（ぢょわう）、譯を重ねて貢獻せしむ。」】と現実に戻っている。これは邪馬台（壱）國の壱与（いよ）のことであるが、今更120年前の三國時代に戻られても、平成元年の世界から明治元年の現実に引き戻されるようなもので、読者は頭がついてゆかず、意味をなさない現実と読み過ごしたことであろう。かくて、卑弥呼と壱与は倭の女王として記載されたものの、その歴史的業績は、神功皇后の新羅への進出と干支二運先の半島情勢の記述により、蓋をしてしまい込まれてしまった。そして、ヤマトの成立過程も定かでなくなった。

1) 魏志倭人伝　[次有斯馬](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi1.htm#斯馬国)

2) 魏志倭人伝　[倭人在帶方東南大海之中](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gishi1.htm#三國志　魏書)
3）三國志魏書辰韓伝に「辰韓、馬韓の東に在り。其の耆老（古老）世に傳ふ、自ら言ふに古の亡人にして秦役を避け來たりて韓國へ適く、馬韓、其の東界の地を割き與ふ。城柵有り。其の言語馬韓と同じうせず、國を名づくに邦と為し、弓を弧と為し、賊を寇と為し、行酒（酒を回し飲む）を行觴（しょう：盃）と為す。相ひ呼ぶに皆、徒と為し、秦人に似るところ有り。但し燕、齊の名づく物に非ず。樂浪人を名づけて阿殘と為す；東方人我を名づくに阿と為す、樂浪人、本は其の殘餘人と謂ふ。今、これを名づくに秦韓と為す者有り。始め六國有りて、稍分して十二國と為す。」とあり中國人は辰韓を秦韓と呼んだようであるが、ここでは、秦韓・慕韓は百濟・新羅と並記されており、秦韓は辰韓のなかで当時新羅に服していない地、慕韓は馬韓のなかで百濟に服していない地とする説をとりたい。辰韓には秦からの流民を居住させた地があり、列島にも渡来しており、倭と通じる者として秦韓とする地があったのであろう。慕韓は前方後円形墳、倭人の墓がある全羅南道の栄山江流域に比定される説が有力とされる。中國の会稽方面から山東半島を経て列島に稲作をもたらした中國人流民の後裔の地ともされ、倭人の楽浪への海路の中継拠点であり、また、五島列島、有明の勢力と全羅南道との交易ルートともされる。

4、5）書紀巻九　神功皇后　[五十二年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#五十二年秋九月)
6) 「泰和四年□月十一日丙午正陽造百練釦（鋼？）七支刀□辟百兵宜供候王□□□□作（以上表）、先世以来末有此刃百水慈（済）王（？）世子（？）奇生聖音故為倭王旨造傅□世（以上裏）」福山敏男氏の解読、神功皇后五十二年　注、日本書紀（二）岩波文庫。補注9-44「泰和四年（東晋海西公の太和四年、369）某（正か四か五）月十一日の純陽日中の時に、百練の鉄の七支（枝）刀を作る。以って百兵を辟除し、候王の供用とするのに宜しい。某（あるいは工房）これを作る」、裏には「先世以来未だ見なかったこのような刀を、百濟王と太子とは、生命を御恩に依存しているが故に、倭王の御旨によって造った。願わくはこの刀の永く後世伝わるように」の釈

7) 神功皇后五十二年　注、日本書紀（二）岩波文庫

8) 書紀巻九　神功皇后　[六十二年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#六十二年)

9) 【百濟記に云く、壬午年（AD382）に、新羅、貴國に奉（つかへまつ）らず。貴國（かしこきくに）、沙至比跪（さちひこ）を遣はして討たしむ。新羅人、美女（をみな）二人を莊飾（かざ）りて、津に迎へ誘（をこつ）る。沙至比跪、其の美女を受けて、反（かへ）りて加羅國を伐つ。加羅の國王（こきし）、己本旱岐（こほかんき）、及び兒百久至（こはくくち）、阿首至（あしゅら）、國沙利（こくさり）、伊羅麻酒（いらます）、爾汶至等（にもんちら）、其の人民（ひとくさ）を將（ゐ）て、百濟に來奔（に）ぐ。百濟、厚く遇（みあ）ふ。加羅の國王の妹（いろも）、既殿至（けでんち）、大倭に向（まうで）きて啓（まう）して云す、「天皇、沙至比跪を遣（つかは）して、新羅を討たしめたまふ。而（しか）るを新羅の美女を納（と）りて、捨てて討たず。反りて我が國を滅す。兄弟（はらから）、人民（ひとくさ）、皆流沈（さすら）へぬ。憂へ思ふにえ任（しの）びず。故、以て來り啓す。」天皇、大きに怒りたまひて、即ち木羅斤資（もくらこんし）を遣して、兵衆（いくさびと）を領（ひき）ゐて加羅に來集（まうつど）ひて、其の社稷（くに）を復（かへ）したまふといふ。一に云く、沙至比跪、天皇の怒を知りて、敢へて公（あらは）に還らず。乃ち自ら竄伏（かく）る。其の妹、皇宮（みかど）に幸（つかへまつ）ること有り。比跪、密に使人（つかひ）を遣して、天皇の怒解けぬるや不やを間はしむ。妹、乃ち夢（いめ）に託（つ）けて言（まう）す、「今夜（きぞ）の夢に沙至比跪を見たり。」天皇、大きに怒りて云（のたま）はく、「比跪、何ぞ敢へて來る。」妹（いろも）、皇言（おほみこと）を以て報（かへりごと）す。比跪、兔（ゆるさ）れざることを知りて、石穴（いはつぼ）に入りて死ぬといふ。】

10) 神功皇后六十二年　補注9-25、日本書紀（二）岩波文庫

11) 【百濟記に云はく、木滿致（もくまんち）は、是、木羅斤資（もくらこんし）、新羅を討ちし時に、其の國の婦（をみな）を娶（ま）きて、生む所なり。其の父の功を以て、任那に專（たくめ）なり。我が國に來入りて、貴國（かしこきくに）に往還（かよ）ふ。制（のり）を天朝（みかど）に承（うけたまは）りて、我が國の政を執る。權重（いきほひ）、世に當れり。然るを天朝（みかど）、其の暴（あしき）を聞しめして召すといふ。】

12) 書紀巻十　應神天皇　[廿五年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿五年)

13) 書紀巻九　神功皇后　[六十六年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki22.htm#六十六年)

**対外観　―　ヤマトが求めたもの**

広開土王碑によれば、倭は辛卯年（391年）に百濟と新羅を破り臣民としていた1。氣長足姫尊（神功皇后）が行ったとされるような遠征が確認できるのは干支二運（120年）を進めたこの頃となる。譽田天皇（應神天皇）三年(272年:392年)に、百濟の辰斯王（しんしわう）が天皇に禮を失したので、紀角宿禰（きのつのすくね）・羽田矢代宿禰（はたのやしろのすくね）・石川宿禰（いしかはのすくね）・木菟宿禰（つくのすくね）を派遣して詰問し、百濟國は辰斯王を殺し謝罪し、紀角宿禰等は阿花（あくゑ）を立てて王（こきし）としている2。この年、広開土王（談德）が漢江（ハンガン）と臨津江(イムジンガン)が合流する地点の百濟の關彌城(カンミジョウ）を20日間包囲して落としており3、百濟が高句麗の影響下に入った可能性があり、そのことを詰問して再びヤマトの影響下においたのであろう。百濟本紀においても、その敗戦、辰斯王の死は確認できるが、狩りの後、狗原行宮（くはらあんぐう）で死んでおり4、書紀とは合致はしない。新羅は同年、高句麗に質を出していた5。翌年、倭人が新羅の金城を、五日間包囲をしたが、逆に獨山で夾撃され大敗をしている6。広開土王（談德）が本格的な攻勢に出たのが396年、自ら水軍を率ゐて百濟を攻め、「五十八城、村七百、残王弟並びに大臣十人を将いて、師を旋し都に還す7。」と石碑に刻した。百濟本紀　阿莘王の四年（395年）によれば、高句麗に大敗をして死者八千人に及んでいる8。しかし、百濟本紀には、阿莘王の弟や大臣が高句麗に連れ去られたといふ記述はない。譽田天皇（應神天皇）八年（277年：397年）に百濟記を引いて、百濟では枕彌多禮（とむたれ：斉州島）、及び峴南（けんなむ：不明）、支侵（ししむ：忠清南道洪城付近）、谷那（こくな：全羅南道谷城）、東韓の地を奪れ、王子直支を日本（やまと）へ送ったと記している9。高句麗から攻められたのであれば半島の南の外に叩き出される敗戦であり亡國となり、この時期にはあり得ない。新羅から攻め込まれた可能性があるが、新羅本紀にも百濟本紀にもそのような記述はなく、理解に苦しむ。阿莘王の六年（397年）に「王、倭國と好を結び、太子、腆支を質と爲す10。」とあり、百濟は、倭國の支援により立て直し、八年に高句麗に対して兵馬を徴し、十一年には新羅を攻めている11。譽田天皇（應神天皇）の十六年（285年：405年）に、百濟の阿花王（阿莘王）が亡くなったとき、直支王を帰して、東韓の地（甘羅城・高難城・爾林城）を与へたとあり、ヤマトは支配権を有しているとした。しかし、弓月（ゆづき）君をヤマトに迎へようとしたが、新羅が道を閉ざし、木菟宿禰等、精兵を送り、連れ帰ることができた状態でもあった12。半島の情勢は非常に流動的なものとなっていた。

中國の北においても同様であり、西晋が八王の乱で弱体化し、316年に劉聡により滅ぼされて以降北魏が436年に北燕、439年に北涼を滅ぼし華北を統一するまでは、五胡十六國といふ不安定な状態にあり、半島諸國やヤマトの目は南の東晋に向いていた。晋の王族であった司馬睿が呉の都であった建業に逃れ、317年帝位について晋を再興したのが東晋である。東晋とて安定していたとは言ひがたい。そうであっても、近肖古王が高句麗と対峙するために369年、廃帝（はいてい：海西公、かいせいこう）の東晋と結び、372年新たに即位した、簡文帝（かんぶんてい）から「鎮東将軍領楽浪太守」に、416年には、直支王が安帝から「使持節都督百濟諸軍事鎭東將軍百濟王」に叙せられていた。廣開土王の使は407年北燕に入貢、その子長壽王の使は安帝義熙九年（413年）東晋に入貢、「高句麗王楽浪郡公」に叙せられた。倭王讃の使も同年東晋に入貢、永初二年（421年）、元嘉二年（425年）にも東晋の後の宋に入貢させたことはすでに見た。もはや、かつての強大な漢帝國を仰ぎ見ての東夷の入貢とは異なり、親中國勢力として、北方騎馬民族に対する抑止力とする側面を有してきていた。百濟の直支王が「使持節都督百濟諸軍事鎭東將軍百濟王」に叙せられたことは、ヤマトに対して独自の立場を築くために、大きな役割を果たしたと思はれる。いささかも不安定な中國の王朝に入貢してでも、叙任を受けたい。そこで求められたことは、軍事面だけではなかった。

譽田天皇（應神天皇）の七年（276年：396年）に高麗人、百濟人、任那人、新羅人を使って韓人池を作らせている13。十四年（283年：403年）には百濟の王が縫衣工女を献上している14。縫衣工女を”きぬぬひをみな”と訓じており、衣服にするには、製針、裁縫技術が欠かせない。帛布ともなれば、骨や木、銅、青銅の針でなく、良質の鉄製針が求められたのであろう。同年に弓月君が百濟より人夫百廿縣を領ゐて歸化してきた15。弓月（ゆづき）君は融通王ともされ、秦氏の系統である。

翌十五年には、百濟王は、阿直伎（あちき）を派遣し、良馬二匹を献上している16。廐坂（うまやさか）の由来である。阿直伎は、坂上田麻呂の祖であり、続日本紀、延暦四年（785年）の坂上田麻呂等の上表では、後漢靈帝の曾孫、阿智王の後であり、帶方に出た一派で、皆、才藝有り、近き者、百濟、高麗の間に住んでいた。帶方の八腹氏はことごとく従ひ、今在る諸國の漢人はその子孫である17と述べている。この阿直伎の推薦で翌十六年、王仁（わに）が帰化してくる18。続日本紀、延暦十年（791年）四月の文忌寸（ふみのいみき）等最弟（もおと）等の上言によれば、王仁は漢高帝の後、鸞（らん）、その後、王狗（わく）と云ひ、そのときに百濟に至るとしている19。文首（ふみのおびと）ともされ、文（ふみ）、武生（たけふ）の祖となり、阿直伎の子孫、東文（倭漢書：やまとのふみ）氏に対して西文（河内書：かふちのふみ)氏とされる。二十年（289年：409年）には、阿知使主（あちのおみ：阿直伎）の子、都加使主（つかのおみ）が十七縣を率ゐて帰化してきた20。半島や中國との外交における文書作成、交易の管理といふものへの実用性から「文」に対する関心が高まった、といふ域は超へている。

書紀では、太子、菟道稚郎子（うぢのわきいらつこ）が王仁に諸（もろもろ）の典籍を習ったとしている。古事記は、論語十卷、千字文一卷を齎（もたら）したとする。千字文は、梁の武帝（502 - 549年）が、文官の周興嗣（しゅうこうし：470 - 521年）に作らせたものであり、時代的には合はない。書紀は典籍とし、四書五経を念頭に置いていたのであろう。書紀は、菟道稚郎子がそれをすぐに理解した21とするが、これは願望である。文字が読めれば意味が分るといふものではない。王朝の禮楽、祭祀や軍事、租税、司法、教育、職制官位等を貫くものの考へ方といふものは、実際それを運営するといふ社会的発展を経ずして、理解できるものではない。論語は漢代以降の中國においては、太子に帝王学を教へる形で編纂注釈されてきた。血縁・地縁ではなく公、國家を優先させる、そういふ枠組みづくりが現実課題となり、經典の理解が得られるのは、やはり、日本（やまと）では聖徳太子の時代を待たねばなるまい。しかし、強大な中國の王朝を支へるもの、すざまじいばかりの物量と大軍を動かすもの、その根幹に何か自分達にはないものがあることに気付いていたことは間違ひあるまい。

高句麗が広開土王、長壽王の時代に強國となったのは、小獣林王（しょうじゅうりんおう）の治世にあった。高句麗本紀によれば、二年(372年)に、前秦の王の苻堅（ふけん）が使者と僧侶の順道を遣はし、小獣林王に佛像・經文を送ってきた。当時、苻堅は名宰相で名将の王猛を用ひ、370年に前燕を討ち、376年には前涼を滅ぼす勢ひがあり、自身は儒者として、教育や戸籍制度、農業振興、街道整備に力を入れていた。小獣林王は仏法を導入したのであるが、大學をたて、子弟を敎育し、律令を頒った22とあり、儒家的な國家運営をも目指していたことが伺へる。律令を頒つとは律、刑罰に関するものと令、行政に関するものを分けることであり、中央集権的な國家を形成する上で重要な過程となる。部族の勢力を統一して力を結集させるためには血縁、地縁をはなれて、律と令が行はれなければならない。それを機能させるための身分制度が整備されねばならない。その詳細については知られていないが、目指した方向は想像されよう。その口火を切っていたのが、百濟の近肖古王であった。楽浪郡、帯方郡の漢人を取り込んで、國家の建設に向かった。それ故に、ヤマトにも先に見たような人間や文物を送り込むことができた。百濟も高句麗も朝貢し、王として叙任を求めたのであるが、それは、律と令を備へる國づくりをめざして、制度文物を見習ふといふ動機が鮮明となってゆく方向にあった。

書紀は、應神天皇の二十八年（297年：417年）に、高麗（高句麗）王が、使者を派遣して朝貢してきたが、その表に、「高麗の王、日本國に敎ふ。」と記されており、太子、菟道稚郎子が、怒って高麗の使者を責め、無禮としてその表を破った23、と記している。413年に使者を東晋に入貢させた高句麗の長壽王は、「高句麗王楽浪郡公」に叙せられたが、同年入貢したヤマトの讃には何もなかった。百濟を通じて敵対している高句麗からの使者があった。意外に両者には往来があったようで、一筋縄ではゆかない。高句麗が何を教へようとしたかは分からないが、軍事ばかりでは駄目であり、國の漢文化化に関するものであったろう。明治時代に列國との交渉をすすめるために、鹿鳴館にみられた欧化政策のごときものであったろうか。王仁の教へることはスラスラと分かった菟道稚郎子が無礼として、表を破ったといふのは、よほど悔しかったと見える。

三十七年（306年:426年）に、縫工女を求めて、阿知使主・都加使主を呉（宋）に遣したが、高句麗より先の道が分からず、高句麗王から道案内を二人つけてもらって辿り着いたといふ24。洛陽への道は心得ていたが、宋の建康（けんこう）への道は不案内であったと見える。それからすれば、413年、永初二年（421年）の讃の使者も、高句麗に道案内を求めていたのかもしれない。元嘉二年（425年）には、讃はいかにも西晋の司馬氏の後裔とまがうような、漢人、司馬曹達を用ひており、自前のルートを築いていたとみへ、書紀の編者も向かった先は呉でなく宋であることは承知していた。宋を呉とし時代感覚を撹乱したのは、讃や珍など倭の五王の宋への入貢を隠す意図であったろう。讃は譽田天皇（應神天皇）あるいは大鷦鷯天皇（仁德天皇）とみられているが、書紀においては、その気配も見られない。

倭の五王が求めたものは、宋書、倭國伝に見られる。彼等が得たものは「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事、安東大将軍、倭王」であった。我が祖先は海を隔てているが、山を越へ川を渡り、自ら甲冑を身に纏ひ、國内東國五十五國、西國六十六國、渡海して半島九十五國を平定し、都を開き立派な畿内を造った。代々、春と夏にはあやまたず、「天極に帰崇（天朝を崇めたてまつり）」、百濟を経て方物（産地の品々）を船に積み朝貢しようとした。ところが無道にも、高句麗が邪魔をするばかりか、掠め取り、使節を殺した。我が王「済」はこれを憂慮し、怒り、義の声をあげて高句麗を討つために大兵を挙げたが、不幸にして逝去した。今は喪中にあり、軍を動かすことはできないが、「もし帝徳の覆戴（めぐみ）」を得て「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事、安東大将軍、倭王」を得る事ができれば、命を惜しまず強敵、高句麗を討ちましょう23、と上表しての結果である。

ここに見られる口上は、書紀においては、新羅や百濟が日本（やまと）の聖王に朝貢してくるフレーズに転用されている。しかし、半島諸國からみて、中國の聖王と云へば思い当たる王はあまたあるが、列島の聖王となれば誰か？御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）、氣長足姫尊（神功皇后）、あるひは、神日本磐余彦天皇（神武天皇）か？中國が齎（もたら）す制度や文物が倭にありや？半島の優れた流浪漢人や韓人、あるいは王族の王子達が、確かに、海を越へて列島に帰化してきた。何が彼等を引き付けたのか？半島にまで進出するヤマトの軍事力に希望を託したのであろうか？五王は、半島での軍事権を求めるのは、半島や列島から中國への安定した朝貢への道を維持するためであると上奏した。奴國、邪馬台國に亘り、倭は一貫して親漢であり、中國側からすれば、卑弥呼はまさにその立役者であった。御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）、氣長足姫尊（神功皇后）、神日本磐余彦天皇（神武天皇）は分からなくとも、戦乱にあった大陸や半島を尻目に、半世紀以上の平和と繁栄を享受した邪馬台國の卑弥呼は分かった。その伝統があったからこそ、列島の五王が、漢人を求め、優遇していると知れば、楽浪や帯方からも叩き出された漢人は、列島に生きる道があると思へたのであろう。ヤマトが聖王を名乗るには、隋の煬帝に渡された「日出る処の天子、書を、日没する処の天子に致す。」を待たねばなるまい。

隋といふ統一された巨大帝國の出現、遣隋使の報告から、列島そのものに脅威が及ぶことの懸念が現実化した聖徳太子の時代を経て、唐・新羅との白村江（はくすきえ）での戦いに大敗を喫した時代を生きる書紀の編者達にとっては、五王達の行動は、國を過る危険極まりないものと映っていた。書紀は國書であり、大陸や半島の政権に読まれることを前提としている。外交において、中國へ臣従していた口実に用ひられる記述は、断固として、削除をするか、意味不明なものとしなければならなかった。しかし、それだけでは足りないことも、ひしひしと感じていた。独自の建國の原理、独自に自立的に発展をしてきた、日本（やまと）の歴史がなければならない。それは、聖徳太子、遣隋使の時代を経て、醸成されてきた認識であった。日本といふ国号を用ひ、その決意を示されたのが天武天皇の治世であった。これこそが、日本を百濟、高句麗や新羅と異なる道を歩ませた。神日本磐余彦天皇（神武天皇）が高天原の理想を地上に現実化し、氣長足姫尊（神功皇后）が、半島においても、その意を実現した、と神話を盾にし、現実の外交のバックグラウンドにした。

1) 「百残（百濟）と新羅は舊く是れ属民。由り来き朝貢す。而して倭、辛卯年（391年）を以て来り、渡海して百残＊＊新羅を破り、以て臣民と為す。」[広開土王碑](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/koutaiou/koutaiou_gen.htm)

2) 「是歳、百濟の辰斯王立ちて、貴國の天皇のみために失禮し。故、紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を遣して、其の无禮き状を嘖譲はしむ。是れに由りて、百濟國、辰斯王を殺して、謝ひにき。紀角宿禰等、便に阿花を立てて王として歸れり。」書紀巻十　應神天皇　[三年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#三年冬十月（かむなづき）辛未)

3)「（元年）冬十月、百濟の關彌城を攻陷す。その城は四面峭絶（しょうぜつ＝けわしい）、海水を環に繞（めぐ）らす。王、軍を七道に分かち、攻撃二十日、乃ち拔く。」三國史記　高句麗本紀　[廣開土王](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/koukuri/180619yomi.htm)

4) 「秋七月に高句麗王、談德、兵四萬を帥ゐて、來り北鄙を攻む。石峴等十餘城陷る。王、談德能く用兵すを聞く。出でて拒むことを得ず、漢水の北諸部落多く沒す。冬十月、高句麗、關彌城を攻め拔く。王、狗原に田（田猟）し、旬（十日）經て返らず。十一月、狗原行宮にて薨る」三國史記　百濟本紀　辰斯王　[八年](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/kudara/250316gen.htm)

5) 「春正月、高句麗、使を遣す。王、高句麗の強盛なるを以て、伊の大西知の子、実聖を送り質とす。」新羅本紀　奈勿 尼師今　[三十七年](http://toron.chu.jp/record/3shiki/shiragi17.html)

6) 新羅本紀　奈勿 尼師今　[三十八年](http://toron.chu.jp/record/3shiki/shiragi17.html)

7) 「以て六年丙申（396年）王躬ら水軍を率ゐて科（＝百？）残を討つ。國軍■■壹八城を首め（以下城名省略）を攻め取る。・・・百残王、困逼し獻じて男女生白（＝口？）一千人、細布千匝を出す。王に歸りて自ら誓ふ。今より以後、永に奴客と爲す。太王恩赦■迷之録其の後之に順ひて誠。是に■五十八城、村七百、残王弟並びに大臣十人を将いて、師を旋し都に還す。」[広開土王碑](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/koutaiou/koutaiou_gen.htm)

8) 「麗王、談德、親ら兵七千を帥いて、浿水（ばいすい）の上に陣し戰を拒む。我軍大敗し、死者八千人。」三國史記　百濟本紀　阿莘王　[四年](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/kudara/250317gen.htm)

9) 【百濟記に云ふ、阿花王、立ちて貴國に禮无し。故に、我が枕彌多禮、及び峴南、支侵、谷那、東韓の地を奪はれぬ。是を以て、王子直支を天朝に遣して、先王の好を脩む。】書紀巻十　應神天皇　[八年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#八年春三月（やよひ）)

10) 「夏五月、王倭國と好を結び、以て太子、腆支を質と爲す。」三國史記　百濟本紀　阿莘王　[六年](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/kudara/250317gen.htm)

11) 三國史記　百濟本紀　阿莘王　[八年、十一年](http://www001.upp.so-net.ne.jp/dassai/sangokushiki/kudara/250317gen.htm)

12) 「是歳、百濟の阿花王薨りぬ。天皇、直支王を召して謂りて曰はく、「汝、國に返りて位に嗣げ。」仍りて且、東韓の地を賜ひて遣す。【東韓は、甘羅城・高難城・爾林城是なり。】
八月に、平群木菟宿禰、的戸田宿禰を加羅に遣す。仍りて精兵を授けて、詔して曰はく、「襲津彦、久に還こず。必ず新羅人の拒くに由りて滞れるならむ。汝等、急に往りて新羅を撃ちて、其の道路を披け。」是に、木菟宿禰等、精兵を進めて、新羅の境に莅む。新羅王、愕じて其の罪に服しぬ。乃ち弓月の人夫を率て、襲津彦と共に來り。」書紀巻十　應神天皇　[十六年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十六年春二月（きさらぎ）)

13) 「高麗人、百濟人、任那人、新羅人、並に來朝り。時に武内宿禰に命して、諸の韓人等を領ゐて池を作らしむ。因りて、池を名けて韓人池と號ふ。」書紀巻十　應神天皇　[七年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#七年秋九月（ながづき）)

14) 「百濟の王、縫衣工女を貢る。眞毛津と曰ふ。是、今の來目衣縫の始祖なり。」書紀巻十　應神天皇　[十四年](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/shoki23.htm#十四年春二月（きさらぎ）)

15) 前掲書

16) 「百濟王、阿直伎を遣して、良馬二匹を貢る。即ち輕の坂上の廐に養はしむ。因りて阿直岐を以て掌り飼はしむ。故、其の馬養ひ處を號けて、廐坂と曰ふ。阿直岐、亦能く經典を讀めり。即ち、太子、菟道稚郎子、師としたまふ。是に、天皇、阿直岐に問ひて曰はく、「如し汝に勝れる博士、亦有りや。」對へて曰す、「王仁といふ者有り。是秀れたり。」時に上毛野君の祖、荒田別、巫別を百濟に遣して、仍りてを徴さしむ。其れ阿直岐は、阿直岐史の始祖なり。」書紀巻十　應神天皇　[十五年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十五年秋八月（はづき）)

17) 、「右衞士督從三位兼下総守坂上大忌寸苅田麻呂等上表して言す。臣等、本より是れ後漢靈帝の曾孫、阿智王の後なり。漢の祚、魏にる遷。阿智王、神牛教（牛を尊ぶ教、仏教か？）に因りて、出でて帶方へ行く。忽ち寳帶瑞を得る。其の像宮城に似たり。ここに國邑を建つ。其の人、庶くを育つ。後に父兄を召して告げて曰く、吾、聞く、東國に聖主有り、何ぞ不歸にして從はむか。若し久しく此處に居て、覆滅を取らむと恐れ、即ち母弟迂興徳、及び七姓の民を携へて、歸化、來朝す。是れ則ち譽田天皇の治天下の御世なり。是に阿智王、奏して請ひて曰く、臣、舊居帶方に在り。人民男女皆、才藝有り。近き者、百濟高麗の間に寓す。心、猶豫を懷き未だ去就すを知らず。伏して天恩を願ふ、使を遣し追ひてこれを召さむことを。乃ち勅して臣八腹氏を遣す。頭を分け遣を發す。其の人民男女。落を擧げ使に隨ひて盡く來く。永に公民と爲ること、積年累代、以て今に至る。今在る諸國の漢人、亦是これ其の後なり。」[続日本紀](http://www.j-texts.com/jodai/shoku38.html)　延暦四年

18) 書紀巻十　應神天皇　[十六年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十六年春二月（きさらぎ）)

19) 「漢高帝の後、鸞（らん）と曰ふ。鸞の後、王狗、転じて百濟に至る。百濟、久素王（貴首王）の時。聖朝（日本）、使を遣し文人を徴召す。久素王、即ち狗孫王仁を以て貢る。是れ文（ふみ）、武生（たけふ）等の祖なり。」「是に最弟及び真象等八人姓宿禰を賜る。」[続日本紀](http://www.j-texts.com/jodai/shoku40.html)　延暦十年

20) 「倭漢直の祖、阿知使主、其の子、都加使主、並びに己が黨類十七縣を率て、來歸り。」書紀巻十　應神天皇　[廿年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿年秋九月（ながづき）)

21) 書紀巻十　應神天皇　[十六年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki23.htm#十六年春二月（きさらぎ）)

22) 「二年(372年)、夏六月、秦王苻堅（ふけん）、使及び浮屠（仏陀のこと覚者）順道を遣はし、佛像・經文を送る。王、使を遣はし廻謝（返礼）し、以て方物を貢る。大學を立て、子弟を敎育す。三年、始めて律令を頒つ。四年、僧の阿道來る。五年、春二月、始めて肖門寺を創る。以て順道を置く。又、伊弗蘭寺を創り、以て阿道を置く。此れ海東の佛法の始。」三國史記　高句麗本紀　小獣林王

23)「高麗王、使を遣して朝貢る。因りて表上れり。其の表に曰く、「高麗の王、日本國（やまと）に敎ふ。」時に、太子、菟道稚郎子、其の表を讀みて、怒りて、高麗の使を責むるに、表の状の禮無きことを以てして、則ち其の表を破つ。」書紀巻十　應神天皇　[廿八年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#廿八年秋九月（ながづき）)

24) 「阿知使主・都加使主を呉に遣して、縫工女（きぬぬひめ）を求めしむ。爰に、阿知使主等、高麗國に渡りて、呉に逹らむと欲ふ。則ち高麗に至れども、更に道路を知らず。道を知る者を高麗に乞ふ。高麗の王（こきし）、乃ち久禮波（くれは）・久禮志（くれし）、二人を副へて、導者とす。是に由りて、呉に通るを得たり。呉の王、是に、工女兄媛（ぬひめ）・弟媛（をとひめ）、呉織（くれじゃとり）、穴織（あなはとり）、四の婦女（をみな）を與ふ。」書紀巻十　應神天皇　[卅七年](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/shoki24.htm#卅七年春二月（きさらぎ）)

25)「 倭國は高麗の東南大海の中にあり、世々貢職（みつぎ）を修む。
高祖の永初二年（421）、詔していわく、『倭讃、万里貢を修む。遠誠宜しく甄（あらわ）すべく、除授を賜うべし。』と。
太祖の元嘉二年（425）、讃、また司馬曹達を遣わして表（ひょう）を奉り方物を献ず。讃死して弟珍立つ。使いを遣わして貢献し、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六國諸軍事、安東大将軍、倭國王と称し、表して除正せられんことを求む。詔して安東将軍・倭國王に除す。珍、また倭隋等十三人を平西・征虜・冠軍・輔國将軍の号に除正（叙任）せんことを求む。詔して並びに聴（ゆる）す。
二十年（443）、倭國王済、使いを遣わして奉献す。また以て安東将軍・倭國王となす。
二十八年（451）、使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事を加え、安東将軍は故（もと）のごとく、ならびに上（たてまつ）る所の二十三人を軍郡に除す。済死す。世子興、使を遣わして貢献す。
世祖の大明六年（462）、詔していわく、『倭王世子興、奕世（えきせい：代々）戴（すなわ）ち忠、藩を外海に作（な）し、化を稟（う）け境を寧（やす）んじ、恭（うやうや）しく貢職を修め、新たに辺業を嗣（つ）ぐ。宜しく爵号を授くべく、安東将軍・倭國王とすべし。』と。興死して弟武立ち、自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七國諸軍事、安東大将軍、倭國王と称す。
順帝の昇明二年（478）、使を遣わして表を上（たてまつ）る。いわく、『封國（倭國）は偏遠にして、藩を外に作（な）す。昔より祖禰（そでい：父祖）躬ら甲冑（かっちゅう）を擐（つらぬ）き、山川を跋渉（ばつしょう：山を越え、川を渡る）し、寧処（ねいしょ：ゆっくりする）に遑（いとま）あらず。東は毛人を征すること五十五國、西は衆夷を服すること六十六國、渡りて海北を平ぐること九十五國、王道融泰（ゆうたい：融合して豊か）にして、土（くに）を廓（ひら）き、畿（き）を遐（はるか：四方に広がる）にす。累葉（代々）朝宗（春夏に拝謁する）して歳に愆（あやま）らず。臣、下愚なりといえども、忝（かたじけ）なくも先緒を胤（つ）ぎ、統（す）ぶる所を駆率し、天極に帰崇し、道百濟を遙（へ）て、船舫を装治す。しかるに句麗（くり）無道にして、図りて見呑（けんのん）を欲し、辺隷（へんれい）を掠抄（かすめとる）し、虔劉（けんりゅう：ころす）して已まず。毎（つね）に稽滞を致し、以て良風を失い、路に進むというといえども、あるいは通じあるいは不（しか）らず。臣が亡考（ぼうこう）済、実に寇讐（こうしゅう）の天路を壅塞（ようそく：宋への道を塞ぐ）するを忿（いか）り、控弦（こうげん）百万、義声に感激し、方（まさ）に大挙せんと欲せしも、奄（にわ）かに父兄を喪（うしな）い、垂成（すいせい）の功をして一簣（き）を獲ざらしむ。居（むな）しく諒闇（喪中）にあり兵甲を動かさず。これを以て、偃息（えんそく）して未だ捷（か）たざりき。今に至りて、甲を練り兵を治め、父兄の志を申（の）べんと欲す。義士虎賁（こほん）文武功を効（いた）し、白刃前に交わるともまた顧みざる所なり。もし帝徳の覆戴（ふくさい：めぐみ）を以て、この彊敵を摧（くじ）き克（よ）く方難を靖（やす）んぜば、前功を替えることなけん。窃（ひそ）かに自ら開府儀同三司を仮し、その余は咸（み）な仮授して以て忠節を勧む。』と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事、安東大将軍、倭王に除す。」宋書　倭國伝　（岩波文庫）

**むすびに**

戦後の昭和を生きた日本人は、分裂していた中國の内から、共産党中國が出現してきたとはいへ、ソ連を修正主義者と厳しく批判を加へ袂を分かち、指導部内部抗争を、反革命の名のもとに、自己批判を求める文化大革命といふ人民を巻き込んだ未曽有の粛清にエスカレートさせ、政治経済の致命的な停滞を招く一方、突如米國と國交を結ぶなど、中國を大國といふより、むしろ、振幅の激しい何を起すか分からない國として、その対応にとまどってきた。しかし、平成の時代を生きる日本人にとって、中國の様相はずいぶんと変化している。万元戸を生み出した改革解放の経済政策以降、中國は、南の沿岸部に始まる外資導入から、あれよあれよと巨大市場を出現させた。外資もさることながら、この経済発展を促す資本は、農地と農民を買い叩くことで蓄積され、そうした資本を利用できる國民の１～２割の層がそれらを再投資に回し、高度経済成長を図り、環境破壊を引き起こしつつ、GNPを飛躍的に増大させたものの、2002年に中国社会科学院社会研究所自らが5つの階級10の階層と分析する深刻な格差社会を作りだしてきた。一方、核を保有し、大陸間弾道弾、原子力潜水艦そして軍事衛星破壊、空母に至る軍事力増強が行はれ、矛盾を抱へているとはいへ、今や、中國は大國への途上にあると言って過言ではあるまい。過去の大帝国経営とて同様であり、農民の反乱で新たな革命を迎へるといふのも、今にはじまったことではない。それらを満たすエネルギーや資源、食糧の確保に向かうさまは、「鵬が南冥に向かうや、海面をはばたくこと三千里、吹き上げる風に舞い上ること九万里。六月の息（風）に乗って飛び去る。」のごとく、まさに、台風である。蝉（せみ）と小鳩が九万里も飛んで何になると鵬を笑ったそうであるが、「小知は大知に及ばぬ。」と荘子は、「逍遥遊第一」に記した。かつて、いく度となく大帝國を営んだ中國の知には、蝉と小鳩の知では想像もつかぬものがあろう。

反日外交において、対日歴史認識を共通にしていた中韓両國も、中國社会科学院傘下の歴史研究組織が高句麗の歴史を「中國の地方史」と位置付ける「東北工程（プロジェクト）」を推進して以来、風向きが変った。中國のプレゼンスがかほどに大きくなっている以上、北朝鮮一帯の過去の歴史を中國の地方史とするとなれば、その意図するところは、北朝鮮、韓國、とくに北朝鮮にとっては脅威である。魏の明帝が公孫氏を滅ぼした歴史が蘇る。北朝鮮が中國に飲み込まれてしまう、ということはあり得ないことではない。そうありたいと思う人間が居ておかしくないのと同様に、米國と手を結び、それを避けようと思う人間も居ておかしくはない。北朝鮮が米國との直接対話を望むといふことは、中國に対峙できる力は米國にしかないといふ北朝鮮の現実的判断であり、切実なものと思はれる。我々は、どうやら、書紀の編者達が抱いた脅威が理解できる時代を迎へている、米中露という大国の中で生きる半島や列島の人間にとって、書紀の志は古くて新しい。如何。

平成21年（2009年）3月10日初稿
平成21年3月30日　加筆

　平成21年4月20日　加筆